

中能登町

大槻・春木遺跡群

(大槻ブンゾ遺跡、大槻ヤマゾ遺跡、大槻キッチャマエダ遺跡、
春木マエダ遺跡、春木A・B遺跡、春木キッショウ遺跡、
春木ハチノタ遺跡)

2009

石川県教育委員会
(財) 石川県埋蔵文化財センター

おおづき はる き
大槻・春木遺跡群

(大槻ブンゾ遺跡、大槻ヤマゾ遺跡、大槻キッチャマエダ遺跡、
春木マエダ遺跡、春木A・B遺跡、春木キッショウ遺跡、
春木ハチノタ遺跡)

2 0 0 9

石川県教育委員会
(財) 石川県埋蔵文化財センター

例　　言

- 1 本書は大槻・春木遺跡群（大槻ブンゾ遺跡、大槻ヤマゾ遺跡、大槻キッチャマエダ遺跡、春木マエダ遺跡、春木A・B遺跡、春木キッショウ遺跡、春木ハチノタ遺跡）の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は鹿島郡中能登町大槻、春木地内である。
- 3 調査原因は県営は場整備事業（鳥屋西部地区）であり、同事業を所管する石川県農林水産部農業基盤整備課（現農業基盤課）が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は財団法人石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて、平成17（2005）年度から平成20（2008）年度に実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書刊行である。
- 5 調査に係る費用は石川県農林水産部農業基盤課（旧農業基盤整備課）と石川県教育委員会が文化庁の補助を受けて負担した。
- 6 現地調査は平成17（2005）年度及び平成18（2006）年度に実施した。期間・面積・担当課・担当者（当時）は以下のとおりである。
 - (1) 平成17（2005）年度
期間 平成17（2005）年7月28日～同年12月21日
面積 1,500m²
担当課 調査部調査第2課
担当者 安中哲徳（主任主事）、森 由佳（嘱託）
 - (2) 平成18（2006）年度
期間 平成18（2006）年5月15日～同年7月5日、同年11月8日～同年12月21日
面積 1,290m²
担当課 調査部調査第2課
担当者 白田義彦（調査専門員）、安中哲徳（主任主事）、森 由佳（嘱託）
- 7 出土品整理は平成17（2005）年度から平成20（2008）年度に実施し、平成17年度～平成19年度は企画部整理課、平成20年度は調査部が担当した。
- 8 自然科学分析は平成20（2008）年度にパリノ・サーヴェイ株式会社（木製品樹種同定、岩石鑑定、C14年代測定）に委託して行った。
- 9 報告書の刊行は平成20（2008）年度に実施し、調査部県関係調査グループが担当した。執筆分担は下記のとおりである。編集は安中哲徳（県関係調査グループ主任主事）が行った。
 - 第1～3章第1節、第5～8章、第10章：安中哲徳（調査部県関係調査グループ主任主事）
 - 第3章第2節、第4章：森 由佳（調査部県関係調査グループ嘱託）
 - 第3章第3節、第9章：林 大智（調査部県関係調査グループ主任主事）
- 10 発掘調査には下記の機関、個人の協力を得た。
石川県農林水産部農業基盤課（旧農業基盤整備課）、中能登農林総合事務所、中能登町教育委員会、安井重幸、山本一信、楠 正勝、大藤雅男（順不同、敬称略）
- 11 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 12 本書についての凡例は下記のとおりである。
 - (1) 方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標第Ⅴ系に準拠した。
 - (2) 水平基準は海拔高であり、T. P.（東京湾平均海面標高）による。

(3) 出土遺物番号は挿図と写真で対応する。

(4) 須恵器は断面を黒塗りにした。

(5) 遺構記号を次のとおりとする。

S I (竪穴建物) S B (掘立柱建物) S K (土坑) S D (溝)

P (柱穴、小穴) S E (井戸状遺構) S X (不定形・不明確遺構)

(6) 遺物番号は遺物図版、観察表、写真図版で共通する。

(7) 出土地点(グリッド)は調査時に現地で設定した地区割りで、第3章第1節に記すとおりである。

13 土器・石製品等遺物の詳細については遺物観察表において記述する。

14 引用文献・参考文献等は、各章末にて掲載している。

目 次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 現地調査の経過	2
第3節 出土品整理、報告書作成・刊行.....	3
第2章 遺跡の位置と環境	6
第1節 遺跡の位置と地理的環境	6
第2節 歴史的環境.....	6
第3章 大槻ブンゾ遺跡の調査	9
第1節 調査の概要	9
第2節 遺構	10
第3節 遺物	12
第4章 大槻ヤマゾ遺跡の調査	58
第1節 調査の概要	58
第2節 遺構	58
第3節 遺物	60
第4節 まとめ	67
第5章 大槻キッチャヤマエダ遺跡の調査.....	88
第1節 調査の概要	88
第2節 遺構と遺物	88
第3節 まとめ	88
第6章 春木マエダ遺跡の調査	92
第1節 調査の概要	92
第2節 遺構と遺物	92
第3節 まとめ	92
第7章 春木A・B遺跡の調査	95
第1節 調査の概要	95
第2節 遺構と遺物	95
第3節 まとめ	95
第8章 春木キッショウ遺跡の調査	97
第1節 調査の概要	97
第2節 遺構と遺物	97
第3節 まとめ	97

第9章 春木ハチノタ遺跡の調査	99
第1節 調査の概要	99
第2節 遺構と遺物	103
第3節 まとめ	116
第10章 総括	119

写真図版

報告書抄録

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

調査原因 石川県農林水産部では産業基盤整備の一環である農業の振興について、生産性の向上及び農産物流通の合理化、農村地域の生活環境改善を目的とした、県営は場整備事業、農道整備事業などを促進している。石川県農林水産部農業基盤整備課（現農業基盤課、以下県農林）は、鹿島郡中能登町（旧鳥屋町）大槻、春木両地内において県営は場整備事業（鳥屋西部地区）を計画した。

平成16年度の分布調査 石川県教育委員会文化財課（以下、県文化財課）は、石川県農林水産部中能登農林総合事務所（以下、中能登農林）からの事業照会に対し、事業の施工前に埋蔵文化財の有無を確認する分布調査等を実施する必要があると回答し、工事の施工についてはその結果をもって協議する方針を示した。そのため中能登農林は地元の了解及び工事計画の調整を行い、平成16年度と平成17年度に分けて県文化財課に分布調査を依頼した。県文化財課により平成16年11月25日～平成17年1月21日にかけて行われたバックホーによる試掘調査の結果、事業区域内に新たに5箇所の埋蔵文化財の分布が確認され、県文化財課は分布調査の結果を中能登農林に回答した。確認された埋蔵文化財は全て新発見の遺跡であり、遺跡が確認された地点に残る小字名を用い、それぞれ大槻ブンゾ遺跡、大槻ヤマゾ遺跡、大槻キッチャマエダ遺跡、大槻マエダ遺跡、春木マエダ遺跡と名づけられた。

事業を計画通り実施した場合、事業計画地の一部で遺跡が損壊する可能性があるため、県文化財課と中能登農林は埋蔵文化財の保護が計られるよう計画の見直しを協議した。畑・田面計画部分は遺跡への影響が及ばなくなるよう盛土保護し、排水路、パイプライン工事箇所も敷設位置や深さ等設計の変更により、影響が最小限になるよう保護を行った。しかし、は場整備事業区域内での町道付替え工事や排水路、パイプライン敷設工事により遺跡が損壊される大槻ブンゾ遺跡、大槻ヤマゾ遺跡、大槻キッチャマエダ遺跡、春木マエダ遺跡の4遺跡については、埋蔵文化財保護法の規定により、事業に先立って記録保存を目的とした発掘調査等を行うことになった。また、大槻マエダ遺跡は遺跡への影響が及ばないよう工事計画の変更が行われたことから調査対象外となった。

平成17年度、県農林は県文化財課に発掘調査を依頼し、県文化財課は財團法人石川県埋蔵文化財センター（以下、県センター）への委託契約により、大槻ブンゾ遺跡他3遺跡の発掘調査を実施した。
春木ハチノタ遺跡の発見 県センターが大槻ブンゾ遺跡発掘調査実施中の平成17年11月22日、春木地内では場整備事業地内用水機場工事現場において土器がまとまって出土し、工事関係者から話を聞いた中能登町教育委員会埋蔵文化財担当者が発掘現場にやってきた。直後に中能登農林の担当者からも連絡があり、状況を把握した後、県文化財課へ報告を行った。遺物の出土地点は前年度の分布調査で埋文なしと回答した範囲内で、ちょうど試掘地点の隙間にあたる部分であった。同日付けで中能登農林からの再分布調査依頼を受けた県文化財課は11月24日に現地を確認し、工事区域内の踏査と6地点での法面観察の結果、旧田面から70cm以上下がったところに存在する腐植物質を含む暗灰色～暗灰褐色の粘土層から弥生土器が出土していることがわかった。また、その上面にも遺構面の存在が想定されたことから、遺跡範囲確定のための早急な試掘調査が必要となり、県文化財課と中能登農林は12月1日に用水機場工事業者も交え調整を行った。

県文化財課は12月3日に用水機場工事箇所のバックホーによる試掘調査を4地点で行った。その結果、工事範囲北側の延長約60m、幅約10mの範囲で、耕土・床土の下に暗灰色粗砂の包含層と粗砂の混じる灰褐色の砂層をベースとする奈良・平安時代の遺構の存在と、その下層に弥生時代の包含層が

存在していることを確認した。しかし、まだその時点で遺跡範囲の確定には至っておらず、調整を続けながら12月19日に人力による工事立会いを実施、奈良・平安時代の掘立柱建物や畠の畝溝を確認し、さらに東側へ遺跡の範囲が広がることがわかった。12月20日に県文化財課は中能登農林に分布調査の結果を回答し、新たに確認された遺跡の地点に残る小字名を用い春木ハチノタ遺跡と名づけられた。その後も埋蔵文化財の取り扱いに関する協議を継続した結果、年度内に最小限の工事による用水機場の暫定共用を行うことで合意した。年度内に掘削工事を行う排水路部分については県文化財課の工事立会いで対応することとなり、平成18年2月21日に工事立会いを実施、畝溝等を確認した。調整の結果、春木ハチノタ遺跡の発掘調査は用水機場の水が必要でなくなる平成18年度後半の稻刈り後とし、遺跡が水中下に沈む秋頃まではシートと土嚢による保護で乗り切ることになった。

平成17年度の分布調査 県文化財課により平成17年12月20日～平成18年1月11日にかけて行われたバックホーによる試掘調査の結果、事業区域内に新たに4箇所の埋蔵文化財の分布が確認された。県文化財課は分布調査の結果を中能登農林に回答した。確認された埋蔵文化財の内2遺跡は周知の大槻ブンゾ遺跡と春木A・B遺跡の広がりで、残り2遺跡は新発見の遺跡であり、遺跡が確認された地点に残る小字名を用い、それぞれ春木キッショウ遺跡、春木ドウヅカ遺跡と名づけられた。

県文化財課と中能登農林は埋蔵文化財の保護が計られるよう計画の見直しを協議した。排水路、パイプライン敷設工事により遺跡が損壊される大槻ブンゾ遺跡、春木A・B遺跡、春木キッショウ遺跡の3遺跡と町道付替え工事箇所の大槻ブンゾ遺跡下層、用水機場建設箇所の春木ハチノタ遺跡については、発掘調査等を行うことになり、春木ドウヅカ遺跡は埋蔵文化財への影響が及ばないよう工事計画の変更が行われたことから調査対象外となった。

平成18年度県農林は県文化財課に発掘調査を依頼し、県文化財課は県センターへの委託契約により、大槻ブンゾ遺跡他3遺跡の発掘調査を実施した。

第2節 現地調査の経過

平成17年度の発掘調査 大槻ブンゾ遺跡他3遺跡の発掘調査は県センター調査部調査第2課安中哲徳（主任主事）、森由佳（嘱託）が担当した。現地での調査機関は平成17年7月28日～12月21日、調査面積は合計1,500m²（大槻ブンゾ遺跡1,120m²、大槻キッチャマエダ遺跡118m²、大槻ヤマゾ遺跡120m²、春木マエダ遺跡142m²）である。

現地調査に際しては、石川県農林水産部中能登農林総合事務所（以下、中能登農林）、県文化財課担当者と7月11日に現地打ち合わせを行ない、事業範囲の確認、調査遺跡の調査区内の盛土の処理、排土置き場、排水の処理、仮設事務所の設置場所、駐車場用地の確保等について調整し、調査は大槻キッチャマエダ遺跡、大槻ヤマゾ遺跡、大槻ブンゾ遺跡、春木マエダ遺跡の順で行うことになった。

大槻キッチャマエダ遺跡は7月20日から仮設建物等の設置、地元区長への挨拶、作業員の確保等の準備作業に着手した。26日に発掘機材搬入、28日から重機による表土除去作業を行い、8月4日から作業員による遺構検出作業に着手、5日～11日まで遺構削作業を行い、8日から平面図実測作業、10日に水準点移動、実測終了後の8月18日に調査は完了した。

大槻ヤマゾ遺跡は8月8日より表土除去作業に着手、17日に遺構検出作業、18日から鞍部の遺構削作業に着手した。途中遺跡の範囲が北へ広がることが判明したため調査範囲も変更となり、9月27日まで掘削作業を行った。28日より平面図実測作業を行い、10月5日に調査は完了した。

大槻ブンゾ遺跡は8月22日から重機による表土除去作業に着手し、29日に仮設建物等を設置した。工事計画の変更及び遺跡の範囲が南へ拡張したため調査範囲も変更となり、大槻ヤマゾ遺跡と並行し

て9月2日から人力による排水路調査区の表土・包含層の掘削作業を行い、29日から遺構検出作業、10月13日からは遺構掘削作業に着手した。20日から平面図実測作業を行い27日に終了した。10月11日から付替町道調査区の表土・包含層の掘削作業に着手し、12日から遺構検出作業、17日からは2回目の表土除去作業を行った。25日から遺構検出作業、31日から遺構掘削作業を行い、11月29日～12月9日まで平面図実測作業を行った。11月29日からは排水路調査区の上層ベース土掘り下げ、排水路調査区下層の遺構検出、遺構掘削作業を行い、30日から平面図実測作業を行った。その後、大槻ブンゾ遺跡の一部に下層面の存在が明らかとなつたため、12月7日から下層ベース土の掘り下げを実施し13日に終了した。下層部分の年度内の終了見込みが立たないことから、12月1日に中能登農林、県文化財、県センターとがその後の取り扱いについて協議を行つた。地元の了解も得て、平成18年度前半に付替町道調査区下層面の調査を行うことになった。13日～16日まで雪が降り続き、調査区は約60～80cmの積雪で埋没したが、21日に発掘機材を搬出し調査は完了した。

春木マエダ遺跡は、11月18日に中能登農林、県文化財課担当と打ち合わせを行い、工事の設計変更があることが判明したためバイオライン調査区の調査は一時保留となつた。大槻ブンゾ遺跡の発掘調査と並行しながら21日に北側排水路部分の表土除去作業を行い、22日に仮設建物等設置、30日に遺構検出作業、12月1日に遺構掘削作業、1日～6日まで平面図実測作業を行つた。1日に中能登農林、県文化財課担当と打ち合わせを行い、バイオライン調査区については調査対象外となり、新たに南側の排水管路の調査が追加となつた。5日に南側排水管路の表土除去作業を行い、6日に遺構検出作業、7日に遺構掘削作業、8～13日に平面図実測作業を行い、調査は完了した。

平成18年度の発掘調査 大槻ブンゾ遺跡他3遺跡の発掘調査は県センター調査部調査第2課白田義彦（調査専門員）、安中哲徳（主任主事）、森由佳（嘱託）が担当した。現地での調査期間は平成18年5月15日～7月5日（前半）、11月8日～12月22日（後半）、調査面積は合計1,290m²（大槻ブンゾ遺跡640m²、春木A・B遺跡40m²、春木キッショウ遺跡60m²、春木ハチノタ遺跡550m²）である。

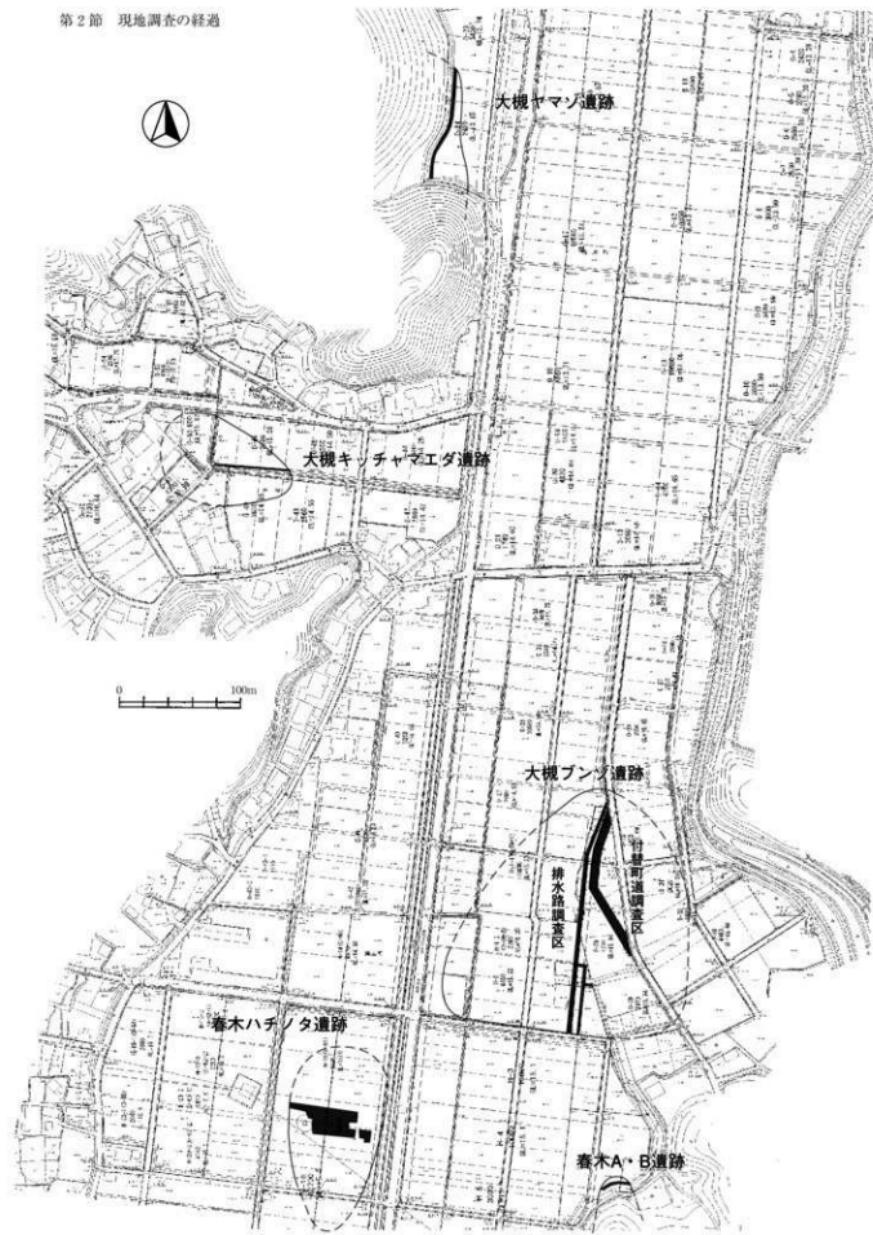
現地調査に際しては、中能登農林、県文化財課担当者と4月21日に現地打ち合わせを行ない、事業範囲の確認、調査遺跡の調査区内の盛土の処理、排土置き場、排水の処理、仮設事務所の設置場所、駐車場用地の確保等について調整し、調査は前半に大槻ブンゾ遺跡、春木A・B遺跡、春木キッショウ遺跡、後半に春木ハチノタ遺跡の順で行うこととなつた。

大槻ブンゾ遺跡の調査は4月27日に仮設建物等設置、地元区長への挨拶、作業員の確保等の準備作業に着手した。5月15日に発掘機材搬入、16日に付替町道調査区上層ベース土掘り下げ、17日から重機による上・下層の間層の除去作業を行い、22日から作業員による遺構検出作業に着手、24日～6月6日まで遺構掘削作業を行つた。並行して5日に排水路調査区の表土除去作業を行い、7日から遺構検出作業、14日に遺構掘削作業を行つた。6月1日～21日まで平面図・断面図実測作業を行い、26日に深い遺構を埋め戻し、7月5日に発掘機材を撤収して前半の調査は完了した。

春木A・B遺跡の発掘調査は、大槻ブンゾ遺跡と並行し6月5日に表土除去作業、7日に遺構検出、遺構掘削作業、12日～14日に平面図実測作業を行い、調査は完了した。

春木キッショウ遺跡の発掘調査は、6月21日に中能登農林、県文化財課担当者と現地打ち合わせを行ない、26日に表土除去作業、27日に遺構検出・遺構掘削作業、28日に平面図実測作業を行い、調査は完了した。

中能登農林、県文化財課担当者と10月18日に現地打ち合わせを行ない、春木ハチノタ遺跡の事業範囲の確認、調査区内の排土置き場、仮設事務所の設置場所、駐車場用地の確保等について調整したが、地元の要望で工事計画が変更となり、大槻ブンゾ遺跡の排水路調査が追加となつた。



第1図 大槻・春木遺跡群 調査区位置図1 (S=1/4,000)

大槻ブンゾ遺跡、春木ハチノタ遺跡は平行して調査を行うことになり、11月8日に表土除去作業、9日に機材搬入を行った。13日から大槻ブンゾ遺跡排水路調査区の遺構検出作業、15日～17日に遺構掘削作業、21日・22日に平面図実測作業を行い、調査は完了した。

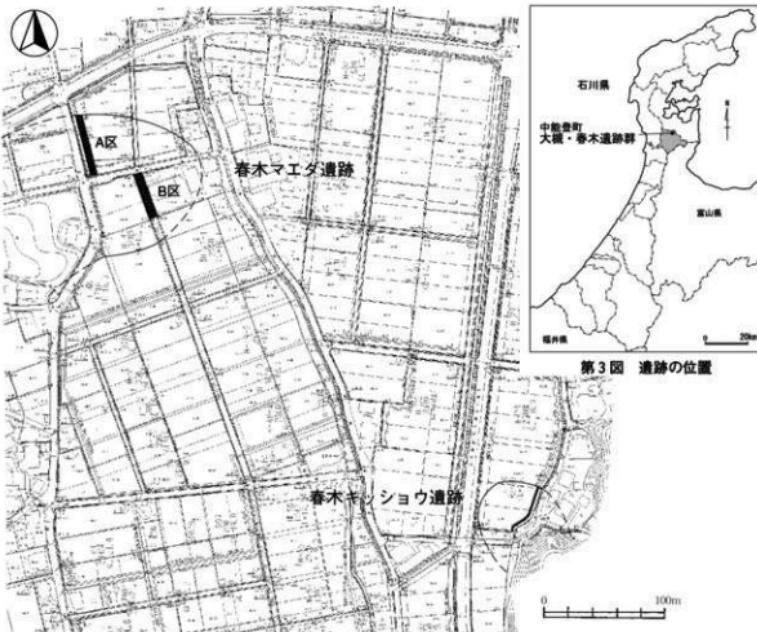
春木ハチノタ遺跡の発掘調査は、遺跡上面を保護していたシート・土養袋の処理を11月9日より開始し、21日～28日に遺構検出作業、29日～12月11日まで遺構掘削作業を行い、12日～19日まで平面図実測作業を行い、21日に発掘機材撤収、22日に調査は完了した。

第3節 出土品整理、報告書作成・刊行

県文化財課は、県センターに出土品整理及び報告書の作成、報告書の刊行を委託した。

出土品整理 平成17(2005)年～平成20(2008)年度にかけて行った。内容は、遺物洗浄、記名・分類・接合、遺物の実測、遺構・遺物実測図のトレース作業である。また、自然科学分析は平成20年度にパリノ・サーヴェイ株式会社（木製品樹種同定、石製品岩石鑑定、C14年代測定）に委託して行った。

報告書作成・刊行 平成20(2008)年度に発掘調査報告書の原稿執筆、挿図・図版作成等を行い、編集・刊行作業を行った。作業は安中哲徳（調査部国関係調査グループ主任主事）、林 大智（調査部県関係調査グループ主任主事）、森 由佳（調査部県関係調査グループ嘱託）が担当し、空 良寛（調査部国関係調査グループ主事）が補佐した。なお、出土遺物の写真撮影に大藤雅男（調査部国関係調査グループ補助員）、挿図・図版作成に小川光彦（調査部国関係調査グループ補助員）の補助を得た。



第2図 大槻・春木遺跡群 調査区位置図2 (S=1/4,000)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

大槻・春木遺跡群は石川県鹿島郡中能登町北部（旧鳥屋町）の大槻及び春木地内に所在する。

中能登町は平成17年3月に旧鳥屋・鹿西・鹿島の3町の合併により誕生した。能登半島のほぼ中央に位置し、北は七尾市、南は羽咋市と富山県氷見市、西は羽咋郡志賀町に接する。地形的には七尾南湾から南西に延びる邑知地溝帯を中心とする平野部と、その東側の石動山（標高565m）を最高峰とする石動山系や、西側の標高200～300m前後の眉丈山系などの丘陵地からなり、石動山を源とする二宮川が地溝帯を北流して七尾西湾に流出し、同山系を水源とする長曾川が地溝帯を東西に貫流して羽咋市の邑知潟に注ぐ。両河川の水源地帯は地質軟弱な地すべり地帯であり、かつ急流のため土砂の流出が著しく天井川となっており、近世以降の災害記録などから、流路変遷の著しいことが想定される。

遺跡群は地溝帯の北西縁に沿って連なる徳田段丘南端の沖積地に立地する。付近は、二宮川の北流によって生じた小冲積低地がつながり、七尾市を経て日本海に注いでいる。

第2節 歴史的環境

周辺の遺跡は、眉丈山系、石動山系とも丘陵上から斜面にかけて墳墓群が広がり、丘陵裾の緩斜面や二宮川および長曾川の自然堤防上を中心に集落跡が集中する。また、邑知地溝帶中央部の遺跡の分布は一見疎にみえるが、実際は厚い扇状地堆積物に阻まれており全容は明らかでない。

旧石器時代 旧石器時代の遺跡は、中能登町および周辺では確認されていない。

縄文時代 縄文時代の遺跡では、早期の遺跡が最古の確認例となり、若狭見遺跡では押型文土器が、末坂遺跡からは尖底土器が採集され、能登部小学校遺跡からは早期～前期の押型文系土器が出土している。花見月遺跡からは前期初頭～後期中葉の遺物が出土していることから、長期にわたる集落である可能性が指摘されている。徳前C遺跡からは前期後葉～中期中葉頃までの遺物が、伊助谷A遺跡からは中期～後期の土器が出土している。徳丸遺跡では石臼炉を持つ竪穴建物や埋甕などが検出され、中期～晚期の土器や石器などが多数出土した。また、標高320mの能登最高所に位置する福田原山遺跡では中期初頭～後期初頭の土器が出土したが、遺物量や密度も希薄なため季節的なキャンプサイトと考えられている。晚期の曾祢C遺跡では輝石安山岩の多量の剥片や石礫が出土しており、新庄神社跡遺跡からは打製石鎌が、西三階遺跡からは磨製石斧が出土している。

弥生時代 弥生時代の遺跡では、前期の遺跡は詳細が不明だが、西側の眉丈山系の丘陵尾根上に環濠が確認され、竪穴建物から棕状炭化米も見つかった、高地性集落である中期の杉谷チャノバタケ遺跡が知られている。西側の丘陵裾に位置する徳丸遺跡では中期～後期の竪穴建物や掘立柱建物などが検出され土器や石器が出土している。また、邑知地溝帶中央部に位置し、後期の竪穴建物、掘立柱建物が検出され、多量の土器や木製品が出土した徳前C遺跡が知られている。

古墳時代 古墳時代には、邑知地溝帶中央部の低地帯を挟んで対峙するように古墳群が形成される。西側の眉丈山系の丘陵尾根上には4世紀中頃～5世紀初頭にかけて造営された国指定史跡の兩の宮古墳群をはじめ、県内最古級の前方後方墳を含む大槻古墳群、川田古墳群、末坂古墳群など多数の古墳が築かれる。低地帯の東側に位置する石動山系でも多数の古墳が丘陵先端～裾部や山麓緩斜面上に分布し、宮内庁の管理下にある4世紀後半の小田中親王塚古墳、小田中亀塚古墳のほか水白鍋山古墳などが知られる。古墳の多くは小円墳か方墳であるが、大型の前方後円墳や前方後方墳も複数確認され

ており注目される。また、古墳以外の遺跡として、旧鳥屋町域では、須恵器の生産を行っていた窯跡群が多数確認されており、5世紀代から生産を開始していた深澤窯跡群などが知られる。

奈良・平安時代 奈良・平安時代の遺跡では、低地部の集落遺跡と眉丈山系の窯跡群が目立つ。集落遺跡では、奈良時代前半期の掘立柱建物を検出した徳前C遺跡や奈良時代の堅穴建物を検出した新庄遺跡のほか、一青B遺跡、武部ショウブダ遺跡などでも平安時代の建物が多数確認されている。また、窯跡群では、眉丈山系の末坂から春木、瀬戸内地内にかけて須恵器の窯跡が多数分布しており、羽坂（埴坂）、較岩（埴屋）、末坂（陶坂）、瀬戸（陶戸）など現在残る地名にもそれに縁のあるものが多い。窯跡の多くは7世紀後半～10世紀代に属する。

中・近世 中世～近世の遺跡としては、中世の掘立柱建物や堅穴建物が検出された新庄遺跡のほか、多数の井戸などを検出した谷内ブンガヤチ遺跡、坪川白山神社遺跡、良川沖遺跡、春木A・B遺跡、免田中世城遺跡、春木齐藤館跡、長楽寺跡などがある。また、春木齐藤館遺跡付近、通称西前田の水田から昭和30年に中国銭51種約6万枚の入った珠洲焼大甕が出土している。

参考文献

石川県教育委員会 1991『石川県遺跡地図』

平凡社 1991『日本歴史地名系第17巻 石川県の地名』

九学会連合会登調査会 1989『能登—自然・文化・社会―』

鳥屋町 1955『鳥屋町史』

第1表 周辺の遺跡一覧表

No.	組立番号	名 称	立 地	時 代	No.	組立番号	名 称	立 地	時 代
1		大河原マツガ遺跡	平地	第3～平安	62	32031	末坂C遺跡	丘陵	奈良～平安
2		大河原マツガ遺跡	平地	第3～平安	63	32032	末坂A遺跡	丘陵	奈良～平安
3		大河原マツガ遺跡	平地	第3～平安	64	32033	末坂B遺跡	丘陵	奈良～平安
4		大河原マツガ遺跡	平地	第3～9世紀	65	32034	末坂C遺跡	丘陵	奈良～
5		春木マツガ遺跡	平地	第3～平安	66	32035	末坂D遺跡	平地	奈良～
6		春木マツガ遺跡	平地	第3～平安	67	32036	春木A・B遺跡	丘陵	奈良～平安
7		春木マツガ遺跡	平地	第3～平安	68	32037	春木C・D・E遺跡	丘陵	奈良～平安
8		春木マツガ遺跡	平地	古墳～中世	69	32038	春木F・G・H・I遺跡	丘陵	奈良～
9		春木マツガ遺跡	平地	古墳～中世	70	32039	春木J・K・L・M遺跡	丘陵	奈良～
10		春木マツガ遺跡	平地	古墳～中世	71	32040	春木N・O・P・Q・R・S・T・U・V・W・X・Y・Z遺跡	丘陵	奈良～
11	32000	羽坂A遺跡	平地	第3～平安	72	32041	春木Y・Z遺跡	丘陵	奈良～平安
12	32006	御田川遺跡	丘陵	織文～奈良～	73	32042	春木Z遺跡	丘陵	奈良～
13	32027	奥山川遺跡	丘陵	織文	74	32043	春木Z遺跡	丘陵	奈良～
14	32029	白山川遺跡	丘陵	古墳・平安	75	32044	春木Y・Z遺跡	丘陵	奈良～
15	32030	白山川遺跡	丘陵	古墳・平安	76	32045	春木Y・Z遺跡	丘陵	奈良～・室町
16	32031	白山川古墳群	丘陵	古墳	77	32046	春木Y・Z遺跡	丘陵	奈良～
17	32032	白山川C遺跡	丘陵	古墳	78	32047	春木Y・Z遺跡	丘陵	奈良～
18	32033	東白山遺跡	丘陵	不詳	79	32048	春木Y・Z遺跡	丘陵	奈良～
19	32034	東白山遺跡	丘陵	古墳	80	32049	春木Y・Z遺跡	丘陵	奈良～4世紀
20	32037	白山川古墳群	丘陵	古墳	81	32050	春木Y・Z遺跡	丘陵	奈良～
21	32038	白山川C遺跡	丘陵	古墳	82	32051	春木Y・Z遺跡	丘陵	奈良～
22	32039	白山川C遺跡	丘陵	古墳	83	32052	千賀田川遺跡	丘陵	平安
23	32040	東白山遺跡	丘陵	古墳	84	32053	春木Y・Z遺跡	丘陵	奈良～
24	32041	西・岸遺跡	平地	古墳～奈良～	85	32054	春木Y・Z遺跡	丘陵	奈良～
25	32042	北行～7世頃	丘陵	古墳	86	32055	春木Y・Z遺跡	丘陵	奈良～
26	32043	北行～1号墳	丘陵尾根	古墳	87	32056	大根川古墳群	丘陵	平安
27	32044	西・岸遺跡	丘陵尾根	古墳	88	32057	春木Y・Z遺跡	丘陵	奈良～
28	32045	北行～2号墳	丘陵尾根	古墳	89	32058	春木Y・Z遺跡	丘陵	奈良～
29	32046	朝星～14世頃	丘陵尾根	古墳	90	32059	春木Y・Z遺跡	丘陵	奈良～
30	32047	道反川遺跡	丘陵	古墳	91	32060	春木Y・Z遺跡	丘陵	奈良～
31	32048	道反川遺跡	丘陵	古墳	92	32061	春木Y・Z遺跡	丘陵	奈良～
32	32049	道反川遺跡	丘陵	古墳	93	32062	春木Y・Z遺跡	丘陵	奈良～
33	32050	道反川遺跡	丘陵	古墳	94	32063	春木Y・Z遺跡	丘陵	奈良～
34	32051	道反川古墳群	丘陵上	古墳	95	32064	春木Y・Z遺跡	丘陵	奈良～
35	32056	道反川千世遺跡	丘陵側面	古墳	96	32065	春木Y・Z遺跡	丘陵	奈良～
36	32060	伊太加田古墳群	丘陵	古墳	97	32066	春木Y・Z遺跡	丘陵	奈良～
37	32061	伊太加田古墳群	丘陵	古墳	98	32067	春木Y・Z遺跡	丘陵	奈良～
38	32062	下北山遺跡	平地	古墳・平安	99	32068	春木Y・Z遺跡	丘陵	平安
39	32065	白山川自山古墳群	丘陵	古墳	100	32069	春木Y・Z遺跡	丘陵	奈良～平安
41	32010	北河原古墳群	丘陵側面	古墳	101	32070	春木Y・Z遺跡	丘陵	奈良～
42	32011	白山川A古墳群	丘陵	古墳	102	32074	大根川～13世頃	丘陵	古墳
44	32012	白山川B古墳群	丘陵側面	古墳	103	32075	春木Y・Z遺跡	丘陵	古墳
45	32014	白山川C古墳群	丘陵	古墳	104	32076	春木Y・Z遺跡	丘陵	古墳
46	32015	白山川D古墳群	丘陵	古墳	105	32077	春木Y・Z遺跡	丘陵	古墳
48	32017	白山川E古墳群	丘陵	古墳	106	32078	春木Y・Z遺跡	丘陵	古墳
49	32018	白山川F古墳群	丘陵	古墳	107	32079	春木Y・Z遺跡	丘陵	古墳
53	32020	瀬戸川古墳群	平地	古墳	108	32080	春木Y・Z遺跡	丘陵	古墳～平安
54	32021	瀬戸川古墳群	平地	古墳	109	32081	春木Y・Z遺跡	丘陵	古墳
55	32024	未定	丘陵	古墳	110	32082	春木Y・Z遺跡	丘陵	古墳
56	32025	未定	丘陵	古墳	111	32083	春木Y・Z遺跡	丘陵	古墳
57	32026	未定	丘陵	古墳	112	32084	春木Y・Z遺跡	丘陵	古墳
58	32027	未定	丘陵	古墳	113	32085	春木Y・Z遺跡	丘陵	古墳
59	32028	未定	丘陵	古墳	114	32086	春木Y・Z遺跡	丘陵	古墳
60	32029	未定	丘陵	古墳	115	32087	春木Y・Z遺跡	丘陵	古墳
61	32030	未定	丘陵	古墳	116	32088	春木Y・Z遺跡	丘陵	古墳～平安
					117	32089	春木Y・Z遺跡	丘陵	古墳
					118	32090	春木Y・Z遺跡	丘陵	古墳
					119	32092	柳原C遺跡	平地	縄文～古墳
					120	32093	武部ショウブダ遺跡	平地	古墳～平安
					121	32111	坪川白山神社遺跡	平地	縄文～豆野
					122	32112	坪川遺跡	丘陵	古墳
					123	32113	春木Y・Z遺跡	丘陵	古墳
					124	32115	春木Y・Z遺跡	丘陵	古墳



第1図 遺跡の位置とその周辺の遺跡 (S=1/25,000)

第3章 大槻ブンゾ遺跡

第1節 調査の概要（第1図）

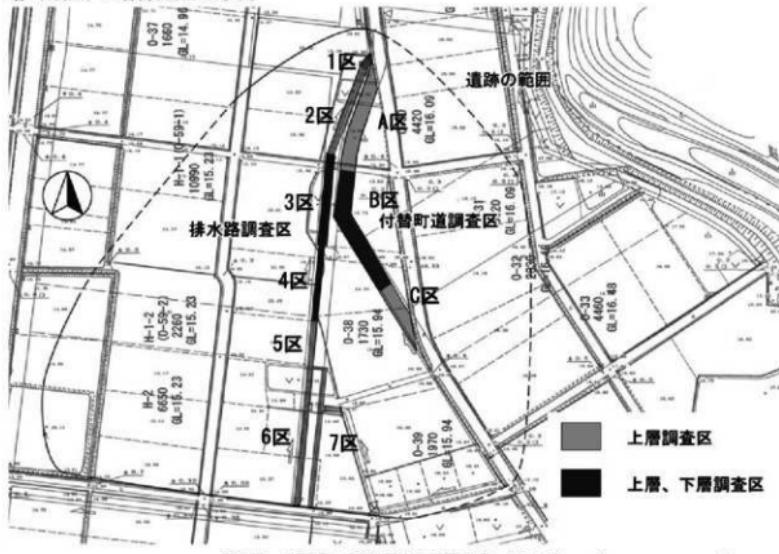
大槻ブンゾ遺跡の発掘調査は、排水路敷設箇所および町道付替箇所を対象とし、平成17年8月22日～12月21日、平成18年5月15日～7月5日の2カ年に渡り実施した。

遺跡は、大槻古墳群や春木A・B遺跡が所在する低丘陵から北へと派生する二宮川左岸に形成された自然堤防状の微高地に立地していたことが推測される。また、試掘調査の結果により、遺跡の南西側から西側には蛇行する二宮川旧流路の存在が確認されていることから、遺跡は中州状の高まりに形成されたと推定している。地形は二宮川が邑知地溝帯を北流し七尾西湾へと流出するに伴い、北へと緩く低下すると共に、遺跡が立地する自然堤防上から西の沖積低地へとやや急に低下している。

調査区は、形状を元に北から南へ排水路調査区を1～7区、付替町道調査区をA～C区に分けて設定（第1図）した。さらに1～5区およびA～C区は5mごと、6・7区は10mごとに北から南へと細分し、調査区の算用数字やアルファベットと組合せ、1-1区、1-2区、A-1区、A-2区などと呼称し、グリッドを設定した。調査ではこのグリッドを用い、遺構実測図作成や遺物取上げを行った。

座標との対応については、現地調査後に中能登農林総合事務所の協力により県営は場整備事業で設置した測量標を使い、付替町道調査区内4地点のグリッド杭の座標を求めている（A1杭:X=+111.929, Y=-23.209, B1杭:X=+111.900, Y=-23.217, C1杭:X=+111.870, Y=-23.220, C11杭:X=+111.829, Y=-23.195）。

調査面積は、平成17年度が排水路調査区上層（258m²）、排水路調査区下層（120m²）、付替町道調査区上層（742m²）の合計1,120m²であり、平成18年度は排水路調査区上層（240m²）、付替町道調査区下層（400m²）の合計640m²である。



第1図 大槻ブンゾ遺跡調査区配図 (S=1/2,000)

第2節 遺構（第2～18図）

1. 排水路調査区（1～7区）

上層検出面の4-3・4区と6-4区で標高14.7m前後、7区で15.0m前後を測る微高地状の地形を確認した。他は標高14.5m前後とやや低く、特に1区にかけては14.2m前後と急激に落ち込む。遺構はこの微高地上の部分を中心に確認した。

土坑（SK） 6区を中心に、深さ10cm前後の土坑を多く検出した。SK124は柱穴の可能性がある。

溝（SD） 深さ10cm前後の東西方向の溝を多く検出した。6区で検出した溝は、密集しており畠溝の可能性が考えられる。SD2～4は付替町道調査区で検出したSD28やSB16と軸を同じくしており、区画溝の可能性が考えられる。

掘立柱建物（SB） 3-7区でSB4、6-3・4区でSB19を検出した。またSB4及びSB2に付属する柵列も検出した。上層で検出したP8は、下層で検出したP324と重複する遺構で、SB4の南を画し、P58・P59・P317は屋敷地の西を画する柵列と考えられる。SB4は東西に2間（幅2.5m）、南北に1間（幅1.3m）検出した。SB19は東西に1間（幅2m）、南北に2間（幅1.6m）確認した。ともに時期不明であるが、SB4は付替町道調査区で検出した中世の屋敷地の一角を占めると考えられる。

2. 付替町道調査区（A～C区）

B・C区の上層は標高14.9m前後、下層は14.6m前後で遺構面を検出し、A区にかけて急激に落ち込む。しかし、下層で上層掘り残し遺構を掘削したものも多く、平面図上で上層・下層の遺構を分けて捉えることが困難になってしまったため、上層・下層の区別をせず、一括して記述する。

溝（SD） 約50条検出した。方向により北から約20° 東へ傾くもの、0～5° の範囲で東または西に傾くもの、約30° 西へ傾くもの、その他の4種類に分類できる。その多くは区画溝と考えられ、北から0～5° の範囲で東または西に傾くものを最も多く検出した。その他、SD104・SD105などを検出したが、SD104は1辺約4.5mの方形に、SD105は1辺約17mの方形に区画する溝と推定される。

掘立柱建物（SB） 溝の検出した方向を基準に、建物の復元を試みた。

SB1～3・5～7は、北から約20° 東へ傾くSD37を基準に復元した。1.5mを中心とした1～1.7m間隔の柵列が設置され、屋敷地を区画する。敷地内に井戸1～2基を伴う。SB1はP284・P288などからなり、南北2間（幅2.2m）、東西2間（幅1.6m）、北側に庇（幅1.6m）をもつ。敷地面積は110m²と推定され、SE8・SE9を伴う。SB2は南北2間（幅2.6m）、東西1間（幅2.3m）で、礎石を伴うSK49・P215やP214などからなる。敷地面積88m²と推定され、井戸と考えられるSX63を伴う。SB3はP420・P438・P444・SX59・SX62などからなり、南北2間（幅2.5m）、東西2間（幅2.0m）、建物面積20m²と推定される。SB2と同じ敷地内に存在することから、建替えが行われた可能性が考えられる。SX63とSE9で接合する遺物（第23図80）が出土しており、SB1とSB2あるいはSB3との間に関係性が窺われる。また、排水路調査区で確認したSB4に付属する柵列とSE6も確認した。敷地面積は110m²と推定される。SB5はP182・P183・P185・P193・P207などからなり、南北1間（幅2.2m）、東西2間（幅1.7m）で南側に庇（幅1.5m）を伴い、SE5・SE12が付属する。SB4とSB5の間には幅90cmをおいて柵列が並んでいることから路地としたが、SB5の西を画する柵列から西へ伸びる柵列も確認できるため、屋敷地に含まれる時期が存在したと考えられる。SB5の東には幅3.3m、南には幅4mをおいて柵列がみられることから、南北方向の通りとそこから西へ伸びる通りが存在していたと考えられる。SB5のそれぞれの向かいの敷地では建物は確認できなかった。SB4・SB5または西への通りに該当するC-2・3区か

ら、銅銭（第33図銭4～20）が出土している。SB6はP94・P108・P234・P238などからなり、南北3間（幅1.3+1.5+1.5m）、東西2間（幅2.5m）、東側に庇（幅1.5m）を伴う。庇を含む建物面積は27.95m²、敷地面積は少なくとも121.6m²で、建物・敷地面積とも最大の規模をもつ。SE1・SE11等を伴う。SB7はP81・P91などからなり、南北1間（幅2.0m）、東西2間（幅2.2m）を検出し、井戸を伴うかは不明である。SB1の北で検出したSD37は、その北で地形が落ち込むため、村の境界を区画する溝と考えられる。これらの建物群の時期は中世に属すると考えられる。

SB8～14・18は、北から0～5°の範囲で東または西に傾く溝を基準に復元した。SB10～13で区画溝を伴う。SB8はP222・P301・P407・P409などからなり、南北2間（幅2.1m）、東西2間（幅1.5m）を検出した。SB9はP419・P435・P448・P526からなり、南北1間（幅2.8m）、東西1間（幅2.2m）を検出した。SB8・SB9とも区画溝は確認できなかった。SB9のP448からは炭化した柱根（第34図木4）が出土し、火災を受けたと考えられる。SB10はP182・P183・P193・P206・P304などからなり、南北3間（幅1.5m）、東西2間（幅1.6m）を検出した。SD30・SX50・SX54を区画溝とし、敷地面積は71.25m²以上と考えられる。SB11はSK16・SK109・P492などからなり、南北2間（幅1.5m）、東西2間（幅1.9m）、建物面積は11.4m²で、SD25・SD29で敷地の北・西・南を区画すると考えられるが、東を区画する溝は確認できなかった。敷地面積は91.5m²以上と推定される。SE2が付属する可能性がある。SB12はSK9・P236などからなり、南北2間（幅1.6m）、東西2間（幅1.3m）、建物面積8.32m²と推定される。SD20・SD22・SX35が区画溝と考えられる。また、SD21・SD23も柱穴列に重なりつつ並行することから、布壠状の溝、または区画溝を二重にもつと考えられる。敷地面積は88m²以上と推定される。SB13はP95・P101・P237・SX25などからなり、南北2間（幅2.2+2.0m）、東西2間（幅2.0m）を検出した。SD18・SD19・SD24が区画溝と考えられ、敷地面積84m²以上と推定される。切り合い関係から、SB11→SB12→SB13と南へ変遷していったことが確認できた。SB14はP66・P78・P228・P229などからなり、南北2間（幅2.5m）、東西2間（幅1.25m）、建物面積12.5m²と指定される。SB18はA区の低地で検出した。南北1間（幅2.4m）、東西1間（4m）、建物面積9.6m²と推定されるが、東西2間の可能性がある。これらの建物群の時期は、古代に属すると考えられる。

SB15～17は、北から約30°西へ傾く溝を基準に復元した。SB8～14・18と同じく区画溝を伴うが、敷地面積は広い。SB15はP280・P286・P443などからなり、南北2間（幅2.5m）、東西2間（幅1.8m）、建物面積18m²と推定される。SD33・SD102を区画溝とすると、敷地面積は127m²以上と考えられる。SB16はP161・P167・P170・P266・P507などからなり、南北2間（幅1.6m）、東西2間（幅2.0m）を検出した。SD28と排水路調査区で確認したSD2～4を区画溝とすると、敷地面積は255m²を超える。SB17はP89・P239・P488などからなり、南北2間（幅1.8m）、東西1間（幅1.9m）、建物面積6.84m²と推定される。SD42・SD107を区画溝とすると、南北に24mの範囲をもつと考えられる。

井戸（SE） 可能性のあるものも含めて14基検出した。平面形態・大きさは様々であるが、深さ1m前後の素掘りの井戸が多い。SE1は1辺約90cmの縦板組隅柱横棟留の井戸で、北辺と東辺のみ検出した。SE3→SE10→SE1と重複して変遷しており、最終的に一括の状態で完掘した。井戸に伴うか不明であるが、SE3とみられる地点では長さ1.1mの板や、壁面に沿って長さ約1.4mの板や弧状の丸太が出土した。SB6に付属する井戸と考えられる。SE2は石組井戸を構築後、南側の礫を取り去り、素掘りの井戸を掘り直している。SE6は1辺約80cmの縦板組隅柱横棟留の井戸で、3辺の板は抜き取られ、西辺の板のみ内側に倒れて検出した。SB4に付属する井戸と考えられ、井戸枠掘方から長さ14.4cm、幅3.7cmの祝符木簡（第36図木27）が上下逆の状態で出土した。SE7はSB4とSB5の間を隔てる路地が存在しない時期に、SB3またはSB2に伴うものとして構築されたと考えられる。

土坑（SK） 約50基検出した。性格不明の浅いものもあるが、礎板や礎石を伴う柱穴を多く確認した。C-7区SK8は礎板が2枚直角に重ねられて出土した。B-7区SK28からも礎板とその直上から珠洲焼片が出土し、B-4区SK101からは礎板と曲物底板（第34図木5・6）が並んで出土した。B-7区SK105も柱穴とみられるが、柱痕部分中層から土師器皿（第26図136～139）がまとまって出土した。

ピット（P） 500基以上検出した。B-3区P404、C-4区P484など柱根が残るものや、C-1区P510など礎板が出土したものもあり、柱穴と呼べるもののが多かった。C-2区P477などで炭化した柱根（第34図木8）が出土し、焼土を含む遺構も多いことから火災を受けたと考えられ、それに伴って建替えを行った結果、柱穴が増えたと考えられる。掘立柱建物や柵列として復元したのはその一部に留まり、他にも建物や柵列が存在する可能性がある。C-3区P266はSB16の柱穴であるが、検出面直下から土師器皿（第25図119・120）が上下に2枚、口を合わせた状態で出土した。中には何も確認できなかった。

その他（SX） SB5敷地内に位置するSX45検出面からは、珠洲焼片が多く出土した。SX50・54は区画溝と考えられる。SX63は深さ1.2mを測り、湧水が確認されるため、SB2またはSB3に付属する井戸の可能性がある。なお、C-9区SX22からはウシの上顎臼歯が出土した。

第3節 遺物（第19～36図、第1～9表）

〔土器・土製品〕（第19～30図）

土器・土製品では弥生時代～中世の長期間にわたる遺物が認められ、そのうち224点を図化・掲載した。以下、土器・土製品の出土時期を大きく5段階に区分し、各時期の様相と共に主要な遺構出土遺物や特筆される遺物を抽出して概説を行う。

【弥生時代中・後期】 明確な居住施設は確認されなかったが、排水路調査区南側の6・7区に土器の出土が集中する。第21図47～49・51が示すように、弥生時代後期後半（法仏式併行期）の土器が大半を占める。47は6-3区SK115から出土した甕で、肩部外面に刷毛目工具による列点が施される。底部は被燃により赤変し、胴部から口縁部内面には煤が付着している。51は7-A3区P8から出土した高杯の脚裾部で、外面に赤彩が施される。内面には煤が付着しており、蓋として転用された可能性が高い。

【7世紀前葉～8世紀前葉】 この段階の土器は、調査区南側を除く全城に散在しており、主な遺構としては4-1区SD3、C-10区P80などがあげられる。須恵器は、第20図38の口縁部内面にかえりをもつ杯蓋、36の椀、37の杯身、第29図179の高杯、第25図125の蓋、第20図34の瓶、第30図202の鉢、新しい様相をもつものとして、第20図43の杯蓋、29・41の杯身、第21図60の盤などで構成され、焼成不良のため灰黄色を呈するものや焼け歪みが認められるものが顕著である。また、第24図98の椀のように外面に「ひだすき」がみられるものも存在する。これらの須恵器に第20図39、第26図145の土師器甕や第20図28の土師器椀が共伴する可能性が高い。第20図42は4-1区排水溝から出土した須恵器小型鉢で、底部に窯床面の滑り止めのために敷かれた砂が付着している。179はC-1区SX56から出土しており、高杯脚柱部に2段透かしをモチーフとした切り込みが施される。

なお、第19図3・8などの製塙土器はこの段階に属する可能性が高い。また、少量だが第29図188、第30図222のようにTK47～MT15型式併行期（5世紀末～6世紀前半）に属するものも認められる。

【8世紀中葉～9世紀中葉】 調査区中央を主体に少数のピットや溝が確認され、主な遺構としては3-6区SD5、B-3区SX101などがあげられる。須恵器は第19図26の杯蓋、1の杯身、7の短頸甕、12の台付長頸瓶、第23図80の把手付き鉢、第24図91の甕などで構成され、第23図88のように廃棄に際して口縁部や底部を打ち欠いているものが多い。これらの須恵器には第19図16の土師器甕などが共伴する。第20図33のように底部外面などにヘラ記号が施されるものも目立つ。

[13世紀中葉～14世紀中葉] この段階には、付替町道調査区を主体に掘立柱建物や井戸などの明確な居住施設が確認できる。主な遺構としてはC-1区SK105・SX56、C-3区P266、C-6区SE1・SE10などがあげられる。この段階の土器組成は、第25図103の珠洲焼片口鉢、第28図169の珠洲焼甕、168の珠洲焼壺、第21図63・第28図171の土師皿、第26図146の白磁皿、第29図175の青磁碗などで構成される。土師皿は法量で比較的明瞭に大・小を区分でき、大皿は口径10.8～12.2cm、器高2.5～3.3cm、小皿は口径7.2～8.3cm、器高1.6～2.1cmを測るものが多く、14世紀前葉以降にはC-1区SX56から出土した第29図177・178のように口縁部に灯芯油痕が付着した資料も認められる。

[14世紀後葉～15世紀前半] 前段階の居住域を踏襲し、付替町道調査区を主体に掘立柱建物や井戸などの明確な居住施設が確認できる。主要な遺構としてはB-6区SK29・SK33、C1・2区SE6、C-3区SE5・SE12、C-7区SK8などがあげられる。この段階の土器組成は、第22図67の珠洲焼片口鉢、68の珠洲焼甕、第27図159-1の珠洲焼甕、第22図66・第26図135の土師皿、第27図154の瀬戸天目茶碗、第22図71の瀬戸卸皿、第26図148の瀬戸袴腰形香炉、第30図216の瀬戸水滴、215の青磁皿などで構成される。礎板を持つC-7区SK8の柱穴から出土した第26図129の珠洲焼卸皿は、初見例である可能性が高い。珠洲焼はV期、瀬戸は古瀬戸後期のものが主体を占める。土師皿の法量は、大皿が口径10.8～11.3cm、器高1.9～2.4cm、小皿は口径7.3～8.4cm、器高1.5～2.1cmを測るものが多く、両者の法量差がやや不明瞭になる。また、前段階と比べて灯芯油痕の付着するものが増加し、3-2区上層ベースから出土した第19図22のように内面に灯芯油痕がべつとりと付着した資料も認められる。

[石製品] (第31・32図)

石製品では敲石、石礫、2次加工のある剥片、砥石、石臼、硯などが出土し、そのうち11点を図化・掲載した。以下、主要なものを抽出して概説を行う。

第31図石1・4は敲石で、石1は3-5区上層ベース面、石4はB区表土から出土している。石4は表裏面の中央と側面を使用しており、表面には炭化物、表面と側面に煤が付着している。石3は6-4区SD113から出土した無茎凹基式石礫で、石材は志賀町北部で採取可能な無斑晶質安山岩（輝石安山岩と呼称することも多い）を用いている。形態から縄文時代に属するものと判断される。石6～9は砥石で、石6はB-4・5区SX68、石7はC-4区表土、石8・9はC-5区SD28から出土している。石7は珪化流紋岩製の中砥で、表裏と側面の4面を使用している。表面には刃物による筋状痕跡が多数認められる。石9は天草砥（中砥）で、鉄鎌などを対象にしていた可能性が高い。表裏と側面の4面を使用しており、小口面は折り取り後に整形されている。図化されている他に砥石は8点確認でき、C3～9区に集中している。第32図石5・10は石臼で、石5はB-4区P482、石10はC-5区P153から出土した。石5は下臼で、摺り面の片側が大きく摺り減る。石11はC-6区SE1の井戸枠内から出土した石硯で、海部側は欠損している。残存長7.4cm、幅6.1cmを測り、陸部は木瓜形に削り込まれ、縁帶には区画線が刻まれている。全体が被熱のため変色すると共に、層状に剥離し裏面は欠失している。色調は灰褐色を呈するが、石材は鳴滝産で本来の色調は中央付近に残存する黒灰色であったものと考えられる。

[鍛冶関連資料] (第32図)

鍛冶関連資料としてはフイゴ羽口と鉄滓が確認でき、そのうち2点の鉄滓を図化・掲載した。鉄滓のはば全てが椀形鍛冶滓及びその破片で、出土総量は204点(12.18kg)を超える。主に2-3区～3-8区及びB-3～C-3区で確認され、そのなかでも2-4区(1,364.3g)、3-4区(3,635.8g)、3-6区(1,629.8g)でまとまった出土がみられた。フイゴ羽口もほぼ同様の分布を示すことから、上記の調査区周辺に鍛冶炉が存在していた可能性が高い。

第32図金1は3-4区西側側溝(包1・2)から出土したほぼ完形の椀形鍛冶滓である。最大長9.7cm、

最大幅8.0cm、厚さ6.5cmを測る小型品で、弱い磁着が認められる。滓上面（図左側）には羽口の送風による崖みが存在し、周囲と比べて表面が平滑になっている。また、滓下面（図右側）には炉床粘土の付着が認められ、炉床粘土は被熱により還元・硬化している。

フイゴ羽口は鉄滓出土量と比べて出土量が少なく、羽口先端の溶解部分及び先端下部に形成されたガラス質滓が顕著に認められる。おそらく、使用により上記部分が生成された場合には、その部分を打ち欠いて除去することにより、羽口を繰り返し使用していたことが想定できる。

〔金属製品〕（第33図）

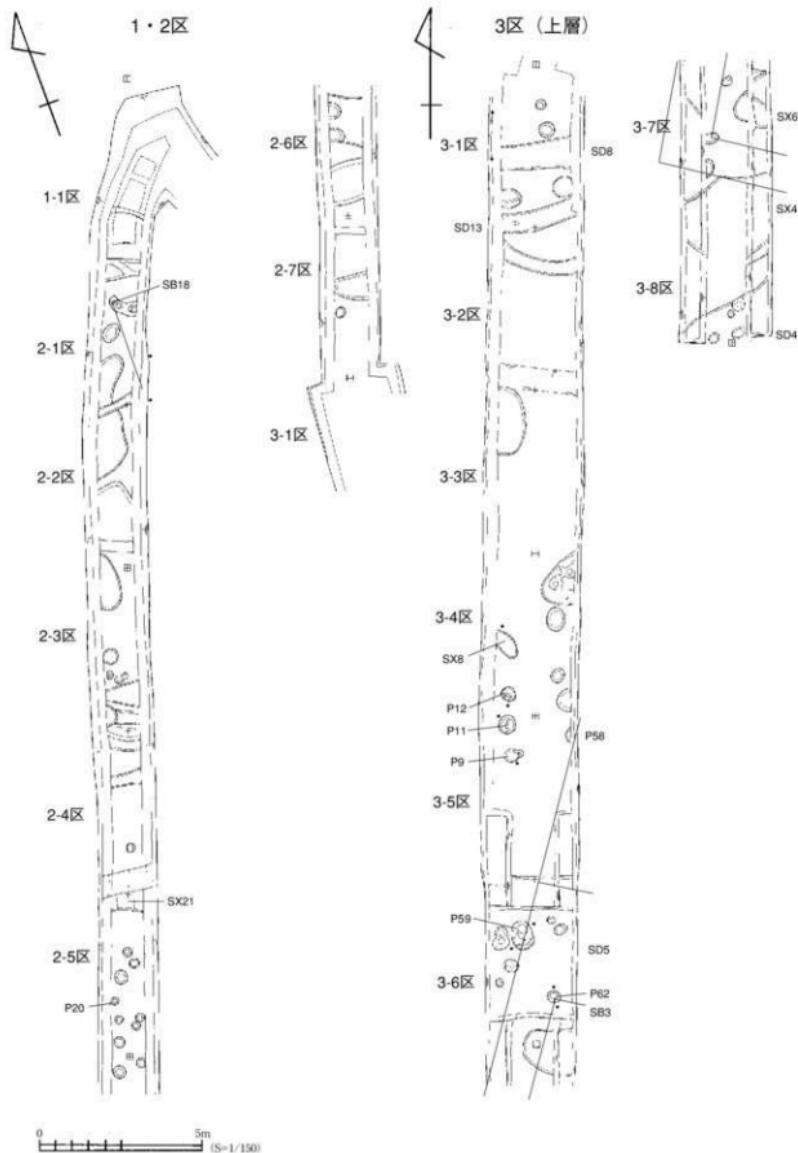
金属製品は66点出土しており、そのうち25点を図化・掲載した。主に排水路調査区B-6区、付替町道調査区B-3～C-9区で確認され、器種は小柄2点、笄1点、刀子1点、鑿1点、鍋1点、鎌1点、釘2点、鉄砲玉1点、錢貨56点である。以下、主要なものを抽出して概説を行う。

第33図金3は3-7区東壁の包1上層から出土した小柄で、2点が刃先の向きを逆にして重ねられたうえに紐で結合されている。両者共に刃部が欠損している。図左側に刃先を向けるものは本体が鉄製で銅製の柄が装着されており、残存長は16.6cm、柄の長さが8.5cm、幅1.2cm、厚さ0.25cmを測る。金5はB-3区SX74から出土した笄で、残存長8.0cm、最大幅1.23cm、厚さ0.15cmを測る。銅製で、笄は欠損している。近世の笄と比べて耳搔が小さく、地板に施される魚々子の単位が大きいことなどから、室町～戦国時代に帰属するものである可能性が高い。錢9～19はC-3区西側側溝から46点が縛状態で出土している。錢9・19には孔内に植物質の紐が残存している。

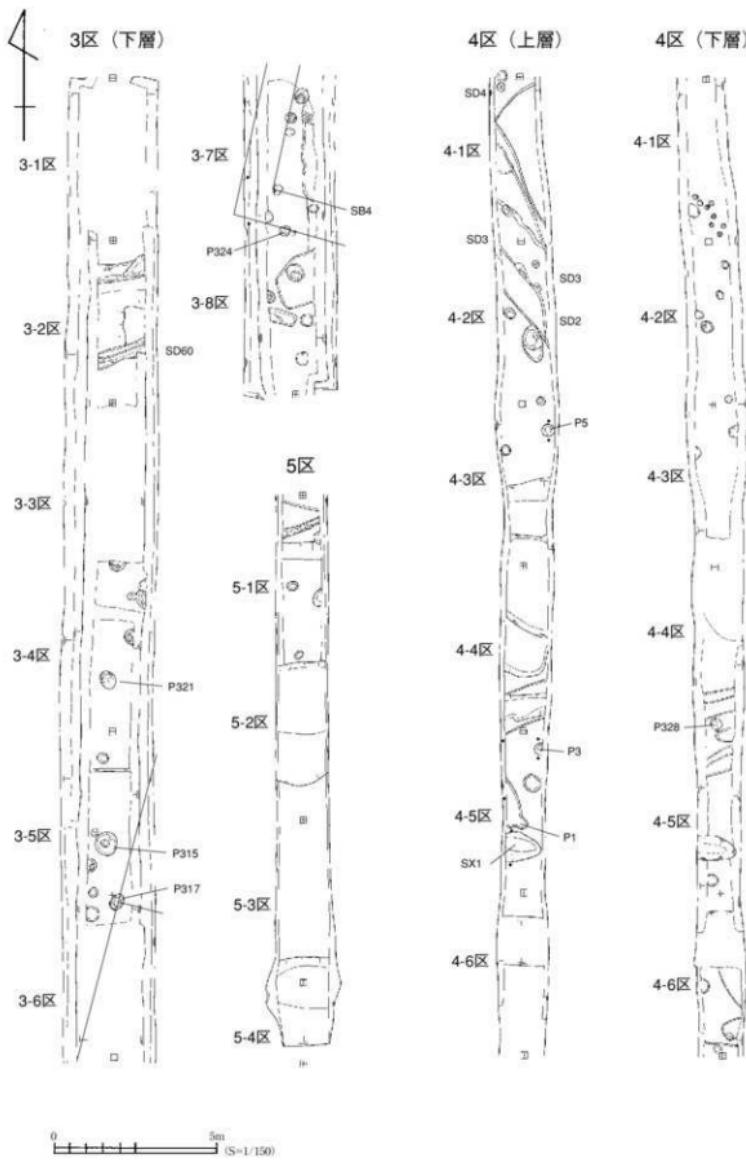
〔木製品〕（第34～36図）

木製品では柱根、礎板、井戸枠部材、杭、漆器椀・皿、曲物、箸、下駄、呪符木箇が出土し、37点を図化・掲載した。以下、主要なものを抽出して概説を行う。

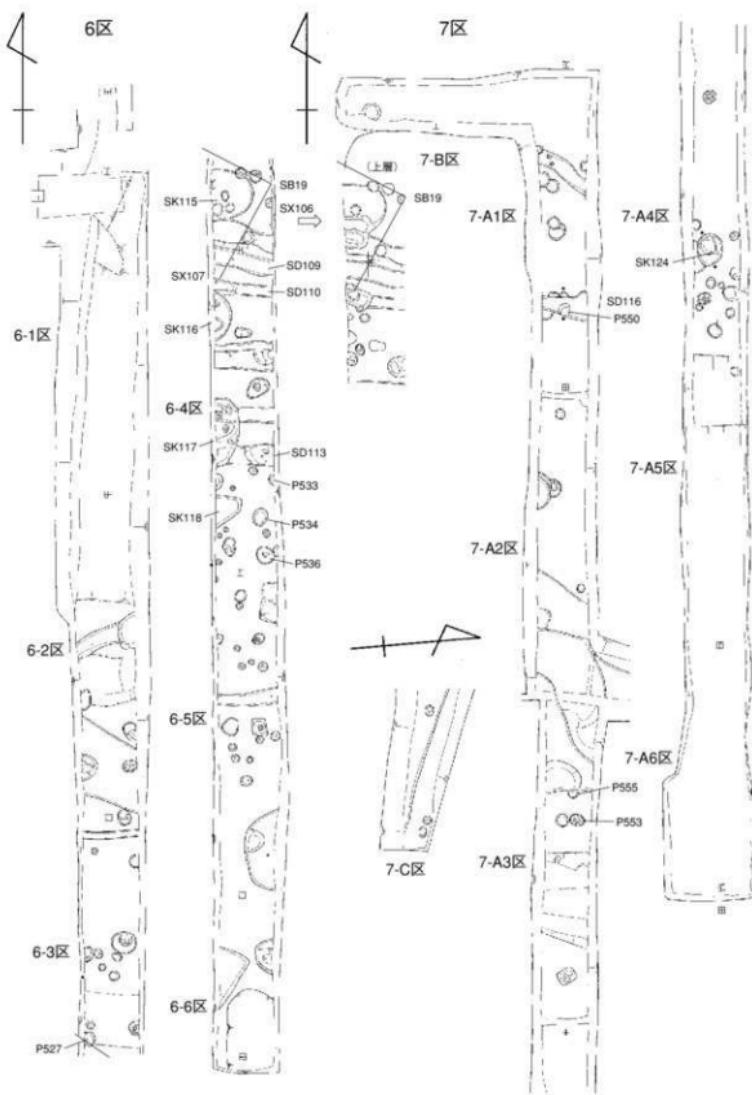
柱根（第34図木1～4・7・8・10）は掘立柱建物を構成するものと考えられ、木2・4・8など底が焼かれ炭化しているものも認められる。材は全てクリの芯持ち材を用いている。一方、第35図木15～25などの井戸枠部材は、木22の横桟の用材がクリである以外はスギを用いている。また、C-6区SE1から出土した第35図木15・16の縦板、C-1・2区SE6から出土した第35図木20・21の横桟と第36図木23～25には、井戸枠の構築には不要である釘の痕跡が認められ、釘孔に木釘が残存するものもあることから、建築部材を転用していた可能性が高い。遺跡の所在する旧鳥屋町の地質は、丘陵部が船津花崗岩（ジュラ紀）を基盤とし、その上を礫岩、砂岩（中新世中期、前期）が覆う脆弱地盤であるため、土砂の滑落が著しく、旧二宮川により運ばれた土砂が丘陵裾部から谷部に厚く二次堆積している。そのため、旧鳥屋町は元来山林面積が少ない地域であり、建物の柱など長大・多量の木材を要するものはクリを使用し、板材を要するものを主体に割裂性の大きなスギを用いることで、森林（針葉樹木）資源の不足に対応していた可能性が高い。なお、C-3区SK112から出土した縦板（第36図木35）は、網合目盛り板を転用したものである。第34図木5、第36図木33は曲物の底板で、材は木5がヒノキ科、木33はスギを用いている。木5は表裏面に切り傷をもち、まな板などの作業台として転用された可能性が高い。第35図木14は漆器皿で、材はブナ属を用いている。口径7.8cm、底径4.8cm、器高1.6cmを測り、内外面に黒漆を塗布する。口縁の造りは比較的厚く、低い高台をもっており、富山県中新川郡立山町辻遺跡の穴-01（井戸、14世紀後半）出土の漆器皿と形態などが類似している。第36図木26は漆器椀で、材はブナ属を用いている。口径11.6cm、底径6.2cm、器高4.7cmを測り、比較的薄い底部には低い高台をもつ。身は内済しながら緩やかに外方にたちあがり、口縁に段をもつ。第36図木27はC-1区SE6から出土した呪符木箇である。表面には「（符録）パン（梵字）水從竹迪流出資」、裏面には「☆」が墨書きされている。「迪」はすすむ、みちびく、「資」は水が湧き溢れるという意味をもつことから、井戸を設置する際に水が絶えず湧き出でることを願ったまじないを行ったものと考えられる。



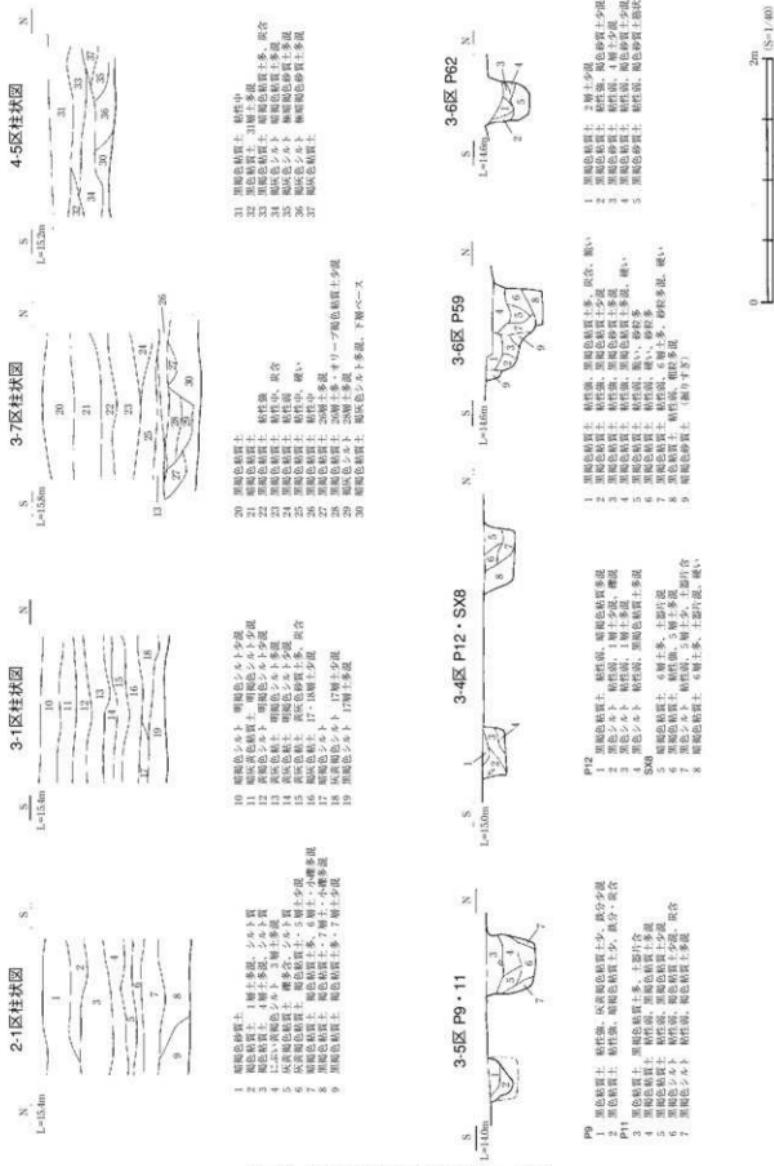
第2図 排水路調査区平面図1 (S=1/150)



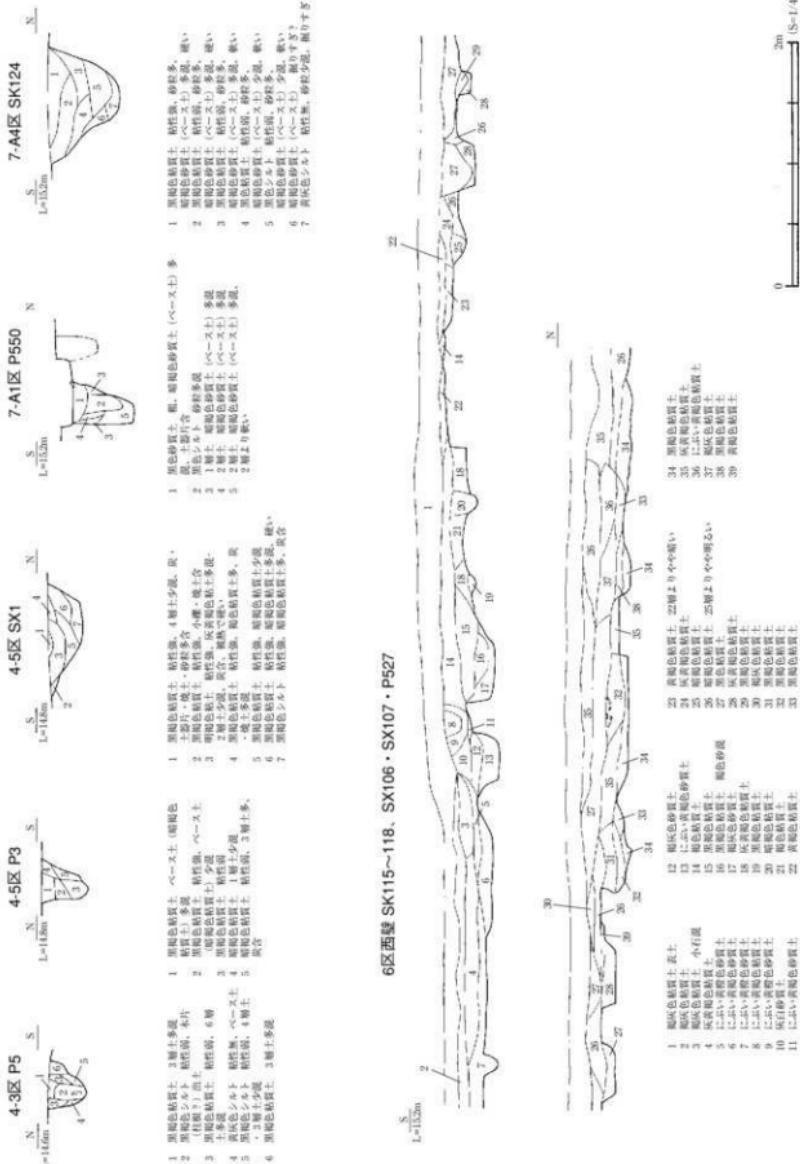
第3図 排水路調査区平面図2 (S=1/150)



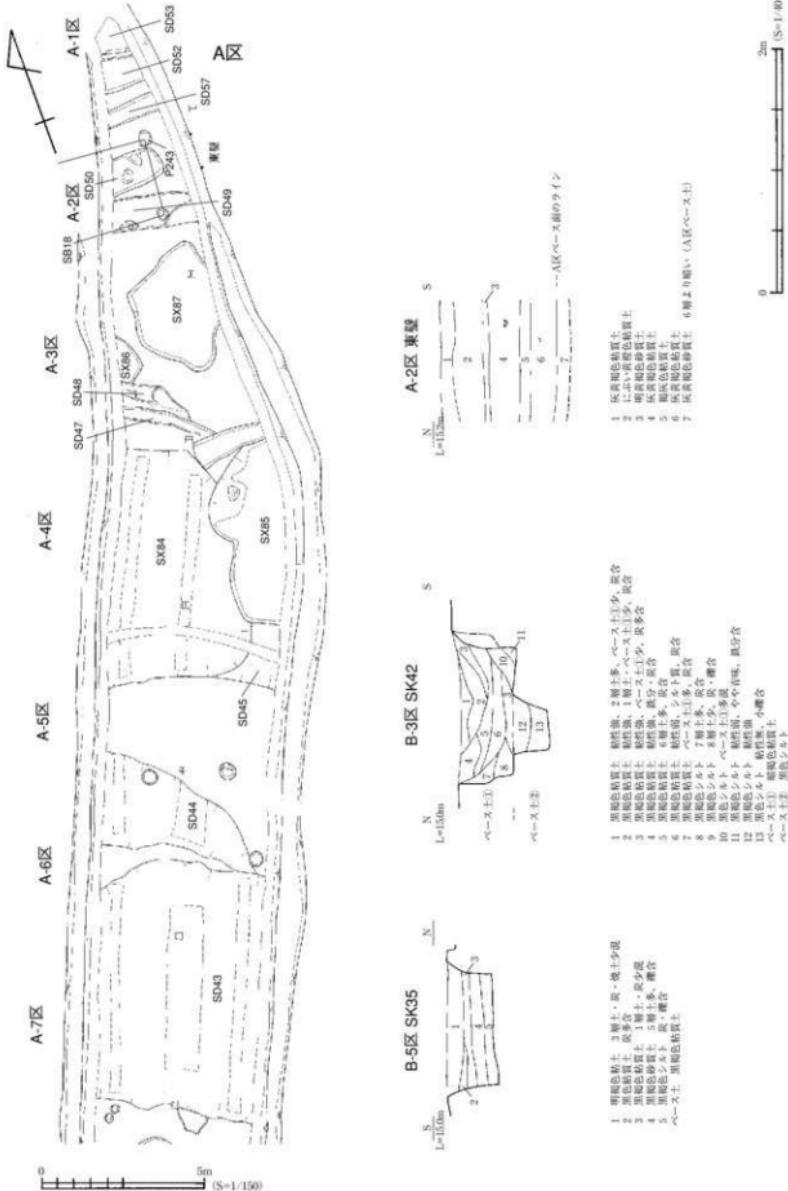
第4図 排水路調査区平面図3 (S=1/150)



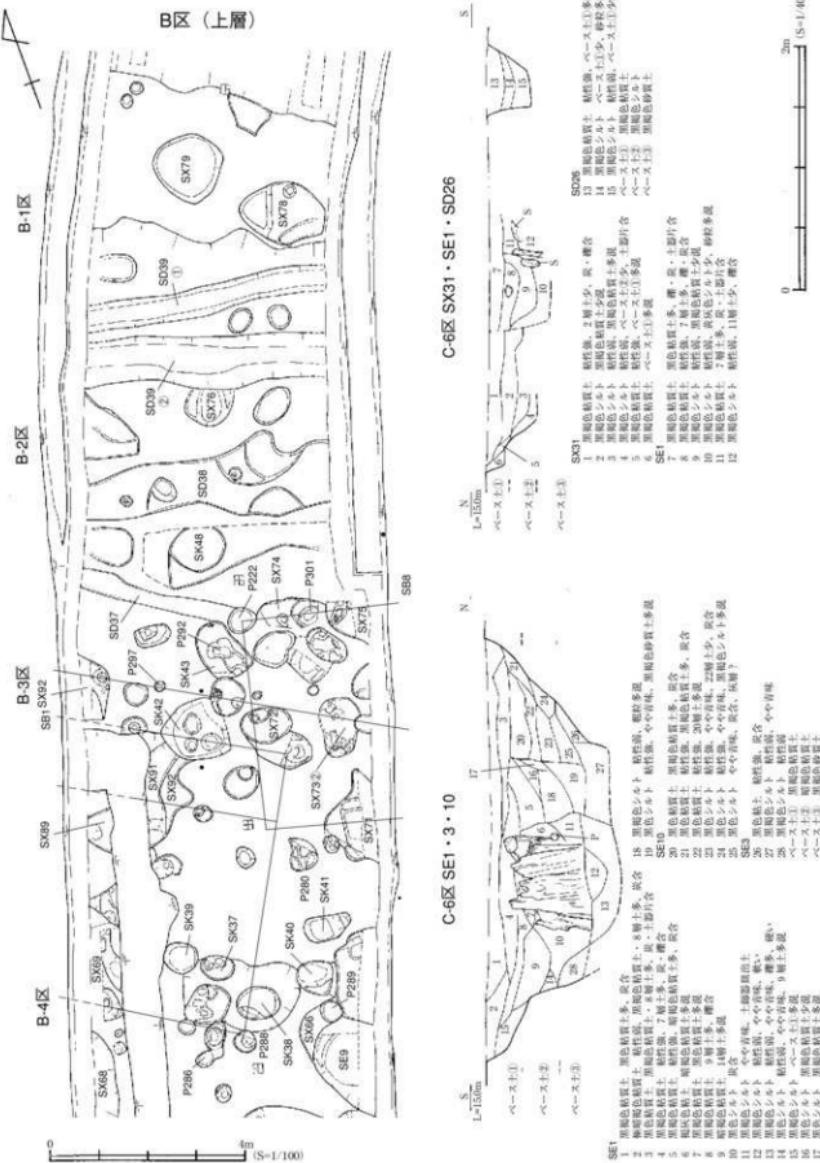
第5図 排水路調査区土層断面図1 (S=1/40)



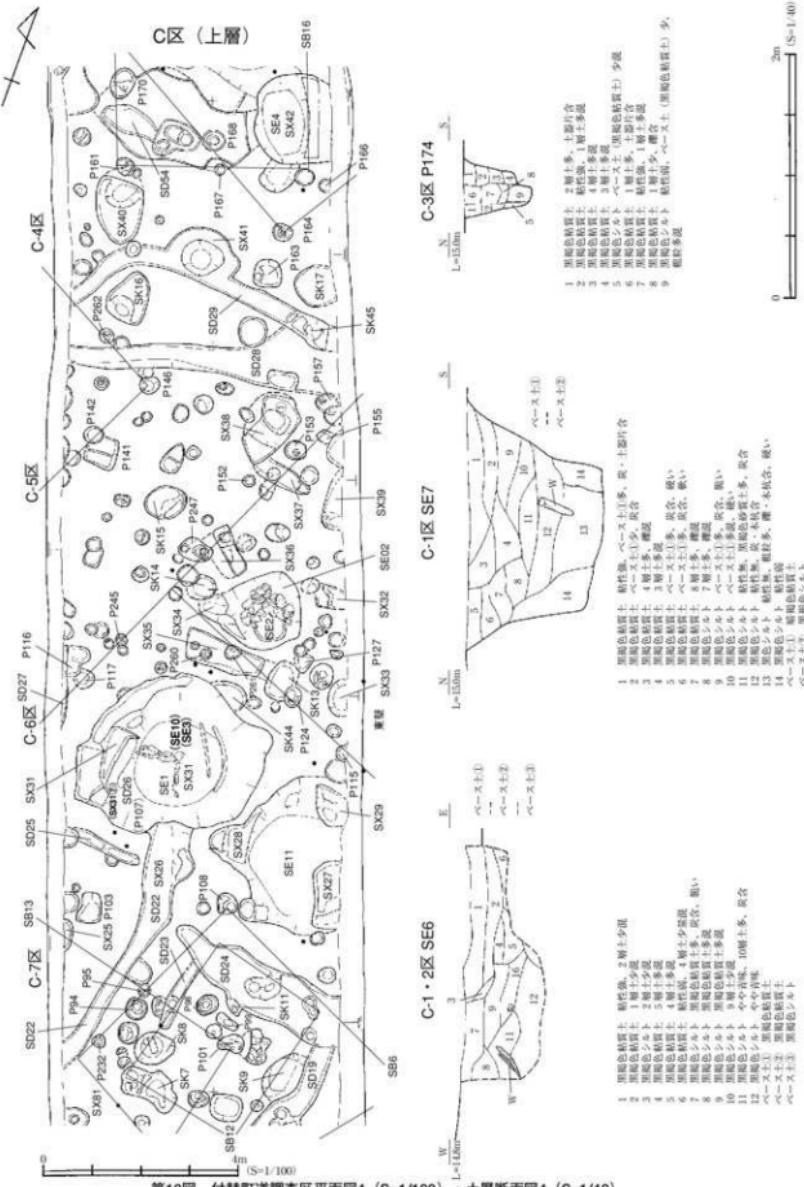
第6図 排水路調査区土層断面図2 (S=1/40)



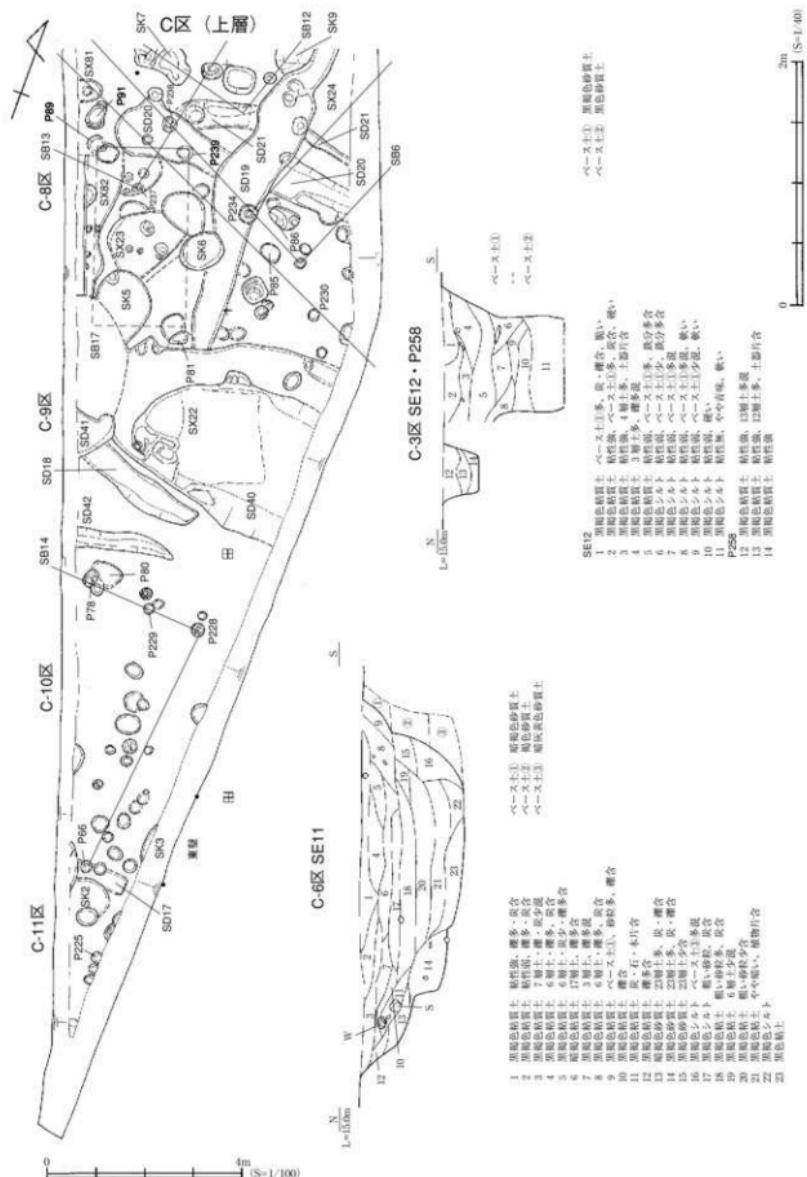
第7図 付替町道調査区平面図1 (S=1/150)・土層断面図1 (S=1/40)



第8図 付替町道調査区平面図2 (S=1/100)・土層断面図2 (S=1/400)



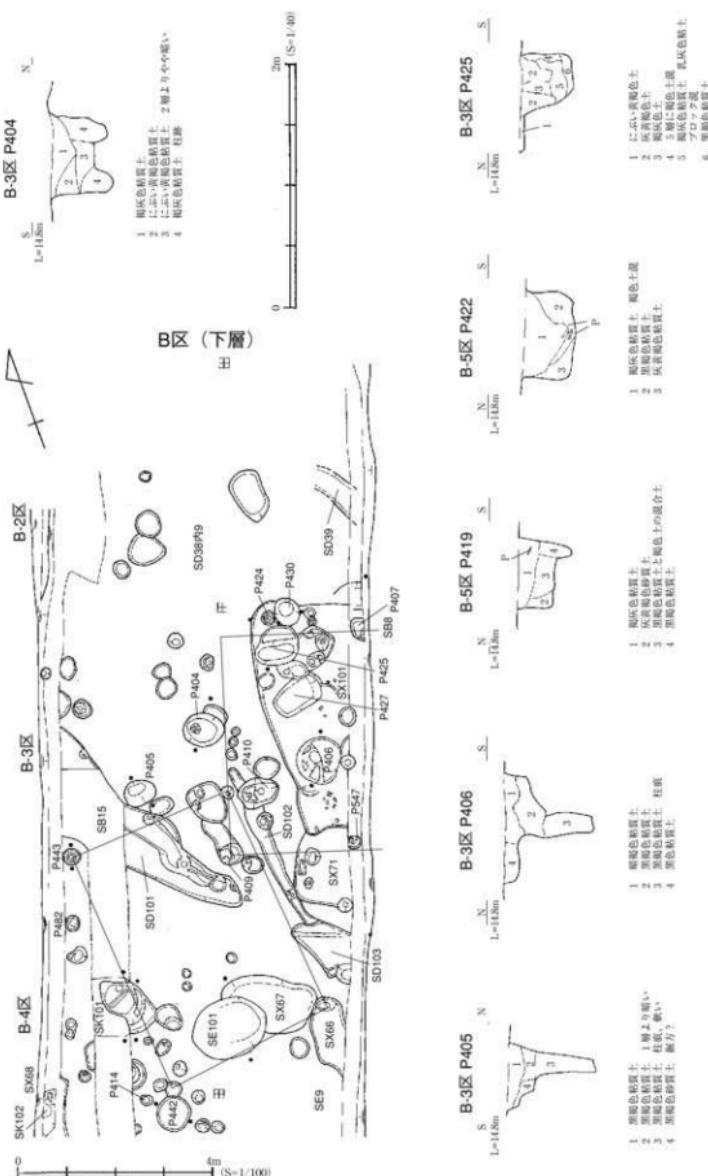
第10図 付替町道調査区平面図4 (S=1/100)・土層断面図4 (S=1/40)



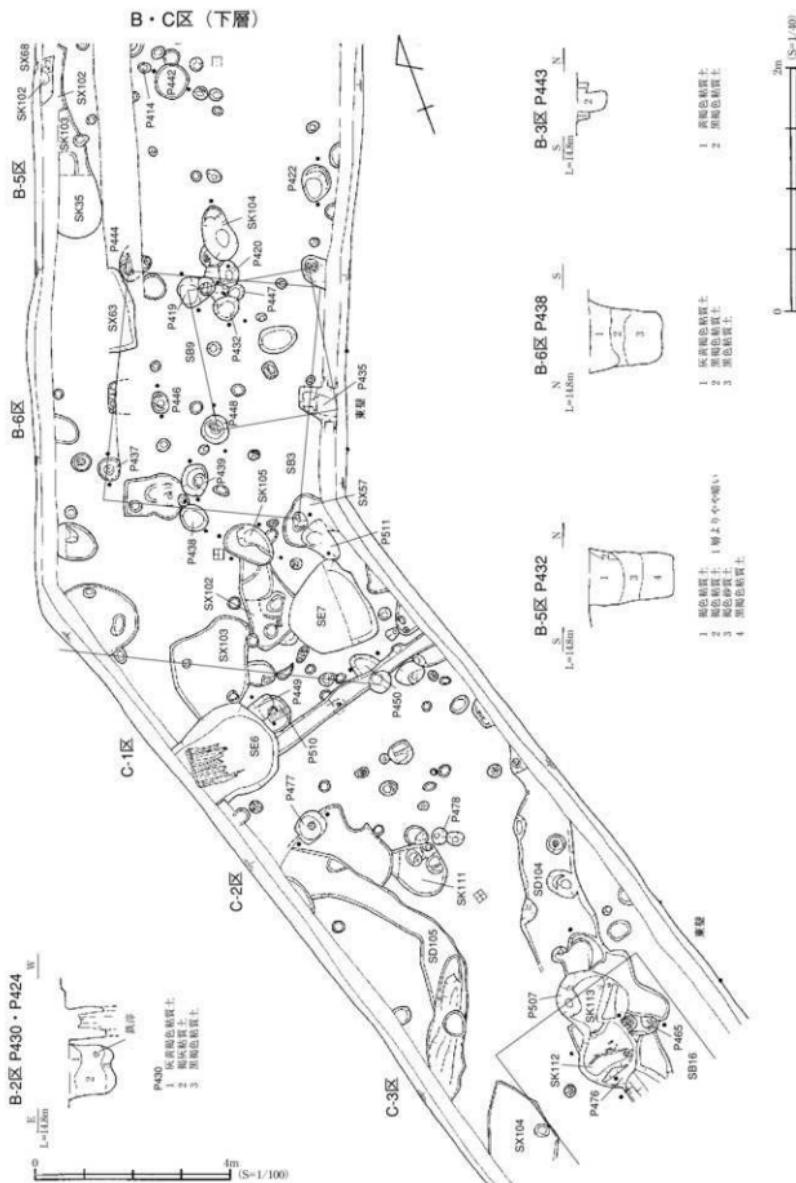
第11図 付替町道調査区平面図5 (S=1/100)・土層断面図5 (S=1/40)



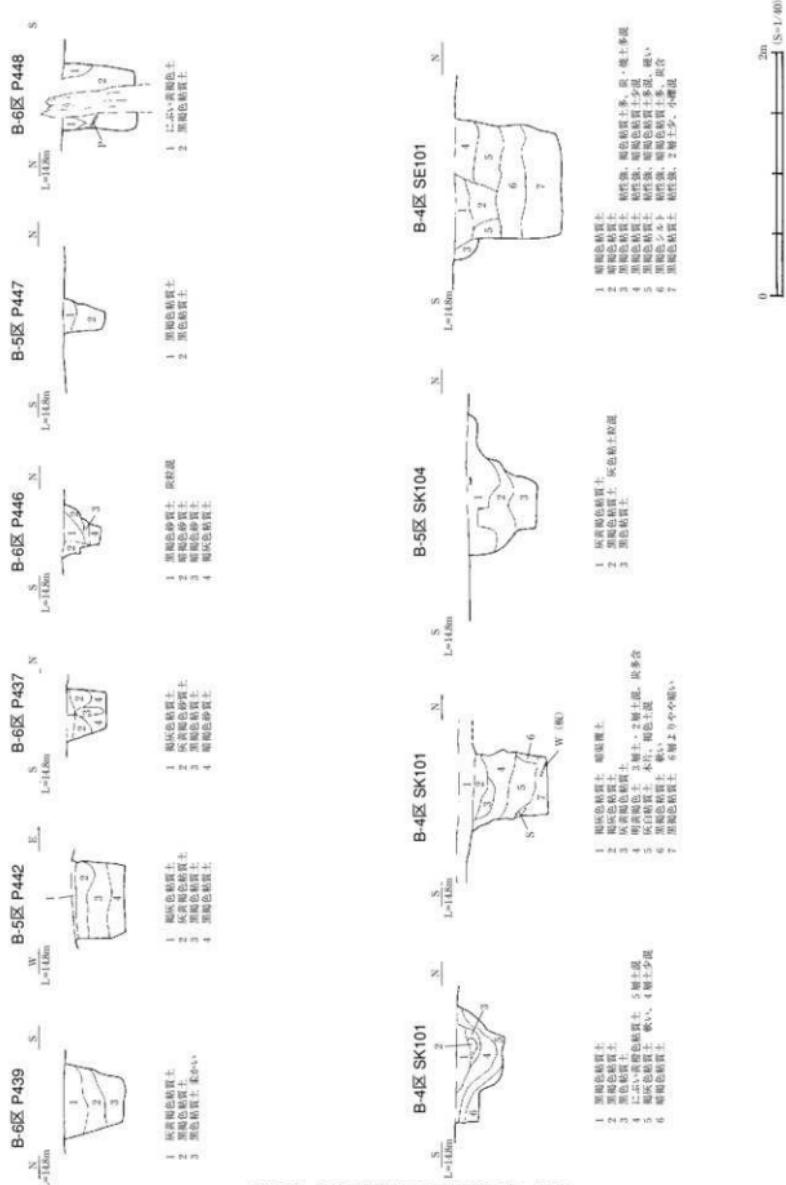
第12図 付替町道調査区土層断面図6 (S=1/40)



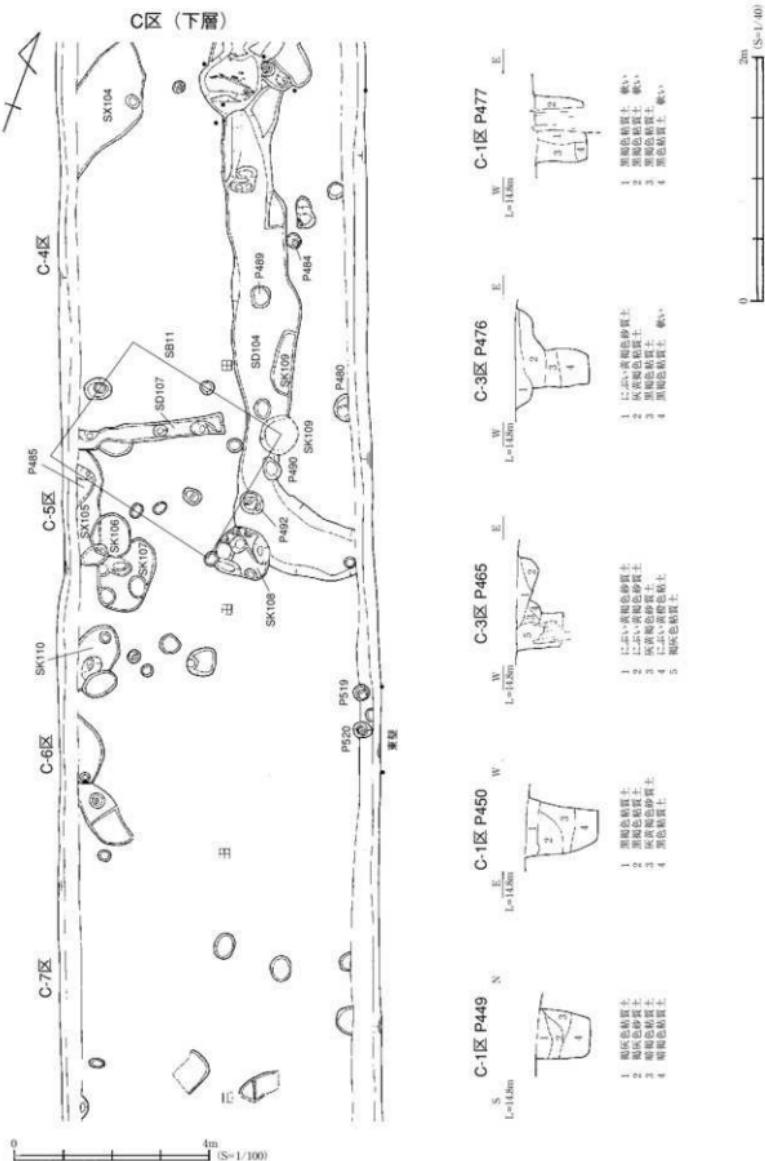
第13図 付替町道調査区平面図6 (S=1/100)・土層断面図7 (S=1/40)

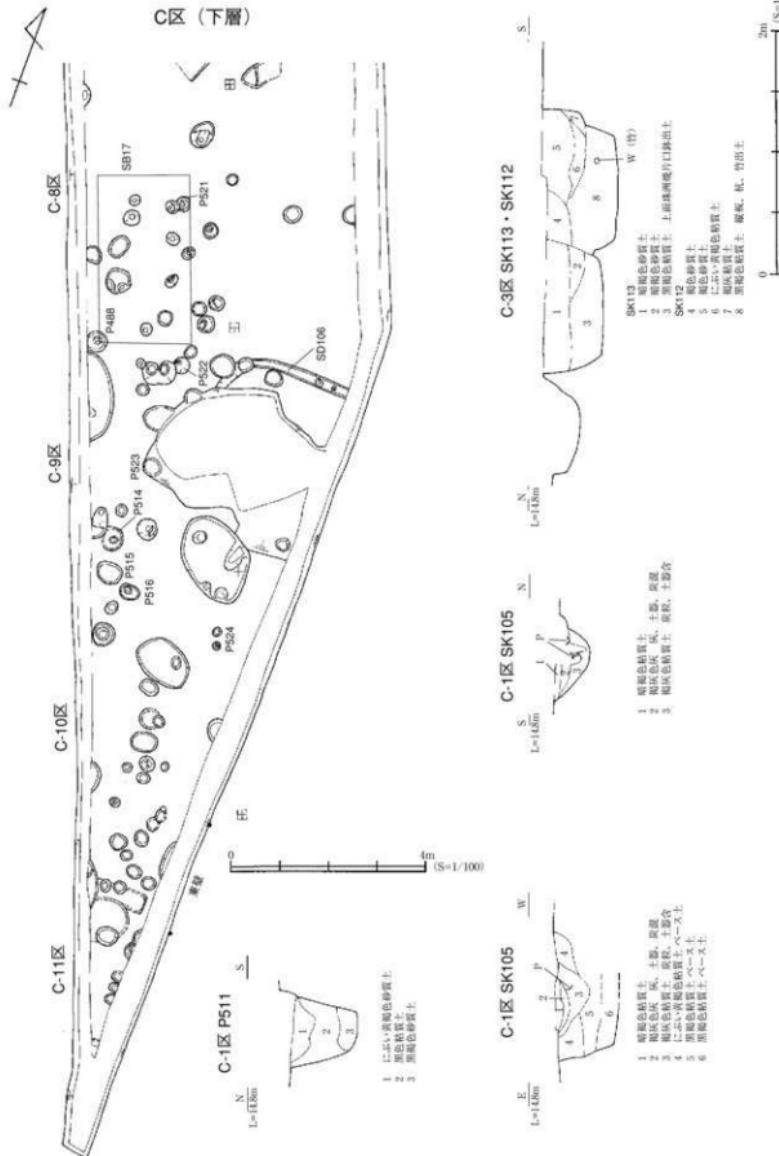


第14図 付替町道調査区平面図7 (S=1/100)・土層断面図8 (S=1/40)

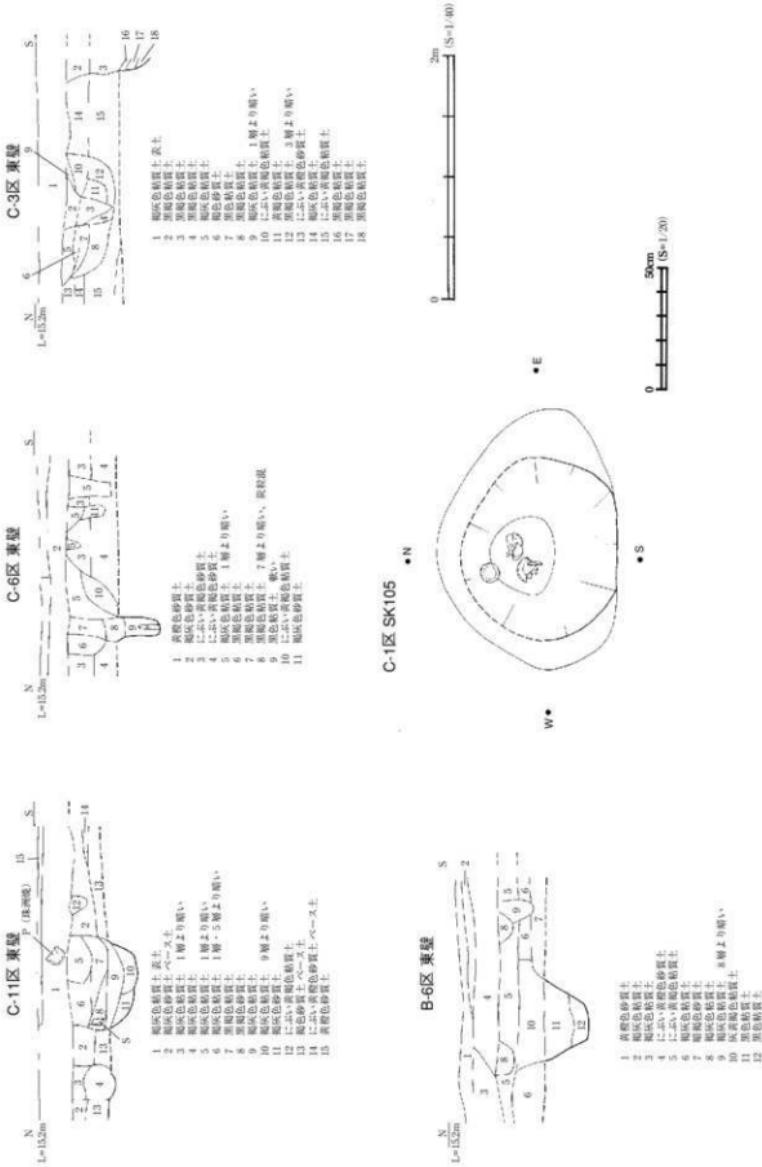


第15図 付替町道調査区土層断面図9 (S=1/40)

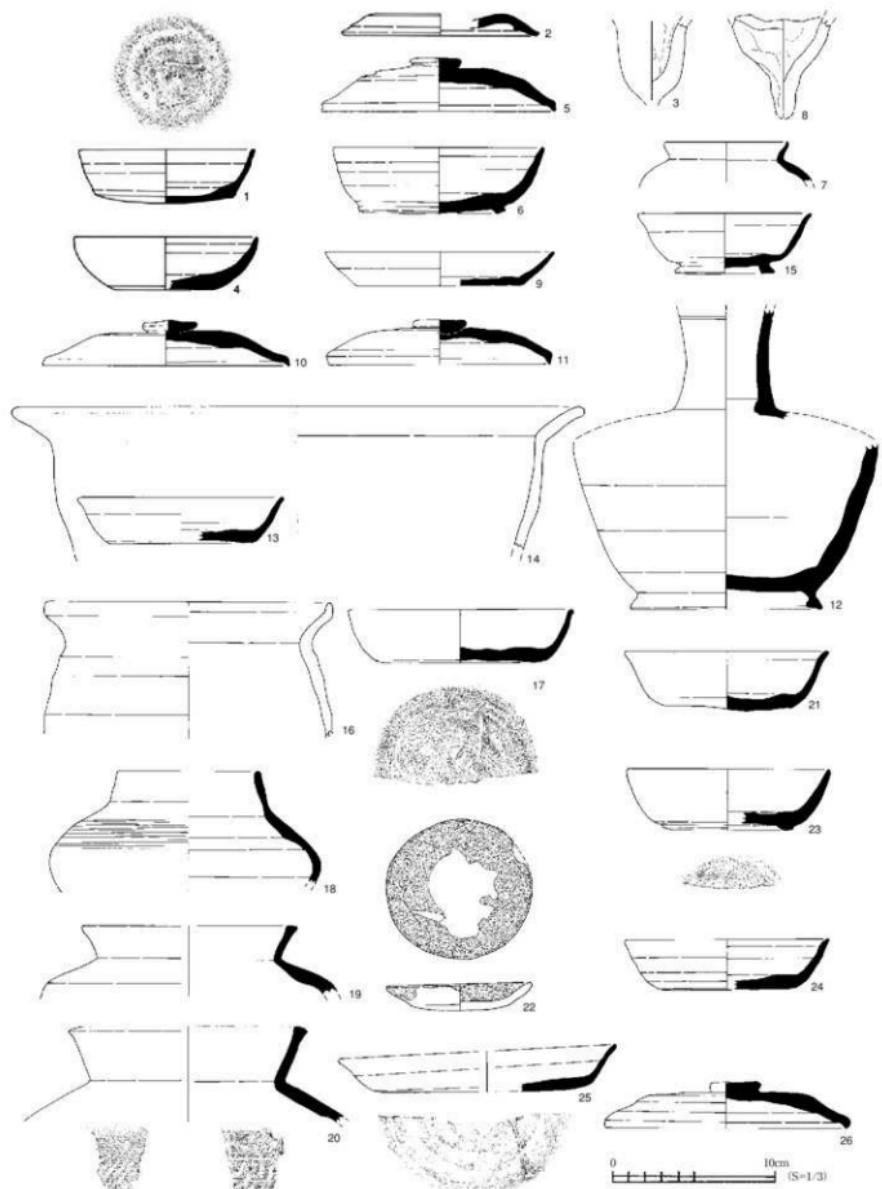




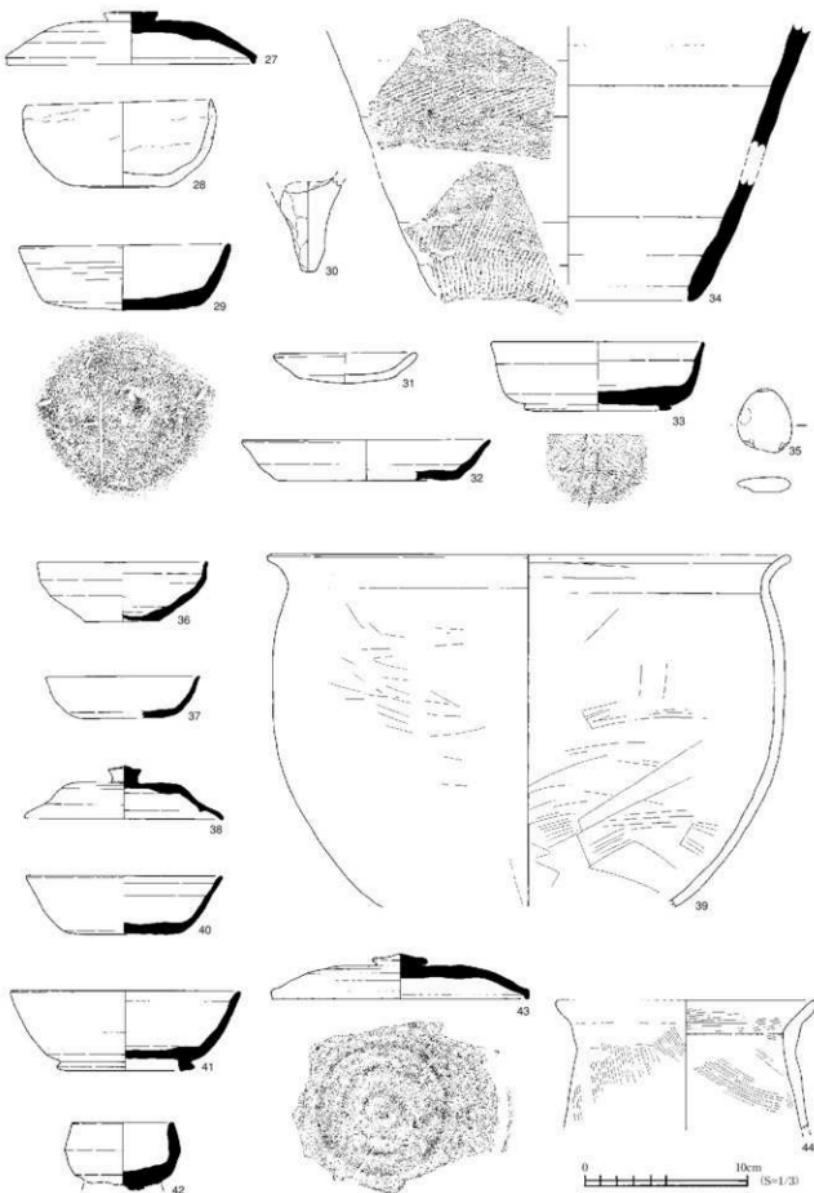
第17図 付替町道調査区平面図9 (S=1/100)・土層断面図11 (S=1/40)



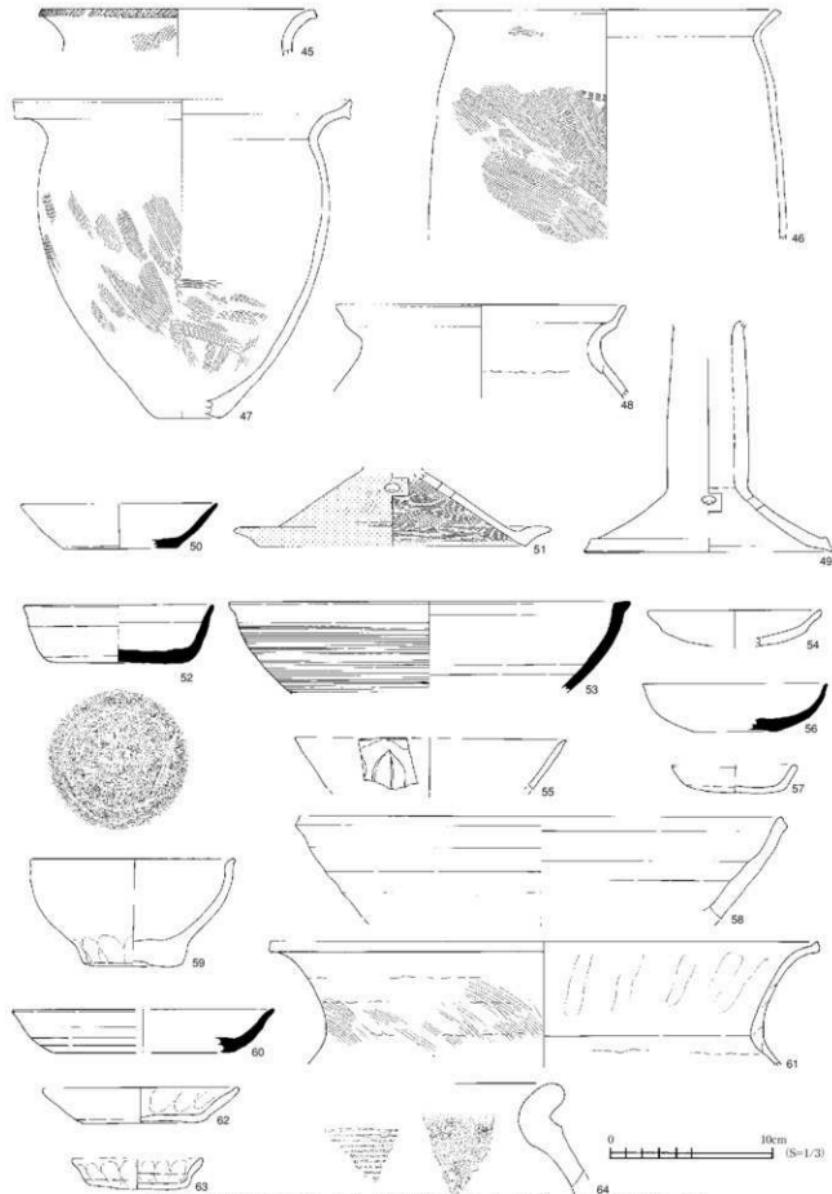
第18図 付替町道調査区土層断面図12 (S=1/40)・建物出土状況図 (S=1/20)



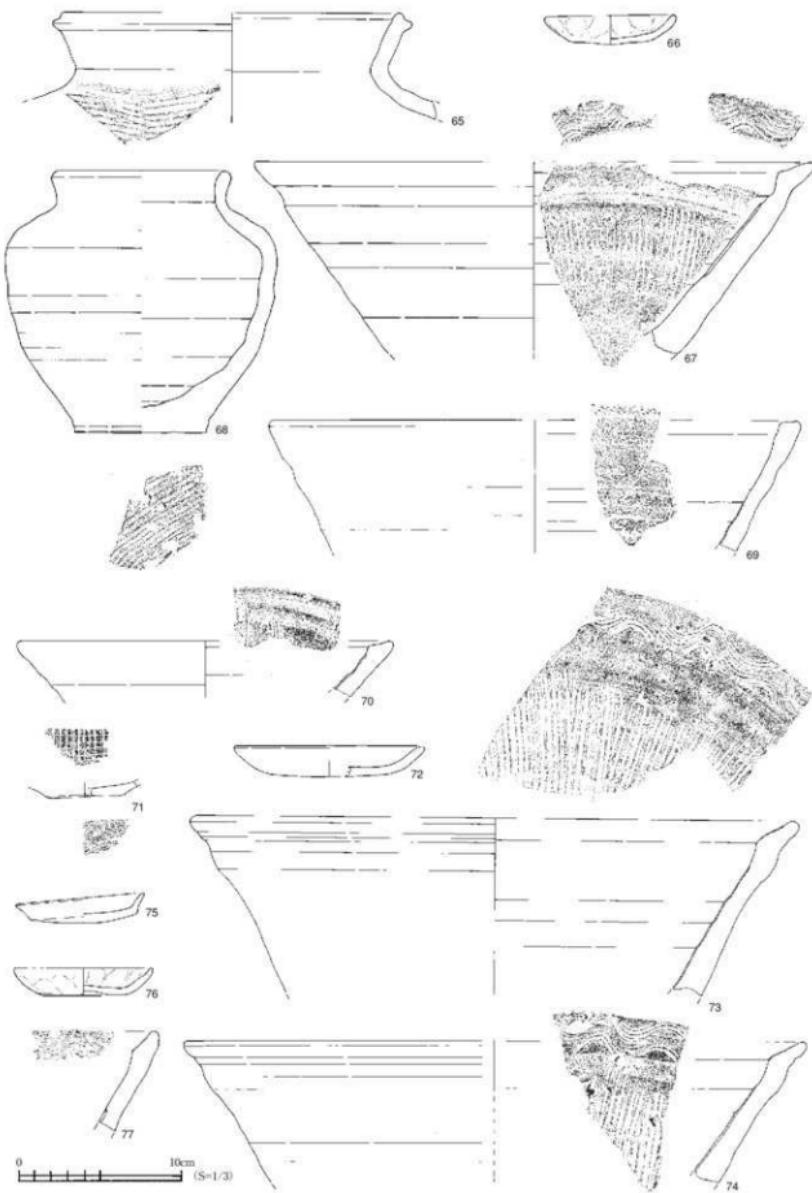
第19図 排水路調査区（2・3区） 土器実測図 (S=1/3)

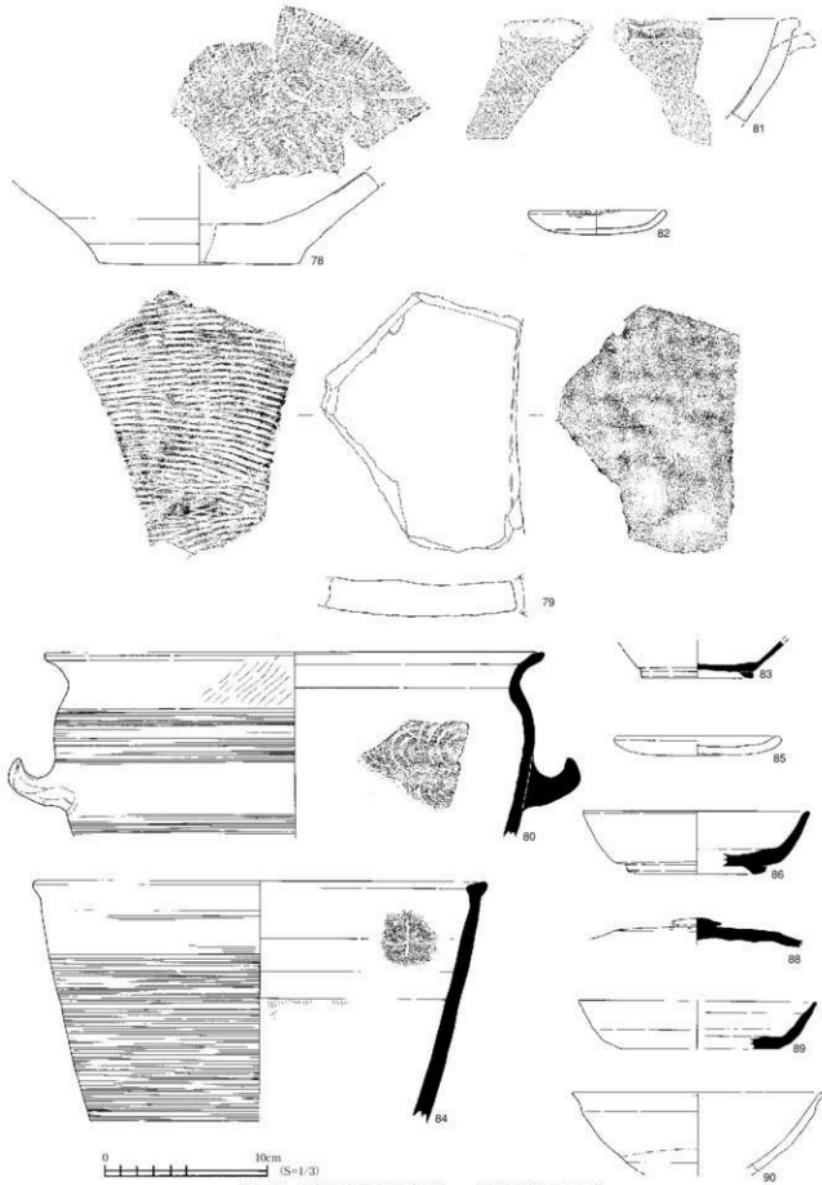


第20図 排水路調査区(3+4区) 土器実測図(S=1/3)

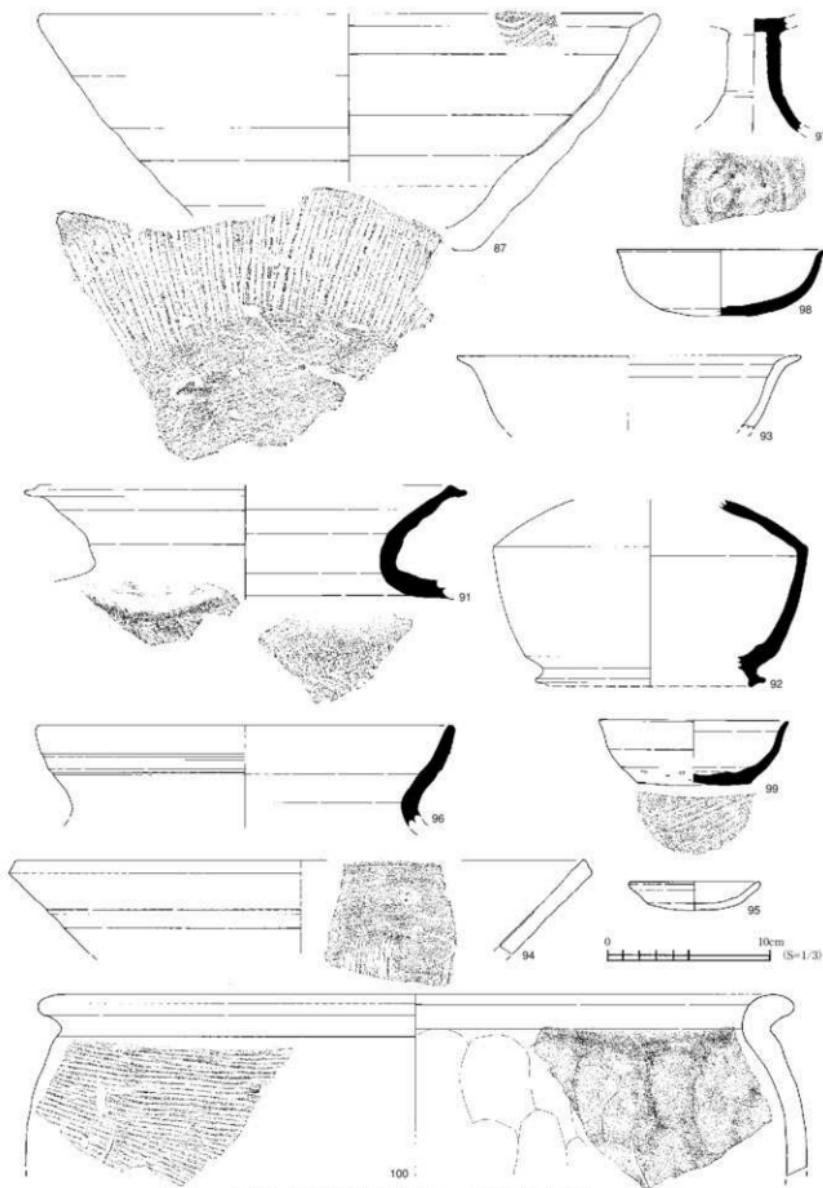


第21図 排水路調査区(6・7区)、付替町道調査区(A・B区) 土器実測図(S=1/3)

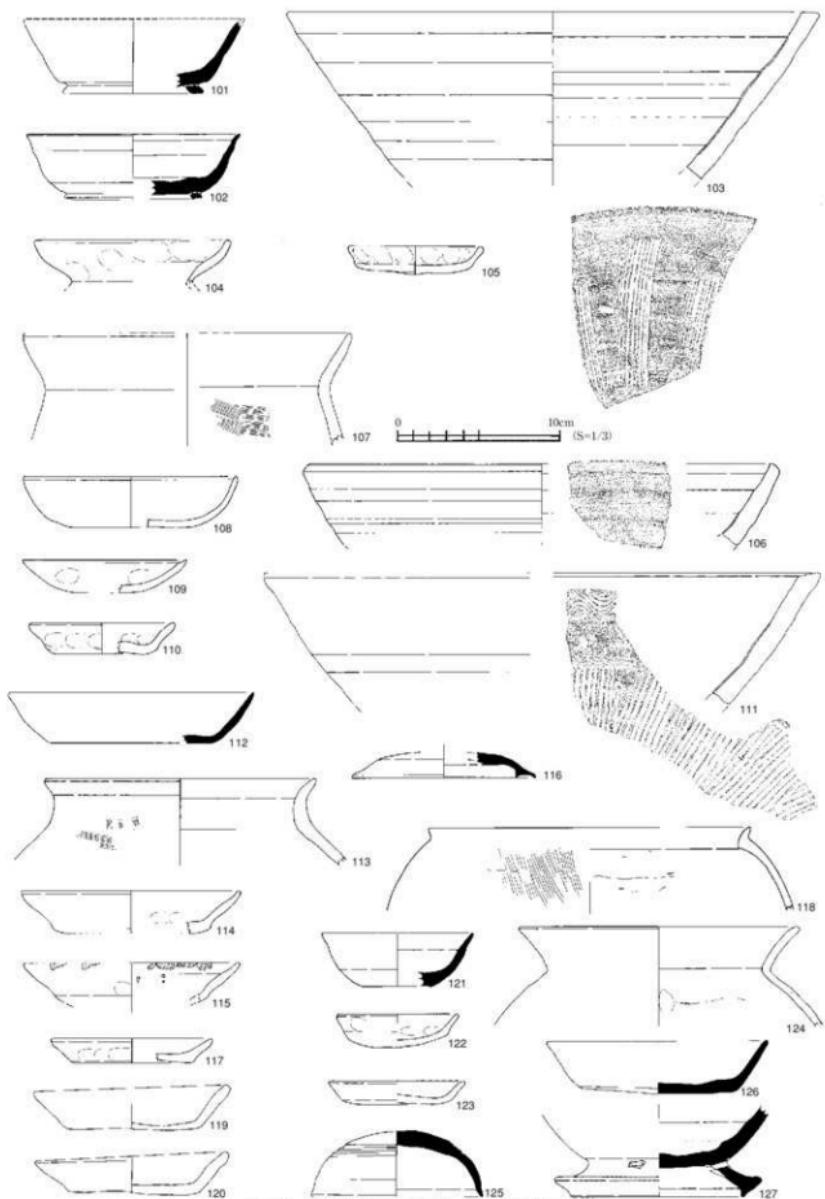
第22図 付替町道調査区（B区土坑） 土器実測図 ($S=1/3$)



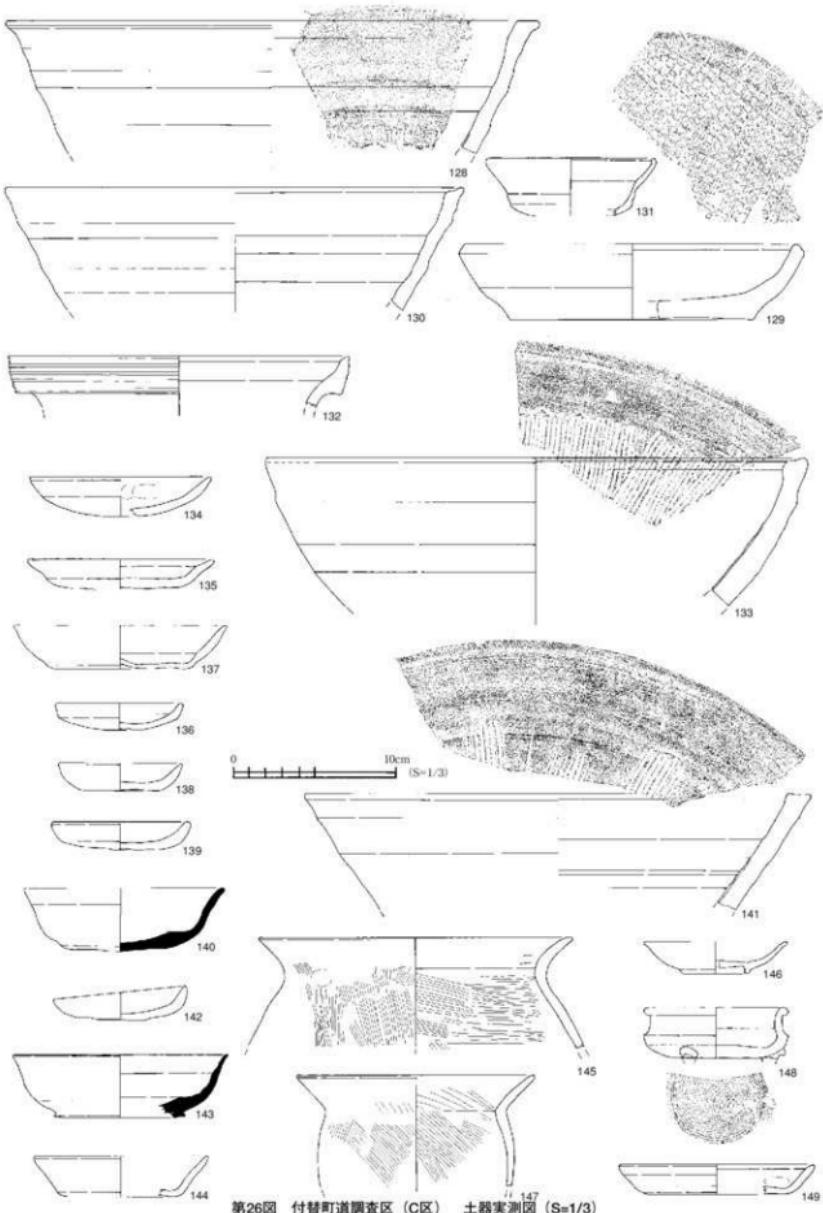
第23図 付替町道調査区（B区） 土器実測図（S=1/3）

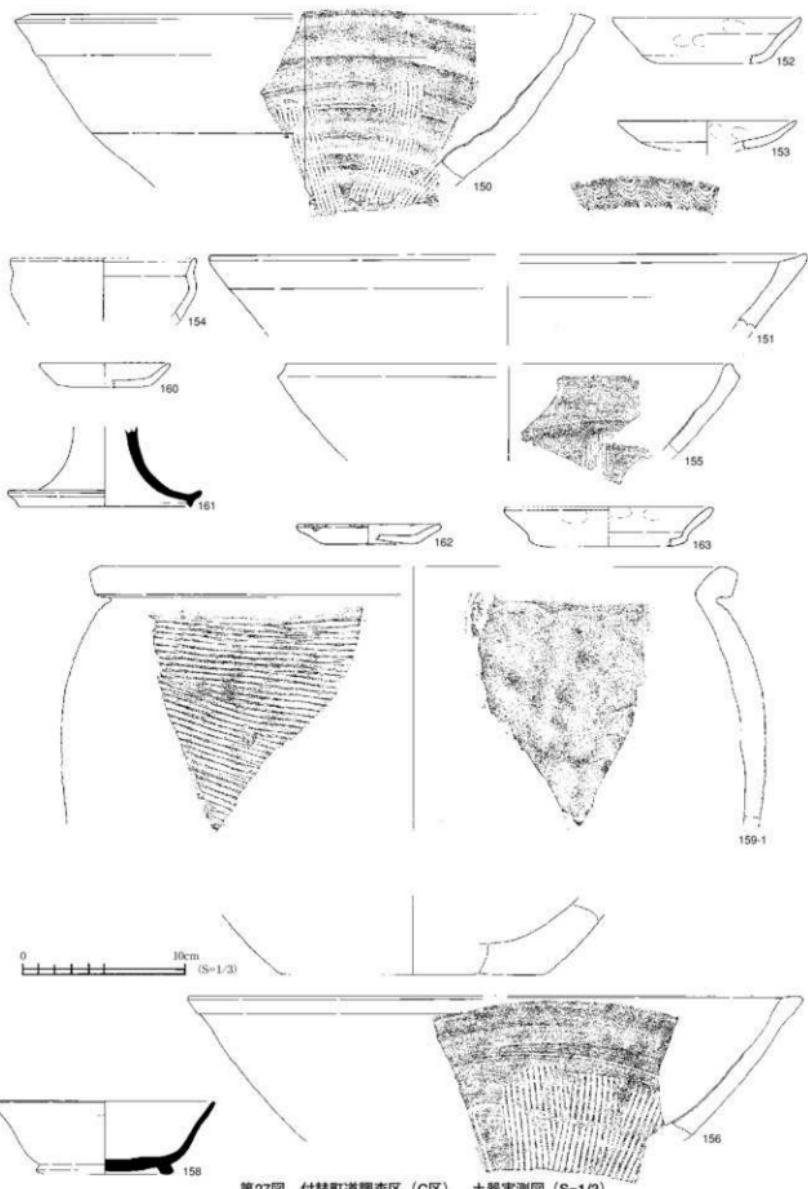


第24図 付替町道調査区（B区） 土器実測図（S=1/3）

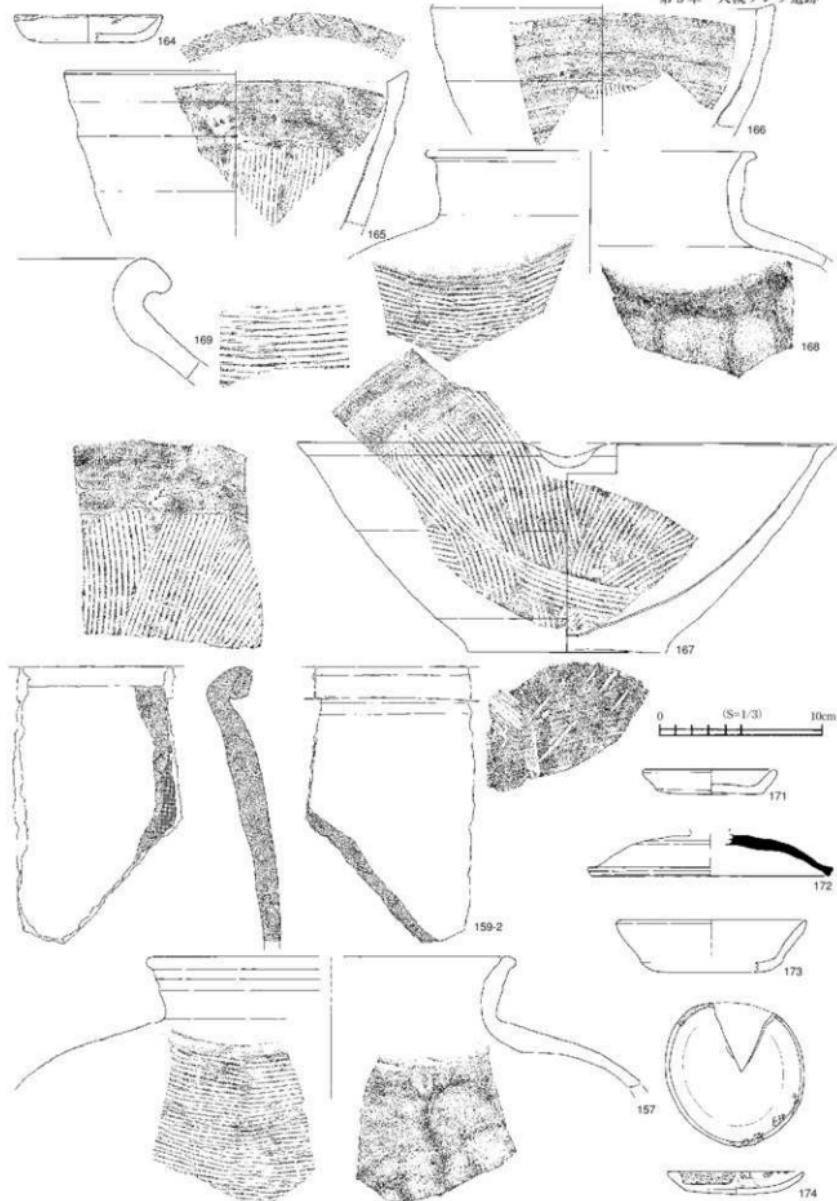


第25図 付替町道調査区（C区） 土器実測図 ($S=1/3$)

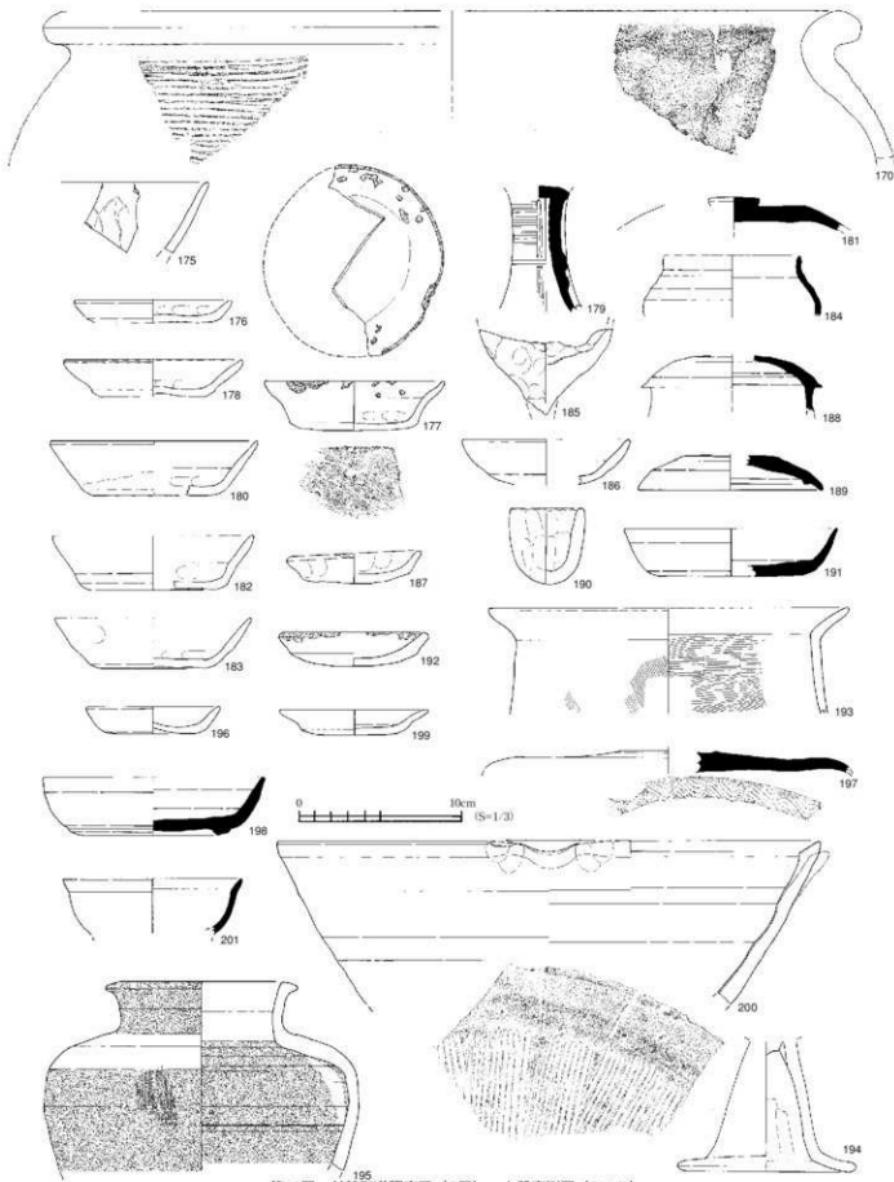
第26図 付替町道調査区（C区） 土器実測図 ($S=1/3$)



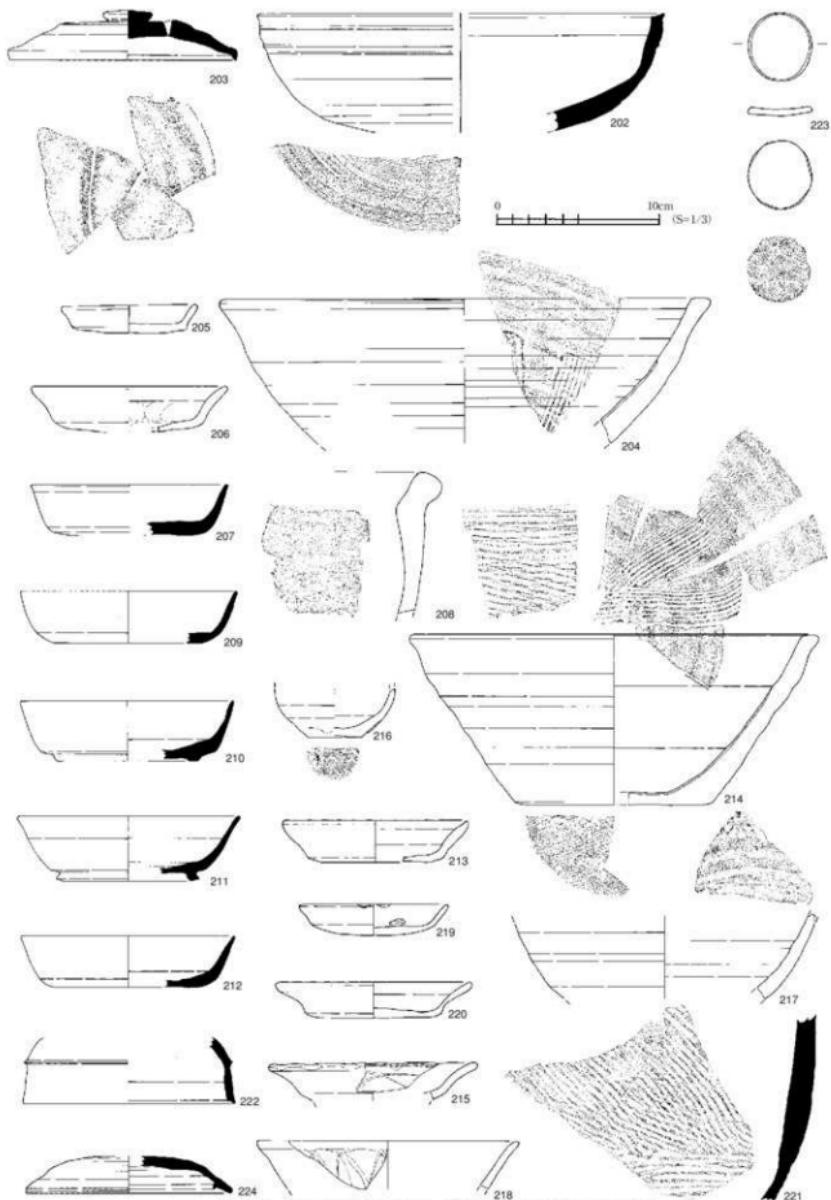
第27図 付替町道調査区（C区） 土器実測図 ($S=1/3$)



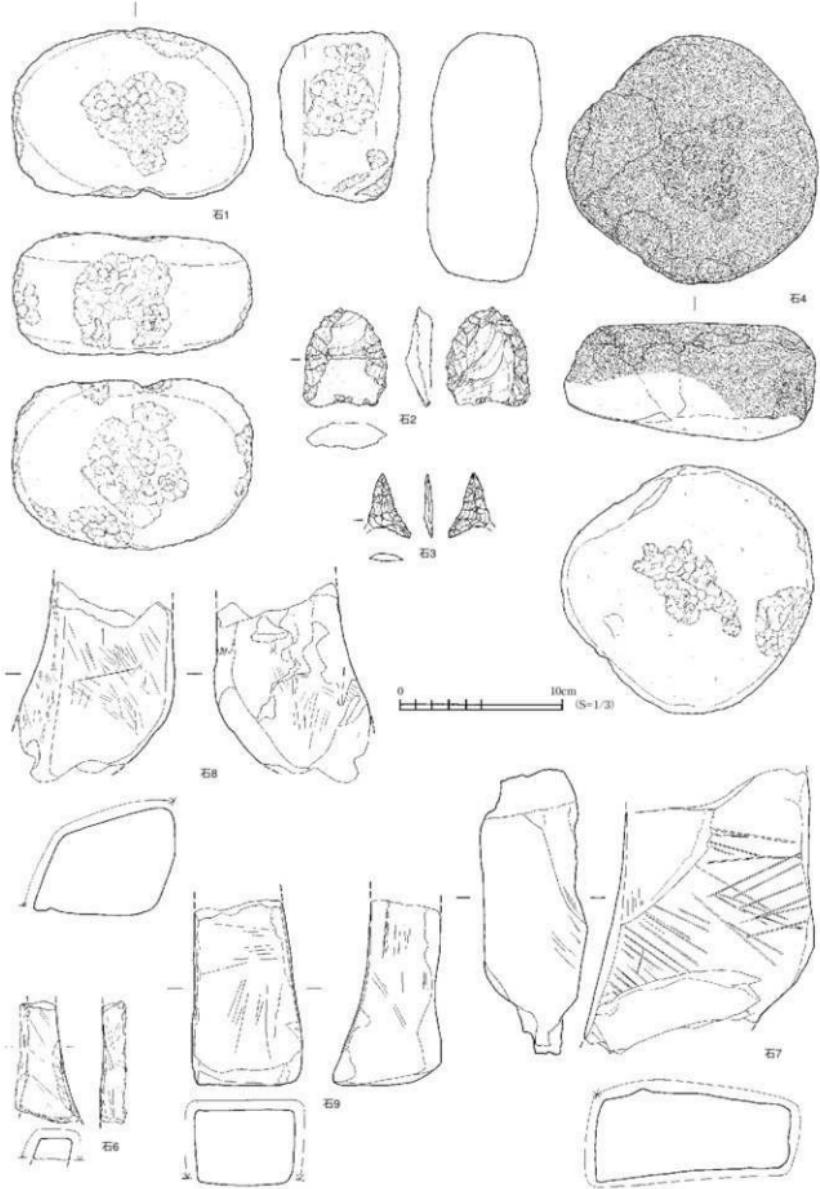
第28図 付替町道調査区（C区） 土器実測図 ($S=1/3$)



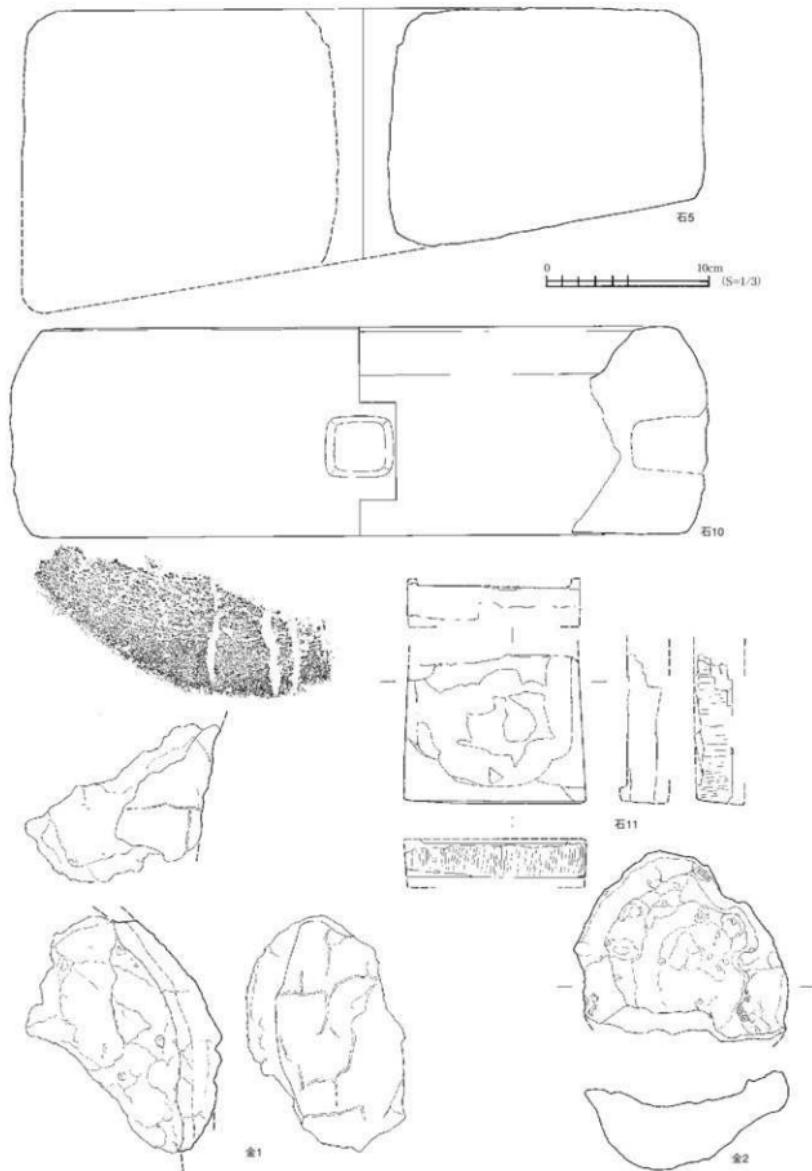
第29図 付替町道調査区（C区） 土器実測図（S=1/3）



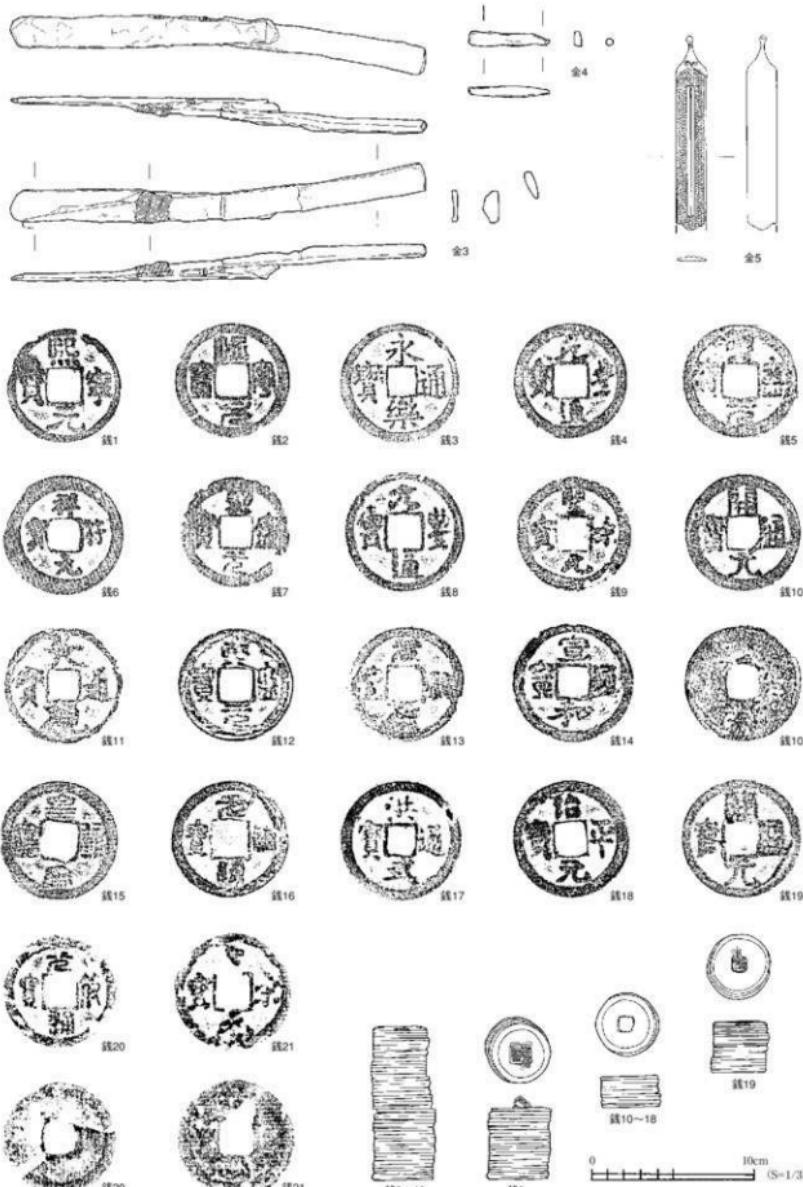
第30図 付替町道調査区(C区)、調査区外 土器実測図 (S=1/3)



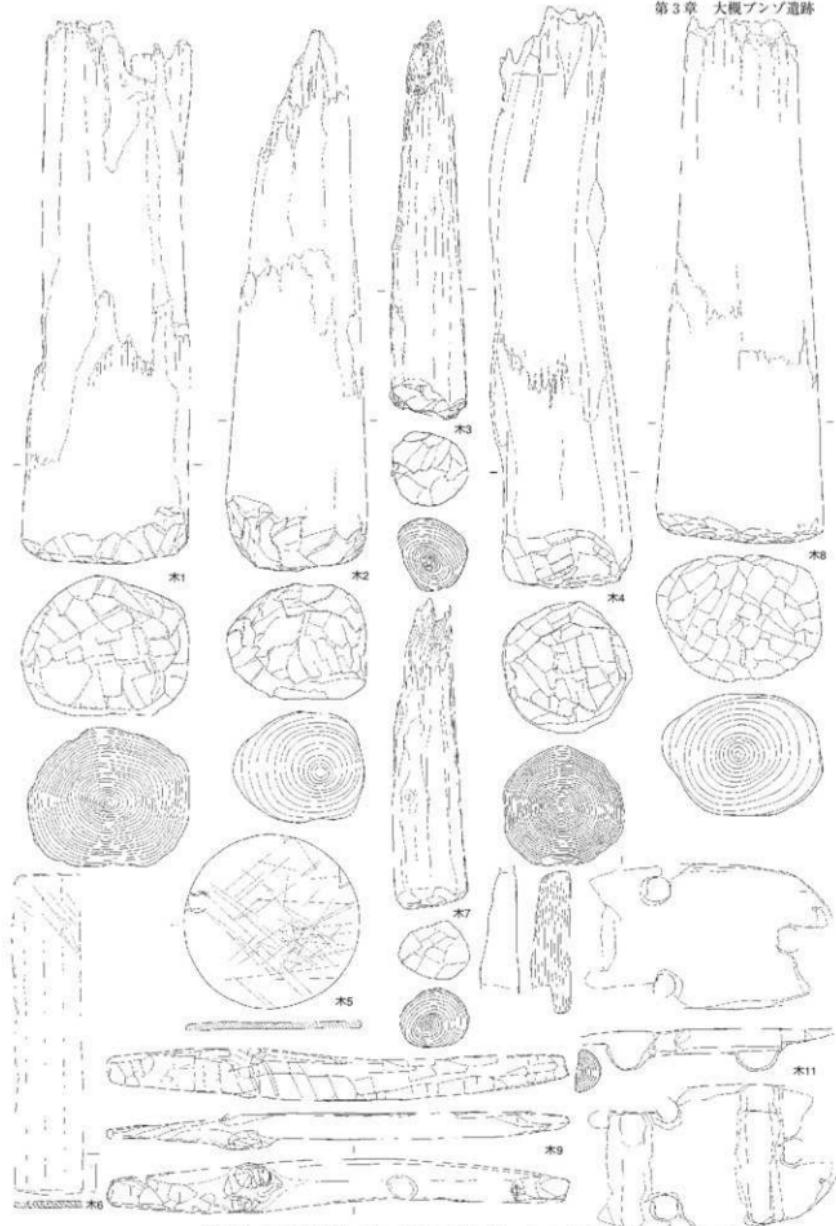
第31図 石製品実測図 (S=1/3)



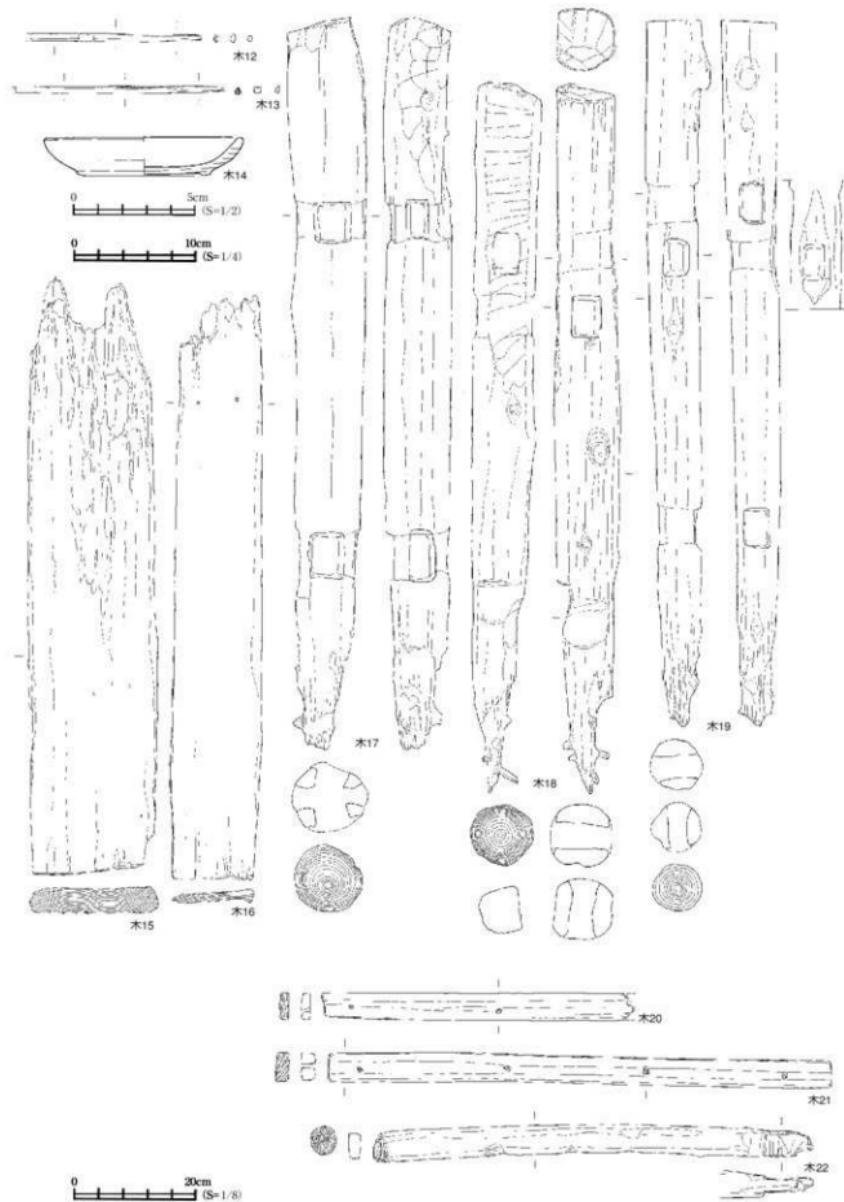
第32図 石製品、鍛冶関連資料実測図 (S=1/3)



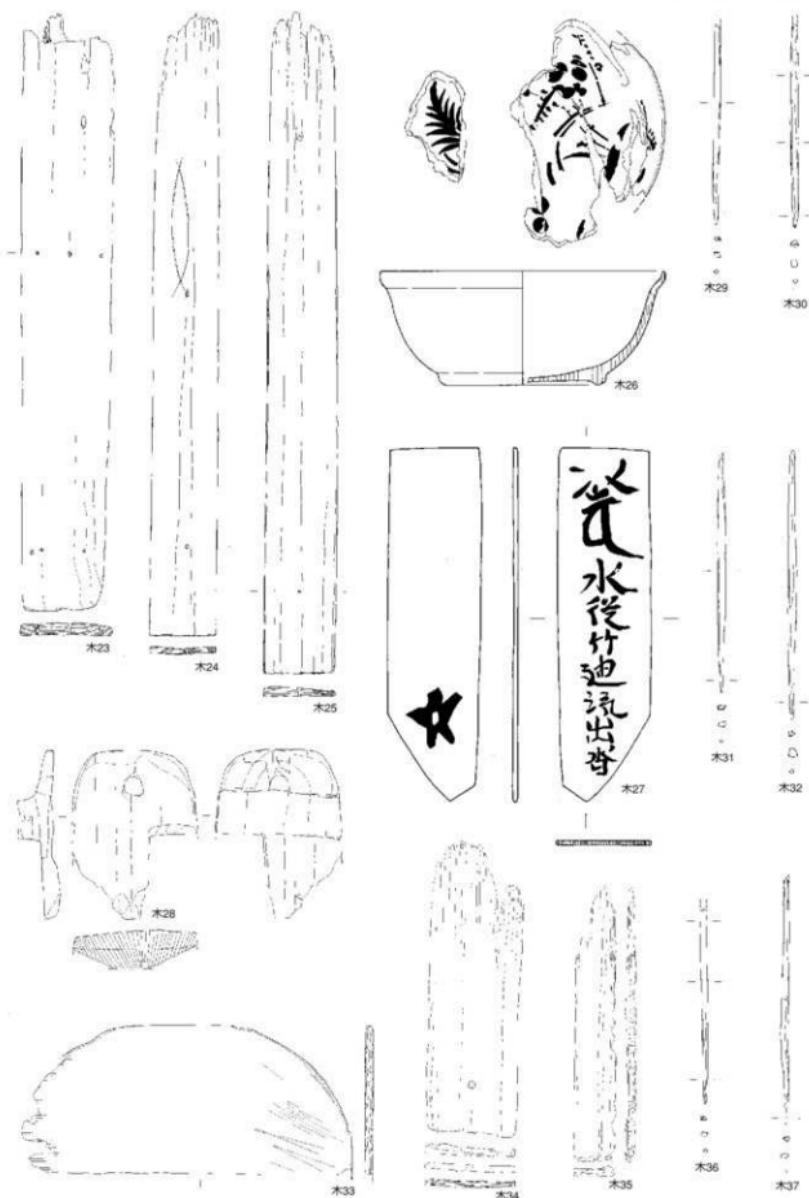
第33図 金属製品実測図 (S=1/2、拓本は原寸)



第34図 木製品実測図 (木5・11: S=1/4、木1~4、6~10: S=1/8)



第35図 木製品実測図 (木12・13 : S=1/4、木14 : S=1/2、木15~22 : S=1/8)



第36図 木製品実測図 (木26・27:S=1/2、木28~32・36・37:S=1/4、木23~25・34・35:S=1/8)

第1表 出土土器・陶磁器観察表1

出土地番号	年号	銘	出土施設	形態	断面	口径	底径	高さ	厚さ	色調	胎土	焼成	測定	直徑	高さ	備考	測定番号
1	明治 35年	SAXX	無地和	高足盤	11.9	8.6	3.4	内側底:灰	軽紺多い、複合土	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:11.9 底径:8.6 高さ:3.4	内側焼成目盛りあり	D11			
2	明治 35年	丁寧一茶	茶	高足盤	10.0	—	—	内側底:灰	軽紺多い、複合土	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:10.0 底径:— 高さ:—	底みぞなし	D12			
3	明治 34年	丁寧一茶	高足盤?	高足盤?	—	—	—	内側底:灰	軽紺の、複合土	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:— 底径:— 高さ:—	底一面熱で変色化あり、裏 蓋に墨書きあり	D13			
4	明治 34年	丁寧一茶	無地和	高足盤	11.1	8.7	3.2	内側底:灰	軽紺、複合土	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ、ヘキ留め	口徑:11.1 底径:8.7 高さ:3.2	—	D14			
5	明治 31年	内閣製鐵	茶	高足盤	14.1	—	—	内側底:灰	軽紺、複合土	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ、ヘキ留め	口徑:14.1 底径:— 高さ:—	—	D15			
6	明治 34年	内閣製鐵	茶	高足盤	12.7	8.6	4.1	内側底:灰	軽紺、複合土	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ、ヘキ留め	口徑:12.7 底径:8.6 高さ:4.1	底みぞなし	D16			
7	明治 34年	内閣製鐵	茶	高足盤	7.8	—	—	内側底:灰	軽紺、複合土	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:7.8 底径:— 高さ:—	—	D17			
8	明治 21年	内閣製鐵博物館	高足盤?	高足盤?	—	—	—	内側底:灰	軽紺が多い、複合土	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:— 底径:— 高さ:—	—	D18			
9	明治 23年	内閣製鐵博物館	茶	高足盤	12.9	9.2	2.1	内側底:灰	軽紺	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ、ヘキ留め	口徑:12.9 底径:9.2 高さ:2.1	—	D19			
10	明治 20年	兵庫県立 考古博物館 第一回 大正1年	茶	高足盤	14.0	—	—	内側底:灰	軽紺、複合土	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:14.0 底径:— 高さ:—	底丸み	D20			
11	明治 34年	PDS	茶	高足盤	13.5	—	—	内側底:灰	軽紺、複合土	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ、ロコナガ	口徑:13.5 底径:— 高さ:—	底くぼみあれかでない	D21			
12	明治 44年	MIS PDS	無地和	高足盤	12.0	(18.7)	—	内側底:灰	軽紺が多い	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:12.0 底径:18.7 高さ:—	複縫	D22			
13	明治 34年	SAXX	無地和	高足盤	11.6	8.4	3.8	内側底:灰	軽紺の少く、薄織物質	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:11.6 底径:8.4 高さ:3.8	—	D23			
14	明治 34年	内閣製鐵	茶	高足盤	14.2	—	—	内側底:灰	軽紺の少く、薄織物質	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:14.2 底径:— 高さ:—	—	D24			
15	明治 37年	SAXX	無地和	高足盤	10.6	8.2	3.8	内側底:灰	軽紺	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:10.6 底径:8.2 高さ:3.8	—	D25			
16	明治 34年	TEA	高脚盤	高脚盤	17.6	—	—	内側底:灰	薄紺の少く、薄織物質	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:17.6 底径:— 高さ:—	—	D26			
17	明治 34年	TEA	無地和	高脚盤	12.9	8.4	3.4	内側底:灰	薄紺が多い	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:12.9 底径:8.4 高さ:3.4	—	D27			
18	明治 34年	TEA SAXX	無地和	高脚盤	8.6	—	—	内側底:灰	薄紺の少く、薄織物質	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:8.6 底径:— 高さ:—	底丸み	D28			
19	明治 34年	TEA	高脚盤	高脚盤	11.0	—	—	内側底:灰	薄紺の少く、薄織物質	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:11.0 底径:— 高さ:—	—	D29			
20	明治 34年	TEA	高脚盤	高脚盤	10.0	—	—	内側底:灰	薄紺の少く、薄織物質	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:10.0 底径:— 高さ:—	—	D30			
21	明治 34年	TEA SAXX	無地和	高脚盤	12.2	7.8	3.7	内側底:灰	薄紺の少く、薄紺少	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:12.2 底径:7.8 高さ:3.7	—	D31			
22	明治 32年	丁寧一茶	無地和	高脚盤	8.7	6.2	1.8	内側底:灰	薄紺の少く、薄紺少	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:8.7 底径:6.2 高さ:1.8	—	D32			
23	明治 34年	丁寧一茶	無地和	高脚盤	12.2	8.6	3.8	内側底:灰	薄紺の少く	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:12.2 底径:8.6 高さ:3.8	底丸み	D33			
24	明治 34年	丁寧一茶	無地和	高脚盤	12.2	8.2	3.1	内側底:灰	薄紺の少く	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:12.2 底径:8.2 高さ:3.1	—	D34			
25	明治 34年	丁寧一茶	茶	高脚盤	10.7	(11.7)	2.9	内側底:灰	薄紺の少く、薄紺少	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:10.7 底径:11.7 高さ:2.9	—	D35			
26	明治 34年	丁寧一茶	茶	高脚盤	10.0	—	—	内側底:灰	薄紺の少く、薄紺少	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:10.0 底径:— 高さ:—	—	D36			
27	明治 34年	丁寧一茶	茶	高脚盤	10.9	—	—	内側底:灰	薄紺の少く、薄紺少	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:10.9 底径:— 高さ:—	—	D37			
28	明治 34年	丁寧一茶	茶	高脚盤	11.2	5.8	3.4	内側底:灰	薄紺の少く、薄紺少	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:11.2 底径:5.8 高さ:3.4	—	D38			
29	明治 34年	丁寧一茶	無地和	高脚盤	12.6	8.1	4.2	内側底:灰	薄紺、複合土	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:12.6 底径:8.1 高さ:4.2	—	D39			
30	明治 34年	内閣製鐵博物館	高足盤?	高足盤?	—	—	—	内側底:灰	薄紺、複合土	灰	内側:ナガ 外側:ナガ	口徑:— 底径:— 高さ:—	外側器へ方接続あり	D40			
31	明治 34年	内閣製鐵博物館	茶	高足盤	8.4	6.2	3.0	内側底:灰	薄紺、薄	灰	内側:ナガ 外側:ナガ	口徑:8.4 底径:6.2 高さ:3.0	薄紺多い	D41			
32	明治 34年	丁寧一茶	無地和	高脚盤	13.1	11.3	2.2	内側底:灰	薄紺、薄	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:13.1 底径:11.3 高さ:2.2	—	D42			
33	明治 34年	内閣製鐵博物館	茶	高脚盤	12.9	7.6	4.3	内側底:灰	薄紺の少く	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:12.9 底径:7.6 高さ:4.3	—	D43			
34	明治 34年 大正10年 昭和11年	内閣製鐵博物館 第一回 大正10年	茶	高脚盤	14.2	(17.0)	3.6	内側底:灰	薄紺の少く	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ、ナガ	口徑:14.2 底径:17.0 高さ:3.6	—	D44			
35	明治 34年	兵庫	土器	高足盤	10.0	—	—	内側底:灰	薄紺の少く	灰	内側:ナガ 外側:ナガ	口徑:10.0 底径:— 高さ:—	—	D45			
36	明治 34年	PDS	茶	高脚盤	10.8	8.6	3.8	内側底:灰	薄紺の少く	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:10.8 底径:8.6 高さ:3.8	—	D46			
37	明治 34年	SAXX	無地和	高脚盤	9.6	7.2	3.8	内側底:灰	薄紺の少く	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:9.6 底径:7.2 高さ:3.8	—	D47			
38	明治 34年	SAXX	茶	高脚盤	12.2	(21.9)	3.3	内側底:灰	薄紺の少く	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ、ナガ	口徑:12.2 底径:21.9 高さ:3.3	—	D48			
39	明治 34年	内閣製鐵博物館	高足盤?	高足盤?	—	—	—	内側底:灰	薄紺の少く、薄紺少	灰	内側:ナガ 外側:ナガ	口徑:— 底径:— 高さ:—	—	D49			
40	明治 34年	内閣製鐵博物館 第一回 大正10年	無地和	高脚盤	12.9	7.2	3.8	内側底:灰	薄紺の少く、薄紺少	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:12.9 底径:7.2 高さ:3.8	—	D50			
41	明治 34年	内閣製鐵博物館 第一回 大正10年	無地和	高脚盤	13.9	6.7	4.9	内側底:灰	薄紺の少く、薄紺少	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:13.9 底径:6.7 高さ:4.9	—	D51			
42	明治 34年	内閣製鐵	土器	高脚盤	10.0	5.8	4.5	内側底:灰	薄紺の少く、薄紺少	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:10.0 底径:5.8 高さ:4.5	—	D52			
43	明治 34年	内閣製鐵	茶	高脚盤	11.0	—	—	内側底:灰	薄紺の少く、薄紺少	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:11.0 底径:— 高さ:—	—	D53			
44	明治 34年	内閣製鐵	茶	高脚盤	12.6	—	—	内側底:灰	薄紺の少く、薄紺少	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:12.6 底径:— 高さ:—	—	D54			
45	明治 34年	内閣製鐵	茶	高脚盤	10.8	—	—	内側底:灰	薄紺の少く、薄紺少	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:10.8 底径:— 高さ:—	—	D55			
46	明治 34年	内閣製鐵	茶	高脚盤	10.4	—	—	内側底:灰	薄紺の少く、薄紺少	灰	内側:ロココナガ 外側:ロココナガ	口徑:10.4 底径:— 高さ:—	—	D56			
47	明治 34年	SAXX	茶	高脚盤	20.8	32	9.0	内側底:灰	薄紺の少く、薄紺少	灰	内側:ナガ 外側:ナガ	口徑:20.8 底径:32 高さ:9.0	—	C-1			

第3表 出土土器・陶磁器観察表3

出土地番号	地名	器	出土施設	形態	断面	口径 （mm）	底径 （mm）	高さ （mm）	色調	胎土	焼成	測定	直徑	高さ	実測番号	
92	市	SH18	SH18.1	鉢	高脚盆	140	116	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：ロコリナガ 外側：ロコリナガ	直徑：12.12 底径：10.12			D143	
93	市	S-672	S-672.4	鉢	土鍋盆	208	—	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：土灰 外側：土灰	直徑：13.12 底径：11.12			D128	
94	市	S-234	青銅鏡裏	片口鉢	高脚盆	186	—	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：ロコリナガ 外側：ロコリナガ	直徑：11.08 底径：10.08			D178	
95	市	S-648	青銅鏡裏	鉢	土鍋盆	178	97	1.8	内側底付灰	1.8cm厚	灰褐色	内側：ロコリナガ 外側：ロコリナガ	直徑：11.12 底径：10.12			D178
96	市	S-247	出土土器	高脚盆	高脚盆	256	—	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：ロコリナガ 外側：ロコリナガ	直徑：12.12 底径：11.12			D178	
97	市	S-247	出土土器	高脚盆	高脚盆	—	—	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：ロコリナガ 外側：ロコリナガ	直徑：12.12 底径：11.12			D178	
98	市	S-645	出土土器	高脚盆	高脚盆	128	83	4.1	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：ロコリナガ 外側：ロコリナガ	直徑：12.12 底径：11.12			D178
99	市	S-645	出土土器	高脚盆	高脚盆	118	68	4.0	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：ロコリナガ 外側：ロコリナガ	直徑：12.12 底径：11.12			D178
100	市	S-754	出土土器	鉢	高脚盆	138	—	11.12	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：ロコリナガ 外側：ロコリナガ	直徑：12.12 底径：11.12			D178
101	市	S-688	P100	土台付	高脚盆	1039	84	14.08	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：ロコリナガ 外側：ロコリナガ	直徑：12.12 底径：11.12			D138
102	市	S-687	青銅鏡裏	片口鉢	高脚盆	128	84	4.0	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：ロコリナガ 外側：ロコリナガ	直徑：12.12 底径：11.12			D178
103	市	S-687	青銅鏡裏	片口鉢	高脚盆	—	—	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：ロコリナガ 外側：ロコリナガ	直徑：12.12 底径：11.12			D178	
104	市	S-687	青銅鏡裏	片口鉢	高脚盆	322	—	10.08	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：ロコリナガ 外側：ロコリナガ	直徑：12.12 底径：11.12			D178
105	市	C-687	S-687	鉢	高脚盆	116	—	12.08	内側：二重漆塗 内側底付灰	灰褐色	灰	内側：ロコリナガ 外側：ロコリナガ	直徑：12.12 底径：11.12			D102
106	市	C-730	P109	鉢	土鍋盆	82	74	3.8	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：ロコリナガ 外側：ロコリナガ	直徑：12.12 底径：11.12			D138
107	市	C-688	P110	片口鉢	高脚盆	183	—	10.08	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：ロコリナガ 外側：ロコリナガ	直徑：12.12 底径：11.12			D178
108	市	C-688	P110	鉢	土鍋盆	10881	—	9.08	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
109	市	C-520	P110	鉢	土鍋盆	128	78	3.1	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
110	市	C-689	P110	鉢	土鍋盆	180	37	2.0	内側：二重漆塗 内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
111	市	C-234	P110	鉢	土鍋盆	64	58	1.8	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
112	市	C-235	P110	鉢	土鍋盆	1049	—	9.08	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
113	市	C-520	P110	鉢	土鍋盆	148	100	3.0	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
114	市	C-520	P110	鉢	土鍋盆	198	—	9.08	内側：二重漆塗 内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
115	市	C-234	P110	鉢	土鍋盆	132	68	3.0	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
116	市	C-234	P110	鉢	土鍋盆	132	—	9.08	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
117	市	C-235	P110	鉢	土鍋盆	112	—	9.08	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
118	市	C-235	P110	鉢	土鍋盆	98	—	9.08	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
119	市	C-235	P110	鉢	土鍋盆	86	70	3.1	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
120	市	C-235	P110	鉢	土鍋盆	86	—	9.08	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
121	市	C-688	P125	鉢	土鍋盆	186	—	9.08	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
122	市	C-688	P125	鉢	土鍋盆	117	81	3.8	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
123	市	C-688	P125	鉢	土鍋盆	115	81	2.7	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
124	市	C-689	P125	鉢	土鍋盆	83	62	3.2	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
125	市	C-689	P125	鉢	土鍋盆	73	—	3.1	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
126	市	C-689	P125	鉢	土鍋盆	83	66	1.45	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
127	市	C-689	P125	鉢	土鍋盆	164	—	9.08	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
128	市	C-689	S-689	鉢	土鍋盆	228	—	9.08	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
129	市	C-689	S-689	鉢	土鍋盆	163	132	4.7	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
130	市	C-689	S-689	鉢	土鍋盆	183	—	7.71	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
131	市	C-689	S-689	鉢	土鍋盆	111	80	3.8	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
132	市	C-689	S-689	鉢	土鍋盆	103	—	9.08	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
133	市	C-689	S-689	鉢	土鍋盆	111	—	9.08	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
134	市	C-689	S-689	鉢	土鍋盆	111	80	3.8	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
135	市	C-689	S-689	鉢	土鍋盆	111	78	1.7	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
136	市	C-689	S-689	鉢	土鍋盆	111	80	3.8	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
137	市	C-689	S-689	鉢	土鍋盆	111	80	3.8	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
138	市	C-689	S-689	鉢	土鍋盆	111	80	3.8	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
139	市	C-689	S-689	鉢	土鍋盆	111	80	3.8	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
140	市	C-689	S-689	鉢	土鍋盆	111	80	3.8	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
141	市	C-689	S-689	鉢	土鍋盆	111	80	3.8	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132
142	市	C-689	S-689	鉢	土鍋盆	111	80	3.8	内側底付灰	灰褐色・土色	灰	内側：アゲナメナ 外側：アゲナメナ	直徑：12.12 底径：11.12			D132

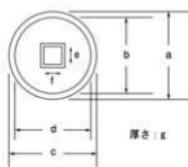
第6表 出土石器・石製品観察表

国版番号	年度	区	出土地点	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	材質	備考	実測番号
石1	05	3-5区	上層ベース	砾石	9.9	7.0	5.1	492.5	輝石安山岩		石-10
石2	06	6-4区	P534	二次加工 のある調片	4.0	3.5	1.1	12.5	流紋岩	石器未製品?	石-1
石3	06	6-4区	SD113	石礫	2.6	1.7	0.3	0.8	無機晶質安山岩	樹文	石-2
石4	05	B1区	表土中	砾石	10.4	10.2	4.9	681.5	輝石安山岩		石-9
石5	05	B-4区	P482	石臼	復元径28.0	最小厚7.7	最大厚 9.6	2583.0	輝石安山岩	復元最大厚12.4	石-3
石6	05	B-4・5区	SX568	砾石	5.0	2.6	1.1	17.4	珪化凍結岩		石-4
石7	05	C-4区	表土除去	砾石	11.7	9.4	8.0	500.4	珪化凍結岩		石-11
石8	05	C-5区	SD28	砾石	8.2	6.4	5.0	261.5	無機晶質安山岩		石-5
石9	05	C-5区	SD28	砾石	7.6	4.5	4.4	190.7	流紋岩		石-6
石10	05	C-5区	P153	石臼	復元径28.6	最小厚6.3	最大厚8.6	1045.3	多孔質安山岩		石-7
石11	05	C-6区	SE1号戸内	硯	7.4	6.1	1.6	102.6	頁岩		石-8

第7表 出土金属製品観察表

国版番号	年度	区	出土地点	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	実測番号
金1	05	3-4区	西側傾溝(包含 層12)	楕形鍛冶滓	9.7	8.0	6.5	278.3	鉄-4
金2	05	3-5区	上層ベース(塗 1上層)	楕形鍛冶滓	7.9	8.7	4.0	230.8	鉄-5
金3	05	3-7区	東壁(塗1上 層)	小柄	17.0	2.4	1.5	22.3	鉄-1
金4	05	3-8区	東側包含層	釘	3.3	0.7	0.5	1.5	鉄-3
金5	05	B-3区	SX74	斧	8.0	1.23	0.15	7.4	鉄-2

銅鉄計測位置



第8表 出土綱目彙表

固有番号	年度	区	出土地点	取土上层NO	器種	剖面a cm)	剖面b cm)	剖面c cm)	剖面d cm)	剖面e cm)	剖面f cm)	剖面g cm)	剖面h cm)	剖面i cm)	剖面j cm)	剖面k cm)	剖面l cm)	剖面m cm)	剖面n cm)	備考	完期番号
真1	05	3-6K	乞含層上層	真1	黑乎底質	2.35	2.05	2.25	2.10	0.70	0.70	0.11	1.70	1068	真晉	陶灰1					
真2	05	B-318	SK62	真9	黑乎底質	2.35	1.95	2.35	1.90	0.75	0.75	0.14	1.30	1068	黑晉	陶灰6					
真3	05	B-318	SK62	真10	水浸底質	2.40	1.95	2.45	2.10	0.60	0.60	0.14	2.30	1068		陶灰7					
真4	05	C-218	通模輪作窓	真7	元燒底質	2.35	1.85	2.30	1.90	0.80	0.70	0.14	4.40	1078	行晉	陶灰2A					
真5	05	C-218	P199	真7	黑乎底質	2.25	1.90	2.35	1.95	0.70	0.75	0.16	1.56	1068	黑晉	陶灰2B					
真6	05	C-218	西晉灰土中	真4	拌和底質	2.45	1.85	2.45	1.85	0.65	0.70	0.11	1.60	1069		陶灰3					
真7	05	C-318	P174	真5	黑乎底質	2.30	1.80	2.30	1.75	0.70	0.65	0.11	1.70	1068	黑晉	陶灰4					
真8	05	C-318	P178	真6	元燒底質	2.45	2.15	2.40	2.05	0.80	0.75	0.14	2.80	1078	行晉	陶灰5					
真9	05	C-318	西晉陶	真3	生米底質	2.30	1.85	2.30	1.90	0.75	0.70	-	-	1101	行晉	陶灰8A					
真10	05	C-318	西晉陶	真3	開元底質	2.35	1.90	2.35	1.90	0.70	0.70	0.13	3.15	621	晉下月	陶灰B-1					
真11	05	C-318	西晉陶	真3	人頭底質	2.30	2.10	2.40	2.20	0.65	0.70	0.16	4.06	1107		陶灰B-2					
真12	05	C-318	西晉陶	真3	黑乎底質	2.30	2.05	2.30	1.90	0.70	0.70	0.16	3.40	1068	黑晉	陶灰B-3					
真13	05	C-318	西晉陶	真3	元燒底質	2.30	2.00	2.35	2.05	0.70	0.80	0.14	3.22	1068	黑晉	陶灰B-4					
真14	05	C-318	西晉陶	真3	宜施底質	2.40	2.05	2.40	2.00	0.65	0.70	0.14	3.31	1119	分相	陶灰B-5					
真15	05	C-318	西晉陶	真3	皇宋底質	2.40	2.00	2.35	2.05	0.80	0.80	0.12	3.17	1038	黑晉	陶灰B-6					
真16	05	C-318	西晉陶	真3	元燒底質	2.35	2.00	2.40	1.90	0.80	0.80	0.13	2.68	1066	黑晉	陶灰B-7					
真17	05	C-318	西晉陶	真3	出武底質	2.40	2.00	2.40	2.00	0.70	0.70	0.17	3.42	1368		陶灰B-8					
真18	05	C-318	西晉陶	真3	治平底質	2.35	1.90	2.35	1.95	0.70	0.70	0.14	3.39	1064	真晉	陶灰B-9					
真19	05	C-318	西晉陶	真3	開元底質	2.40	2.10	2.40	2.10	0.70	0.70	-	-	621		陶灰8C					
真20	05	C-318	P198	錢2	元符底質	2.34	1.84	2.35	1.85	0.64	0.63	0.13	2.01	1098	黑晉	陶灰9					
真21	05	C-18	美土中 砾水88	錢3	開宋底質	2.42	2.02	2.41	1.97	0.70	0.66	0.11	1.40	1101	行晉	陶灰10					

第9表 出土木器・木製品観察表

国別番号	年度	区	出土場所	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	種類	参考	実測番号	
本1	06	B-2E	SD100/P	柱板	105	27.9	2.0	タリ		本-13	
本2	06	B-3E	P404	柱板	109	23.5	1.6	タリ		本-12	
本3	06	B-3E	P444	柱板	102	11.4	1.5	タリ		本-22	
本4	06	B-6E	P448	柱板	92.0	22.5	2.0	タリ	黄化	本-14	
本5	06	B-4E	SK101-1	曲物(丸筒)	14.3	14.4	0.7	ヒノキ材	両面に切り傷あり	本-23	
本6	06	B-4E	SK101-2	縦板	50.6	11.1	1.0	スギ		本-24	
本7	05	C-6E	P260	柱板	51.7	11.2	0.8	タリ		本-25	
本8	06	C-2E	P477	柱板	96.5	27.7	2.1	タリ	黄化	本-15	
本9	06	C-3E	P480	軋	76.5	8.7	6.0	マツ属複数管束葉材		本-26	
本10	06	C-1E	P510	柱板	-	-	-	タリ	未完形	本-61	
本11	05	C-2E	SK20	下駄	26.0	12.0	3.4	ケヤキ		本-38	
本12	05	C-1E	SK25	箸	13.9	0.7	0.4	スギ		本-35-1	
本13	05	C-1E	SK25	箸	17.0	0.6	0.6	-		本-35-2	
本14	05	C-1E	SE07 (SK26-1) SK25	漆器皿	口径2.8	底径4.8	高さ1.6	ブナ属	内外面漆	本-36	
本15	05	C-6E	SE3-3	舟口縦板	96.0	20.7	5.6	スギ		本-32	
本16	05	C-6E	SE3-5	舟口縦板	95.5	15.1	3.5	スギ		本-34	
本17	05	C-2E	SE6-2	舟口縦柱	118.9	12.8	11.0	スギ	孔4。本17~19は両面の上下が逆	本-31	
本18	06	C-1.2E	SE6-3	舟口縦柱	115.6	10.9	10.9	スギ	孔2	本-60	
本19	06	C-1.2E	SE6-10	舟口縦柱	114.4	10.2	8.9	スギ	孔3	本-16	
本20	06	C-1.2E	SE6-14	舟口縦柱	90.7	4.6	1.5	スギ	孔3	本-59	
本21	06	C-1.2E	SE6-17	舟口縦柱	81.6	5.1	2.3	スギ	孔4	本-20	
本22	06	C-1.2E	SE6-24	舟口縦柱	71.3	6.0	4.8	タリ		本-21	
本23	05	C-2E	SE6-1	舟口縦板	97.3	15.1	2.5	スギ	木くぎ穴上下2箇に1ヶ所	本-32	
本24	06	C-1.2E	SE6-7	舟口縦板	101.7	11.1	1.2	スギ	SE06-9と釘穴同じ	本-18	
本25	06	C-1.2E	SE6-8	舟口縦板	107.5	11.8	1.7	スギ	SE06-6と釘穴同じ	本-19	
本26	05	C-1.2E	SE6	漆器椀	111径11.6	底径6.2	高さ4.7	ブナ属	内外面漆、内面漆塗れ範囲あり	本-37	
本27	06	C-1.2E	SE6	椀(木製)	14.5	3.9	0.2	スギ?		本-17	
本28	05	C-6E	SE11	下駄	13.9	10.3	3.5	クマシテ属イヌシダ科		本-39	
本29	06	C-3E	SK112	箸	16.4	0.6	0.4	スギ		本-27-1	
本30	06	C-3E	SK112	箸	16.8	0.7	0.6	スギ		本-27-2	
本31	06	C-3E	SK112	箸	18.3	0.7	0.4	スギ		本-27-3	
本32	06	C-3E	SK112	箸	21.6	0.7	0.7	-		本-27-4	
本33	06	C-3E	SK112-6	曲物(丸筒)	27.1	12.2	0.65	スギ	楕円形?	本-28	
本34	06	C-3E	SK112-3	板(舟口縦板?)	40.4	12.5	1.2	スギ	孔3	本-29	
本35	06	C-3E	SK112-7	板(舟口縦板?)	43.9	4.7	1.05	スギ		本-30	
本36	06	C-3E	SK113	箸	16.1	0.5	0.6	-		門み10ヶ所あり	本-27-5
本37	06	C-3E	SK113	箸	20.3	0.6	0.4	-		本-27-6	

第4章 大槻ヤマゾ遺跡

第1節 調査の概要（第1図）

大槻ヤマゾ遺跡の発掘調査は、排水路敷設箇所（面積120m²）を対象とし、平成17年8月8日～10月5日に実施した。9月2日からは、大槻ブンゾ遺跡と並行して調査を行った。

調査区は、西側に位置する丘陵裾の形状に沿うように、屈曲しつつ南北に細長く伸びるため、グリッドを屈曲点で南北から4区に区分し、さらに5m毎に1-1～1-4区、2-1～2-2区、3-1～3-5区、4-1～4-7区に細分した。

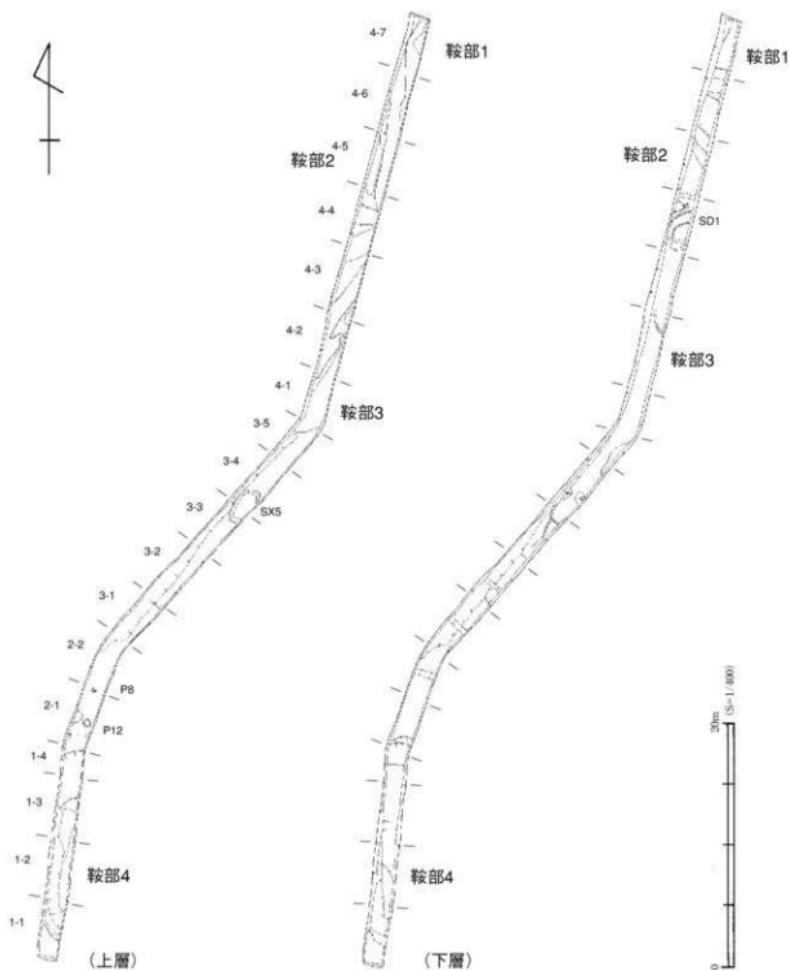
1区と3～4区で落ち込みを確認した。精査の結果、4-5～4-7区にかけて南北に伸びる砂質土層を検出し、それを境として東側の落ち込みを鞍部1、それ以前に堆積した砂質土層を含む西側部分を鞍部2とした。4-2・3区でも北東・南西方向の砂質土層の広がりを確認し、その南側の落ち込みを鞍部3とした。1区で検出した落ち込みは鞍部4とした。また2区の地山面（明褐色粘質土）でピット等を検出したが、多くは搅乱であり遺構は少なかった。1区と3区の西側も、搅乱によって壊されていった。また、3区と4区の境の調査区東壁に板状木製品が、4-2区の調査区西壁で古墳時代の高杯が複数まとまって出土していたため、調査区をやや拡張して遺物を取上げた。

鞍部1～3は黒褐色粘質土を上層、オリーブ黒色砂質土または黒褐色粘質土を中層、黒色粘質土を下層とし、鞍部4は検出面から約60cmまでを上層、上層から約20cmまでを中層、それ以下を下層とした。2区で検出した遺構と鞍部1を完掘し、鞍部2・3は上層まで、鞍部4は中層までを掘削したところで1回目の写真撮影を行い、手実測によって平面図（上層）を作成した。その後、鞍部2・3の中層以下と鞍部4の下層を掘削し、最終的な完掘状況の写真撮影と平面図（下層）作成を行った。断面図上ではおおよそ、鞍部1は東壁の3層までが上層、4・5層が中層、6層以下が下層に対応する。鞍部2は東壁の2層が上層、3・4層が中層、5層以下が下層、東西断面では1・2層が中層、5層以下が下層に対応する。鞍部3は東壁の8層までが上層、9～11層が中層、12層以下が下層に対応する。鞍部4は東壁の4層までが上層、5・6層が中層、7層が下層に対応する。

鞍部からは遺物が大量に出土しており、層ごとに取上げたが、地点により層の広がりや土質が若干異なるため確実に分けられているとは言えず、混在している可能性は否定できない。現場では主な遺物291点の位置と標高を測定し、後にドットで図化した。平面図・エレベーション図では、報告書記載した123点のみ図版番号を表示している。エレベーション図の実線は調査区中央、破線は調査区東壁での下層床面を表している。また平面図上で、遺物が集中して出土した範囲を破線で示した。

第2節 遺構（第2～5図）

調査区の約9割を鞍部が占める。検出面（標高13m前後）で、2区を中心にピット13基を確認したが、P4・9～11・13は搅乱であり、その他のピットも非常に浅く、測量時まで残らなかつたため図化できなかった。また性格不明の遺構（SX）を当初5基検出したが、SX1～4は搅乱であり、遺構と呼び得るものはSX5のみであった。下層では、4-4区（標高12.2m前後）で、一辺約30cm、深さ約10cmの隅丸方形のピット1基、南北約80cm・深さ13～20cmの土坑1基、溝1条（SD1）を検出した。鞍部1 4-4～4-7区で検出した。鞍部2の堆積後、北側に堆積したもので、東へ急激に落ち込む。全

第1図 遺構全体図 ($S=1/400$)

体に出土遺物は少なく、下層では古代の須恵器を中心に古墳時代の土師器が、中層で古墳時代の土師器が、上層では古墳時代の土師器と古代の須恵器に、弥生土器が少量混じって出土した。

鞍部2 4-3~4-6区で検出した。最も深い4-5区で標高11.9m前後を測る。鞍部1~3の中で最も古く、北側で鞍部1が、南側で鞍部3が上に堆積している。4-4区で砂質土の堆積がみられ、古墳時代の土師器が集中して出土した。全層で古墳時代の土師器を中心に弥生土器も多く出土し、下層で確認できなかった古代の須恵器は中層で若干混じり、上層で増加する傾向がみられた。

鞍部3 3-1~4-3区で検出した。鞍部2の堆積後、南側に堆積したもので、南から北に後退するようにならんが形成されている。4区と3区の境が最も深く（標高12m前後）、北は4-2区（標高12.46m前後）で立ち上がり、鞍部2が落ち込む。下層からは古墳時代の土師器を中心に、弥生土器・古代の須恵器が若干混じり、4-1区で木製品がまとまって出土した。中層では古代の須恵器が中心となるが、依然古墳時代の土師器が多く、弥生土器の出土量も増加する。上層では古代の須恵器が急増し、4-2区や3区でまとまって出土した。古墳時代の土師器が減少する一方で、3-3区で古い層が露出するため弥生土器が増加し、古墳時代の土師器より多く出土した。鞍部2と接する4-3区の砂質土中と、最も深く落ち込んだ4-1区で木製品が集中して出土した。

鞍部4 1区で検出した。中央が最も深く（標高11.9m前後）、南北に緩やかに立ち上がる。他の鞍部に比べて遺物量は少ない。下層からは幹を中心とする自然木が多く出土し、遺物はほとんど確認できなかった。中層からは古墳時代の土師器と弥生土器が多く、古代の須恵器が若干出土した。上層では古墳時代の土師器が圧倒的に多く、古代の須恵器・弥生土器が少量出土し、北側の立ち上がりで土師器がやや集中して、その南側からは幅5cm程の板状木製品が集中して出土した。上・中層からは、枝を中心とする大量の自然木が出土している。

P8 2-1区で検出した。一辺約35cmの三角形に近い隅丸方形で、深さ約5cmを測る。

P12 2-1区で検出した。長軸約65cm、短軸約55cm、深さ約5cmの楕円形を呈する。須恵器の蓋や土師器壺の体部が出土している。

SX5 3-3・4区の鞍部3内上層（標高12.9m前後）で検出した。長辺約2.8m、短辺約2m、深さ約17cmの隅丸長方形を呈する。鞍部3上層覆土の流入によって埋没したと考えられ、様々な時期の土器片が出土した。

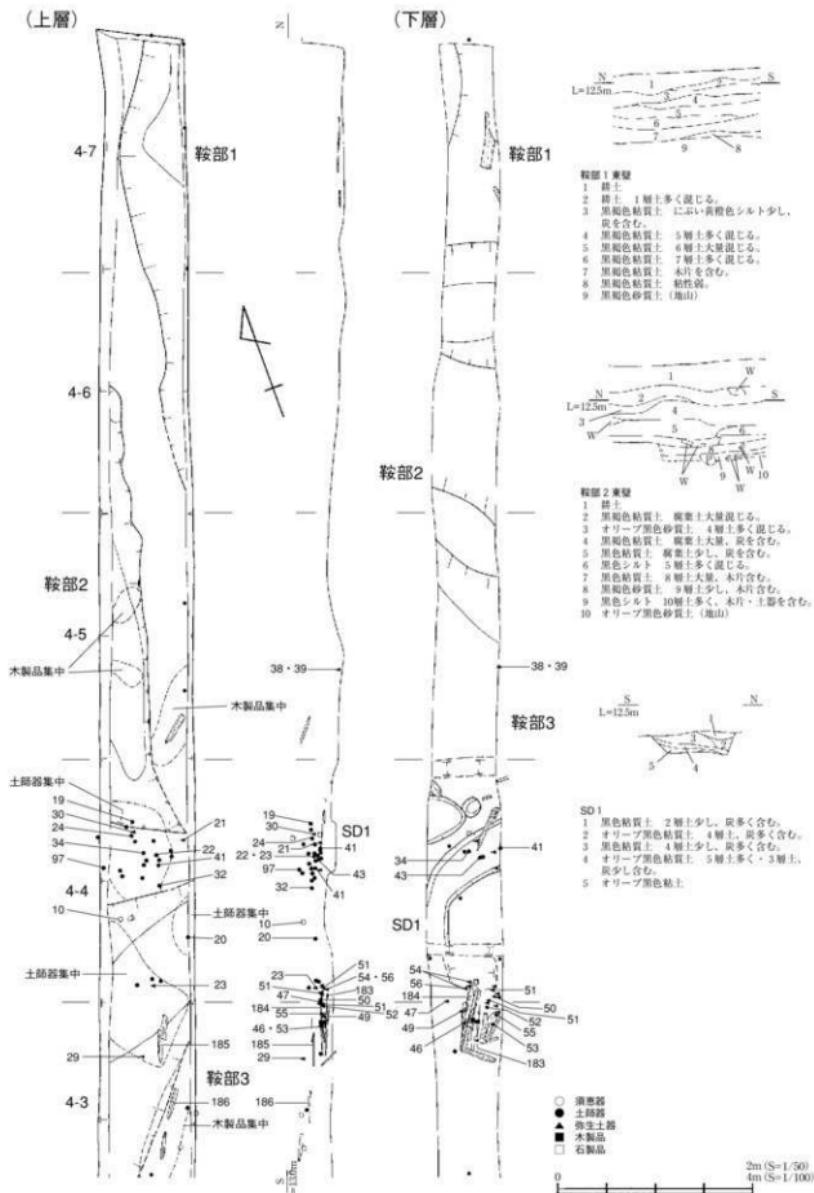
SD1 4-4区下層床面で検出した。南北から東西方向に折れ、幅約80cm、深さ15~20cmを測る。弥生土器の壺とみられる胴部片が出土している。

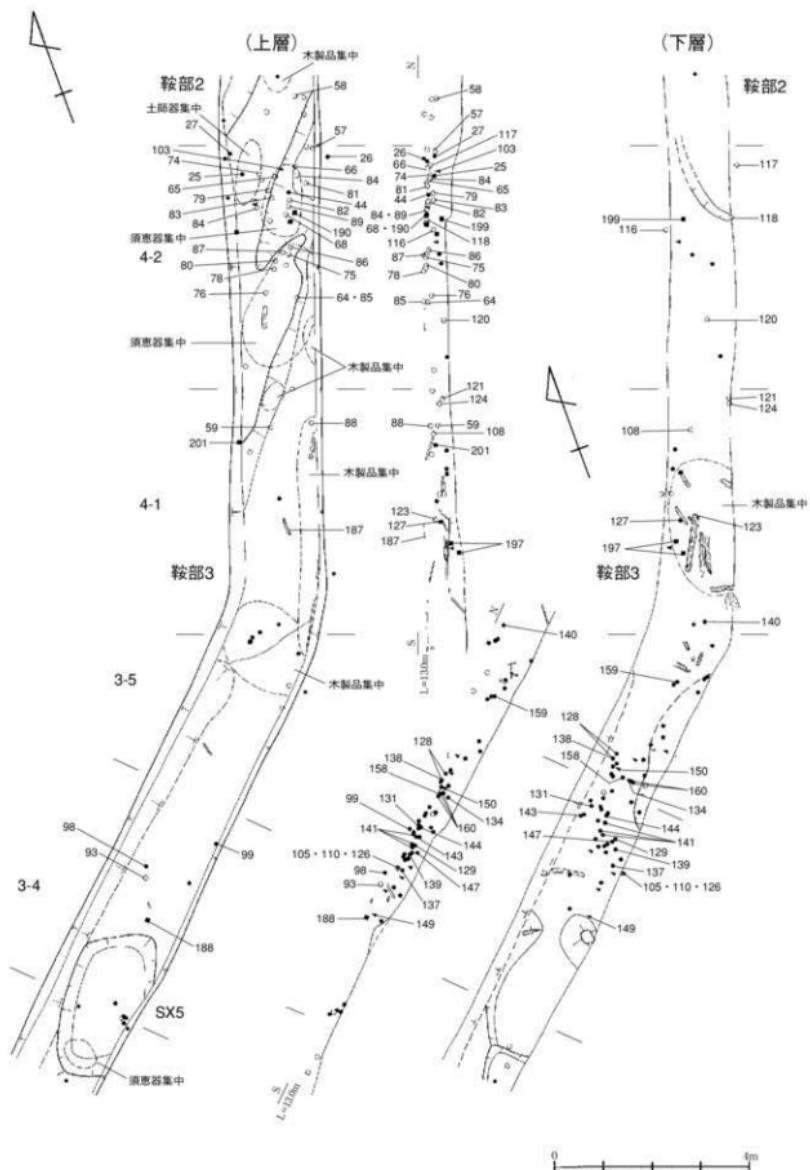
第3節 遺 物（第6~20図、第1~6表）

器種が特定できるものだけで、土器・土製品約600点、木製品約220点、石製品約20点と、大量の遺物が出土している。そのうち、土器・土製品182点、木製品19点、石製品9点を実測・記載した。詳細は観察表に記載した。法量の（ ）は残存高または推定値を表す。調整は口縁部から底部・天井部の順に記入している。複数の層・鞍部にまたがるものは、下位の層・鞍部を優先させた。

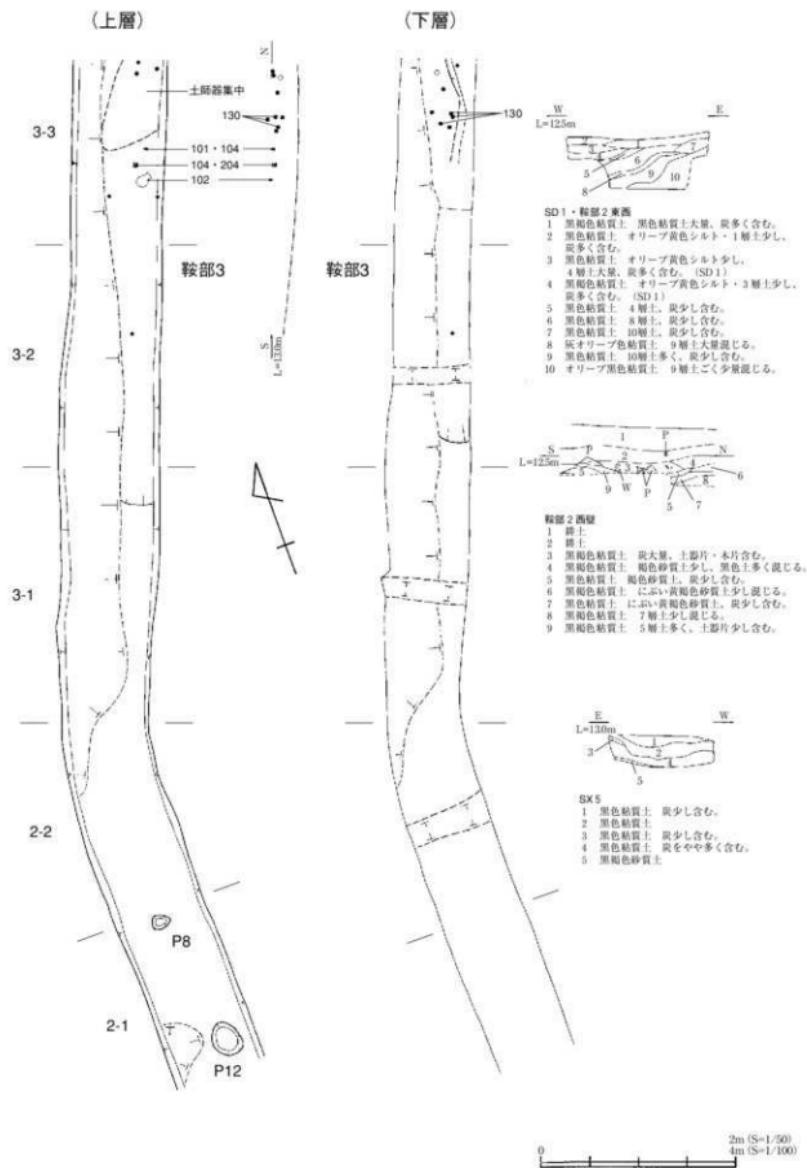
土器・土製品（第6~17図1~182）

鞍部1（第6図1~9） 1・2は上層出土土器である。2は鳥形須恵器の脚部で、爪を削り出して形成し、その前後に透かしを施す。前側（実測図右）の透かしは爪に接し、後側（実測図左）に比べてやや低い位置に施され、器壁も薄い。後端の爪の削り出しは不十分で稜が僅かにしか認められず、

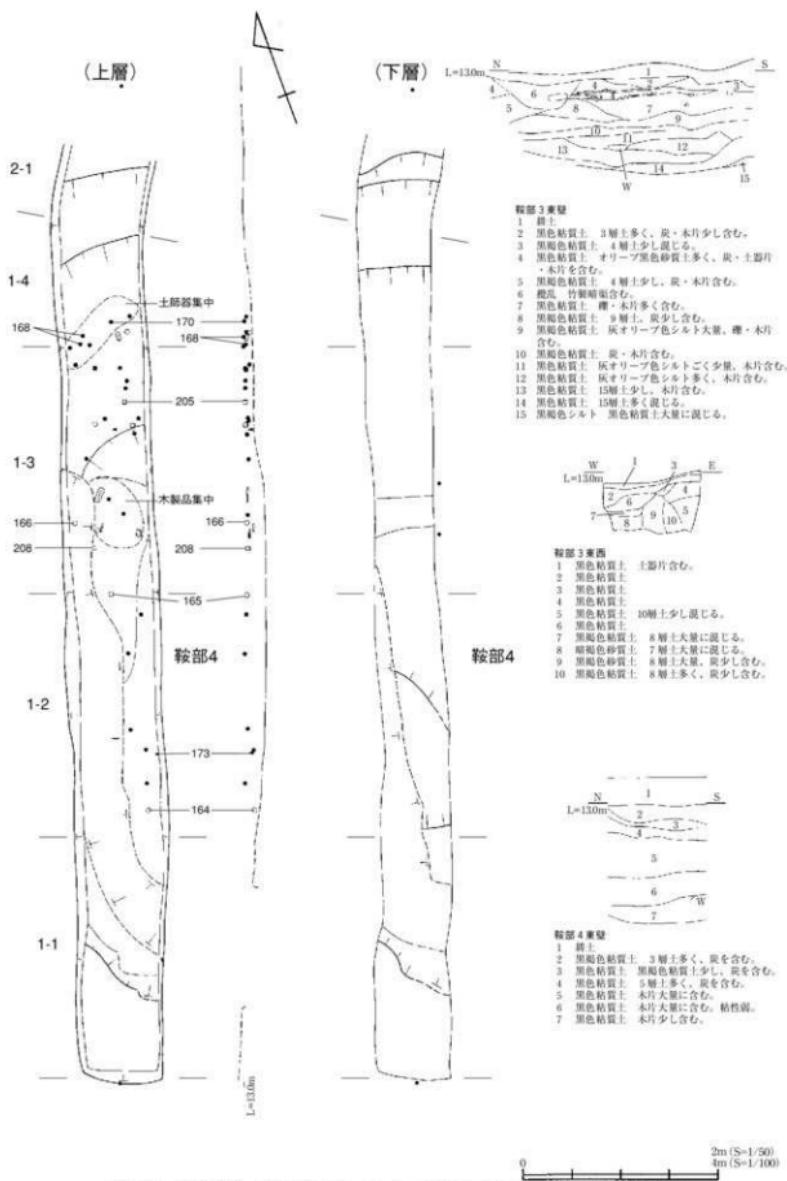




第3図 3・4区遺構図、鞍部3遺物エレベーション図 (S=1/100)



第4図 2・3区遺構図、鞍部3遺物エレベーション図 (S=1/100)、土層断面図 (S=1/50)

第5図 1区遺構図、鞍部4遺物エレベーション図 ($S=1/100$)、土層断面図 ($S=1/100$)

削りがそのまま残る。七尾市池崎窯跡から出土した波状文で羽毛を表現したものと比べると、粗雑な作りをしている⁽¹¹⁾。径は推定で13.5cm前後と考えられる。3・4は中層出土土器である。4は長胴・丸底の有段口縁壺で、口縁部形態は不明なものの山陰系と考えられる。5～9は下層出土土器である。9は口縁端部を強くナデ押えて下方へ突出させた長胴壺で、肩部内面に2箇所、粘土が盛るほど深く強く指で押し上げた痕が残る。爪痕もあり、乾燥前に持上げる際に指がかかるように強く掘んだためと考えられる。

鞍部2（第7～10図10～56） 10～30は上層出土土器である。10は使用により内面が平滑になっている。15は口縁部外面に沈線を施し、内面を黒色処理と丁寧なミガキ調整で仕上げている。16～18は手づくね土器で、17は外面のみ、18は内外面ともに丁寧なナデ調整を施す。22の小型の丸底壺は、口縁部上半が内湾しやや有段状の外観を呈する。25は付加した口縁部の下端を突出させ、26・27は杯底部の棱が甘く、椀状を呈する。25・26・32（中層）、39・41（下層）は胎土の鉄分量を増やし、27は器面に鉄分を塗布して焼成し、赤く発色させる。31～37は中層出土土器である。31は内面を転用硯とし、墨痕がみられる。33は底部外面の器面を打ち欠く。35は摩滅のためほとんど確認できないが、口縁部外面の上端と下端に浅い沈線を施す。38～56は下層出土土器である。39はやや平底気味の底部をもつ。胴部下半の器面が3/4周にわたって焼成後に剥離しており、残る部分も強いナデ調整で丸みが押さえられている。劣化による剥離ではなく意図的に施した可能性も考えられる。また底部に1辺約2cmの三角形の孔がみられ、焼成後穿孔を施したとも考えられる。48は口縁部外面に擬凹線が施され、壺に多い器形であるが、内面のナデ調整が丁寧で頭部外面にミガキ調整を施すことから、壺の可能性も考えられる。49は有段口縁をもつ細頸壺で、段部が長い。51は底部中央に径約5mmの円孔を焼成後外面から施す。53・55は底部の穿孔が中心からはずれて端に施され、54は内面上半をハケ調整のち、縱方向に指ナデ調整を約1cm間隔で施す。

鞍部3（第10～15図57～163） 57～104は上層出土土器である。58は底部外面にヘラ記号を施すが、浅く短い線を4本繋げて1本の長い直線としている。61は外面に墨書を施し、さらにその上に漆で文字を書いている。72・88～90は口縁端部を細かく打ち欠く。79・81・82・84は高台内を転用硯とし墨痕がみられ、79は杯内面に漆が付着する。86のつまみは中心より少しずれて貼り付けられ、内面を転用硯としている。88は内面に煤が付着し、その裏側の外面にも帶状の油煙とみられる煤が付着していることから、灯明皿に転用されたと考えられる。93は大壺の口縁部で、2条の突帯と波状文が交互に施される。94は突帯付きの双耳瓶で、突帯の上部に爪形の刺突文が全周している。96は棒状尖底の製塙土器で、外面の被熱著しい。97は杯部内外面に煤が付着し、131（中層）と同様に鉄分の多い胎土を使用して赤く発色させる。99は杯部内面に黒漆が付着し、漆を練ったヘラ痕が残る。100は内面に黒色処理を施し、内外面にミガキ調整を施す。101は口縁部外面に沈線1条を、102は肩部外面にヘラ先による刺突文を8個施している。102は全面にハケ調整を施すが、口縁部外面は縱方向の指ナデ調整で部分的に消される。103は有段口縁に扁球形の胴部をもつ。中層で台部も出土しており、調整は粗雑であるが、台付壺の可能性がある。104の有段口縁壺は、口縁部外面に浅い2条の擬凹線を施す。

105～150は中層出土土器である。108は使用による内面の磨耗が著しい。115は底部を糸切りによつて切り離す。119は杯内面に、重ね積み焼成による粘土痕が輪状に付着している。125は内面に黒色処理を、126は内外面に赤彩を施す。127の長胴壺は、口縁端部を上方へやや拡張させる。頭部を中心にして全体に煤が付着している。131・133の小型壺は、本来丸底の底部を押しつぶして平底にしたため、131はヒビやハケ調整が、133は輪積み痕が残る。137・141、159（下層）と同様に焼成前に鉄分を塗施す。

布し、赤く発色させる。135は外面の底部・胴部最大径・頸部の3箇所に、帯状に煤が付着している。136は実測図では壺として復元したが、器高7.5cm前後の鉢の可能性がある。137は突帶を貼り付けることで、口縁部を下方へ突出させる。138・139は杯底部に口縁部を載せるように付加するため、杯底部の厚みの分だけ直立して立ち上がる。139は杯底部側にハケ調整を施して口縁部を接合している。141は底部径が大きく明瞭な稜をもつ杯部に、「ハ」の字に開く脚部をもつ。畿内系と東海系の折衷形とみられるが、大きく崩れている。143・144は、円盤状の粘土から口縁部を反時計回りに挽き出して成形し、内面に指痕が強く残る。147・148は非常に丁寧な成形・調整が施され、きれいな扁球形を呈する。149は肩部外面にヘラ先による刺突文を全周させる。150は太く長い柱状脚から裾部が屈曲して開く。杯部との接合部に粘土紐を巻き状に充填したものも確認している。

151～163は下層出土である。152・153は肩部に明瞭な稜をもち、天井部が高く丸い。羽昨窯跡群の柳田ウワノ1号窯に特徴的な杯蓋である^(注2)。154～156は、143・144と同様に成形する。157の底部は、指でケズリ状に強くナデ押さえて平底にしている。159の有段口縁壺は、山陰系の器形に在地的な内面ハケ調整を施す。160は、杯底部の突出部を脚部に差込み、脚部内面で1方向のみにナデ押える。杯底部の外側調整は粗雑である。24・44・97・140・141など例は多い。161～163は高杯を模した手づくね土器で、脚部を時計回りに指で抉るように外側へ挽き出し、162・163は端部を内側へ折り返して潰す。163は杯部も挽き出して成形している。

鞍部4（第16図164～177） 164～174は上層出土土器である。165は立ち上がりに明瞭な稜をもち、底部外側に沈線を全周する。166は内面を転用硯とし、墨痕が残る。167は外側調整が非常に丁寧でミガキ調整に近い。171は有段口縁の長頸壺で、全体に調整が強く施される。172は口縁部の段部が深く、外側の稜も甘く受口状を呈する。173は口縁部に2条の沈線を施した後ナデ消す。174は丁寧なナデ調整が施され球形に近い。175～177は中層出土土器である。175の調整は在地的であるが、口縁端部を上方につまみ上げる畿内の特徴をもつ。176はやや長い頸部に、外反する短い口縁部を付加する。177は指押えの痕が残り歪な形状を呈する。

P12（第17図178） 須恵器の蓋である。口縁端部を全周にわたって細かく打ち欠いている。

表土中（第17図179～182） 179は内面に墨書が施され、「信上」あるいは他に多く出土している「杉上」とみられる。180は高台が剥離しているが、稜挽と考えられる。181は瓶の胴部とみられる。断面に縞状の層がみられ、層に沿って外側が剥離している。182は壺の胴部と考えられるが、楕円形に打ち欠き、墨痕は認められないものの、内面のタタキが摩滅した箇所がみられ、転用硯として使用された可能性が考えられる。

木製品（第18・19図183～201）

鞍部1上層、鞍部2上・下層、鞍部3上・中層、鞍部4上層を中心にして200点以上出土した。7割近くが幅3cm～18cmの板状木製品で、そのうち半数を幅5cm程度のものが占める。その他の木製品は鞍部3の中～上層で多く出土し、曲物の底板4点や横櫛などが出土している。

183・184は、4-3・4区の鞍部2下層で、弥生土器とともにまとめて出土した。187は断面三角形を呈し、両端の山側部分をそれぞれV字形とU字形に削る。U字形の凹みの裏面も中心から端に向かって浅く削るが、削り端を切り取るのではなく千切り取っているため、やや粗い。188は楕円形を呈し、2個の円孔を施す。実測図下の孔から端にかけて凹みがみられ、紐等を固定する留め具と考えられる。189は堅櫛、190は横櫛である。189は幅1.9cmの歯を折り曲げて束ね、全面に黒漆を塗布する。191は身幅を広く取り、片面を削ってスプーン状にした杓子状としたが、題籠軸の可能性もあり、赤

外線観察を行ったが墨書は確認できなかった。192は一端の片面をやや細く削り、同じ面のもう一端を広く抉る。抉った裏面にも凹みがみられる。193は端部をやや細く削り、全体にきれいな円形に仕上げる。先端は角が取れ丸みを帯びる。194は片側約1/3を細く削る。両端とも角が取れて丸みをもつが、細い方がより丸みを帯びる。195は刃部3.5cmの鐵の木製品で、反対側6.2cmを茎部状に細く削る。196は一方を約1/3の長さまで断面三角形に削る。三角形に削った根元ともう一方の端に焦げがみられる。197は断面逆台形を呈する方形の容器としたが、舟の部材の可能性も考えられる。198は底部に2.2×1.3cmの長方形の孔が穿たれる。孔に棒を差し込み、竿釣瓶のような機能を果たしたと考えられる。199～201は曲物の底板である。199は同様の板を並べて、梢円形または隅丸方形の底板にしたとみられ、片面中央に3条の凹みが、裏面には平行する細かい傷痕が数条確認できる。200は断面台形を呈し、上底全面に黒漆を塗布する。中心から端部にかけての一部が凹み、漆が剥げた部分がみられる。201は底板と剥離した状態で、側板も出土している。200・201は側面に釘穴が穿たれる。

石製品（第20図202～210）

202～204は敲石である。202・204は主に側面を敲打に利用し、203は平らな面の中央で敲打しているため、縄文時代の凹石に似た形状を呈するが、磨石としての利用はない。鞍部からはクルミが多く出土しており、クルミ食に使用されたと考えられる。205の磨石は表面が非常に滑らかである。断面図上で磨面の範囲を矢印で示した。206は板状に剥離した石を利用して刃部をつけた横刃形石器で、右手の人差指を背部の山に掛けて親指と中指で抉んで持った時の、親指の付け根と折り曲げた中指にあたる、A面の背部とB面の体部中央部が耗耗している。207はB面の一部に自然面を残して成形している。縄文時代前期の尖頭器に類似するが、成形が粗雑で厚みが薄いことから、弥生時代中期あるいは後期の石槍と考えられる。無班品質安山岩製で、鞍部1上層や2区から剥片が出土している。208～210は石製模造品で、208・209は単孔円盤、210は双孔円盤である。208は質の悪い緑色凝灰岩製で脆いが、209・210は良質な滑石製である。緑色凝灰岩は同じ鞍部4上層から良質な剥片も出土している。他に砂岩製の長方形の砥石や、角が取れ丸みを帯びた軽石、雨の宮古墳1号墳前方墳N地区（北側斜面）で、葺石に多く使用される輝石安山岩の破片（石皿として分析）も出土している^(注3)。

第4節 ま と め

【古代】 IV₁～V₂期（8世紀後半～9世紀第3四半期）^(注4)の須恵器を中心に、土師器が少量出土した。器種組成は、須恵器では無台杯37%、有台杯31%と杯類が68%と圧倒的に多く、他に蓋16%、鉢・瓶・壺・壺・鳥形須恵器が出土している。墨書き土器はV₁期を中心実測可能なものだけで20点を数える。その内6点は判読不明であるが、「徳」(59)、「家？」(60)、「炭」(70)、「寺□」(82)が1点、「加比女」(66・90・118)が3点、「杉上」(67)は「□上」(65・69・112・166)や「杉？」(117)、「信上」(179)としたものも含めると7点にのぼる。転用硯も7点出土している。ヘラ記号が施された須恵器は、杯類で「-」6点(10・58・68・83・84・119)・「≠」2点(66・114)、蓋で「=」1点(88)・「≡」1点(124)・「+」または「×」が2点(31・89)と11点出土している。土師器は、椀・壺・製塙土器が少量ずつ出土しているが、出土数は少なく須恵器の1割に満たない。時期もIV₂～V₁期の壺(9・127)、7～8世紀の椀(126)やこの時期を盛期とする棒状尖底の製塙土器(96・145・146)のほか、10世紀頃の椀もみられた。曲物底板(200・201)もこの時期のものと考えられる。

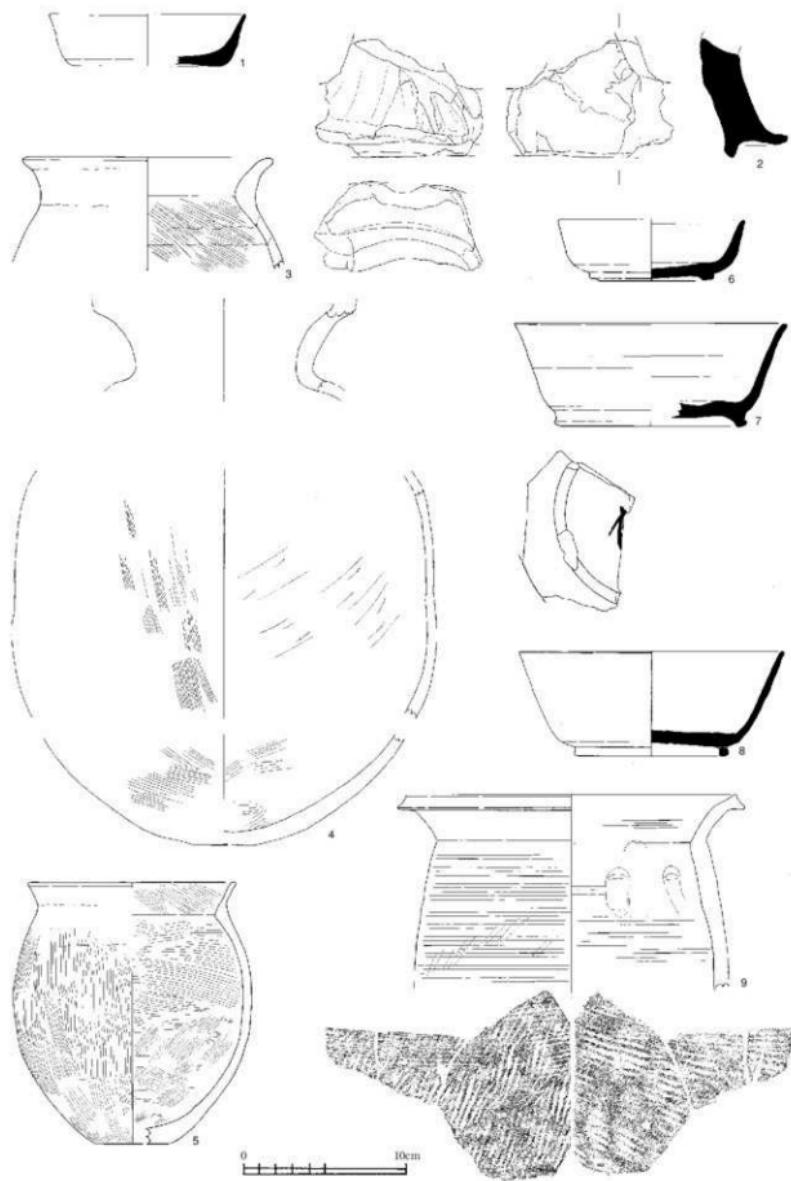
【古墳時代】 漆町編年^(注5)で12・13群を主体に、5・6群(97・169・170・175)の土師器や、14群の須恵器(116・152・153)、15群頃の内黒椀が出土した。器種組成は、高杯が圧倒的に多く47%で、ほぼ畿内系に占められる。杯部と脚部を重複して数えている可能性もあるが、脚部のみでも30%を占める。次いで壺が「く」の字を中心に24%出土し、布留系壺は認められなかった。壺は山陰系の大型壺と小型壺が16%出土している。手づくね土器も目立ち、全体の10%を占める一方で椀は2%と少ない。調整・器形を粗雑化・簡略化し、胎土中の鉄分量の調節や焼成前の鉄分塗布などで赤色を目指した高杯や壺が目立った。堅櫛(189)や有孔円盤(209・210)もこの時期と考えられる。

【弥生時代】 後期後半の法仏式期を主とし、終末期の月影式期(35・103)が若干混じる。壺・壺とともに30%弱、鉢・高杯ともに16%、蓋3%、土鍤、そのほか細片のため実測できなかったが、外面に赤彩を施した装飾器台も出土している。鉢は14点出土しているが、その半数は有孔鉢である。内5点(52~56)は、4・3・4区で細頸壺(49)や長頸壺(50)、蓋(46)、底部穿孔の鉢(51)や、壁板とみられる板状木製品(183・184)とともにまとめて出土し、意図的に廃棄された可能性が考えられる。蔽石(202~204)、石槍(207)も後期頃とみられるが、石槍は中期に遡る可能性もある。

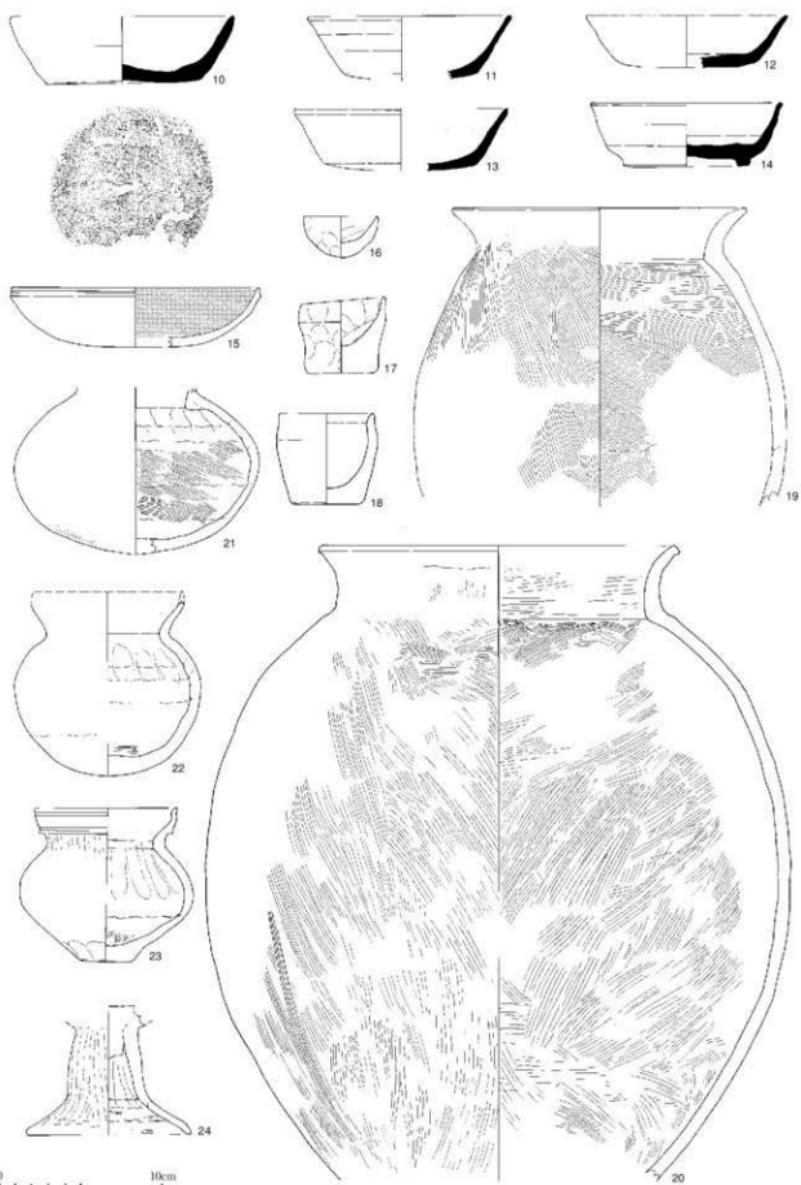
本遺跡周辺では、既に分布調査で調査区の西に隣接する丘陵上に、鳥屋・高階古墳群の大槻北谷支群が存在することが知られ、同じく古墳群の西に位置する丘陵上に、古代の常楽寺遺跡・大槻防壁遺跡が確認されている。今回の調査で出土した遺物は、遺構に伴うものではなく流れ込みによるものが大半であり、これら丘陵上の遺跡との関連が窺われる。また弥生時代後期後半の遺跡は邑知地溝帯の丘陵裾または平野部に点在するが、本遺跡はその空白域にあたる。4・3・4区での出土状況を考えると、本遺跡近傍にも集落が営まれていた可能性が考えられる。鞍部にはこれら周辺に築かれた遺跡の一部が流れ込んだに過ぎず、全体像を現しているとは言えないが、弥生時代後期後半・古墳時代中期～後期、8～9世紀を主とする遺跡が存在した可能性が考えられる。

引用・参考文献

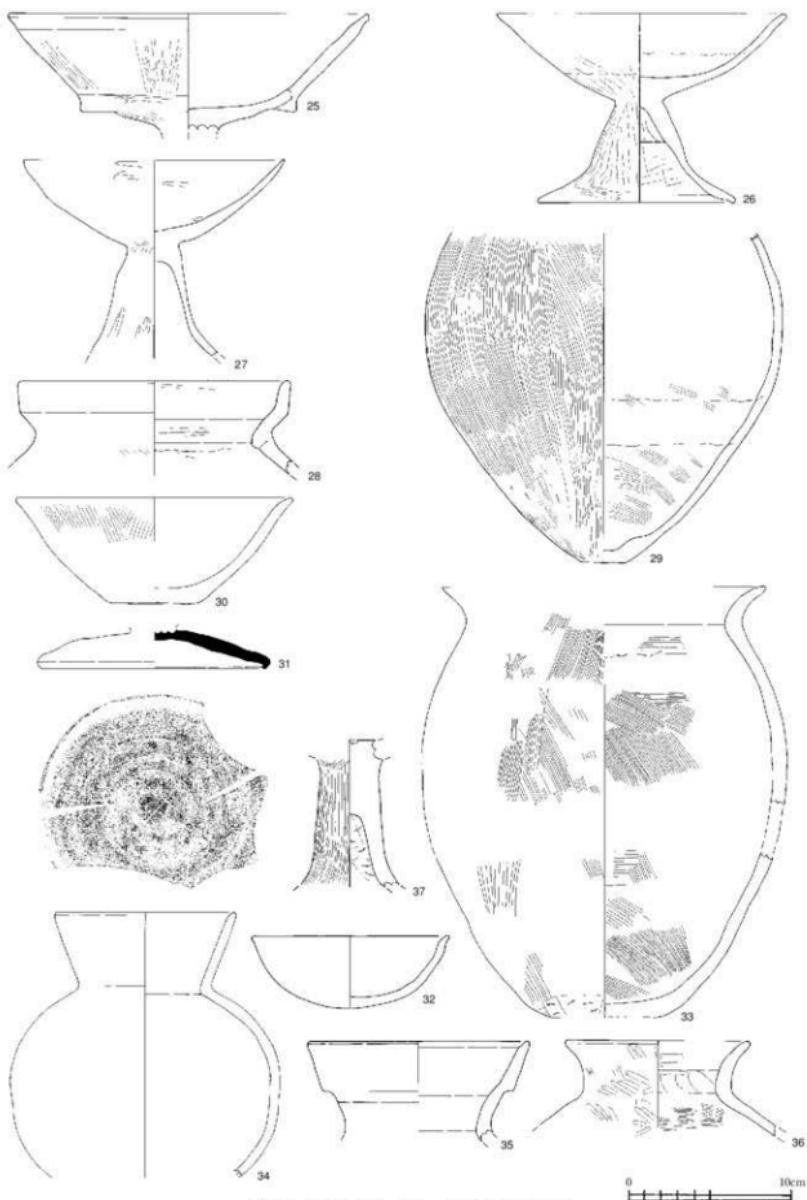
- (注1) 土肥富士夫^(注6) 1985「池崎窪跡」石川県七尾市教育委員会
- (注2) 木立雅朗 1993「能登における7世紀の須恵器生産」『北陸古代土器研究』第3号 北陸古代土器研究会
- (注3) 萩 則雄 2005「第5節 兩の宮古墳群『第1号墳の葺石』の石質について」『史跡 兩の宮古墳群』鹿西町教育委員会
- (注4) 石川考古学研究会 1988「シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題」報告編の編年から従い、絶対年代は、北野博司・池野正男 1989「北陸における須恵器生産」「北陸の古代手工業生産」北陸古代手工业生産史研究会を参照した。
- (注5) 田嶋明人 1986「IV 考察・漆町遺跡出土土器の編年の考察・」「漆町遺跡1」石川県立埋蔵文化財センター
- 石川考古学研究会 1997「石川県考古資料調査・集成事業報告書 祭祀具II」
- 折戸靖幸・川畠誠 1994「高松・押水窪跡群の8世紀中葉の画期」「北陸古代土器研究」第4号 北陸古代土器研究会
- 川畠誠 1992「能登地域の須恵器生産の終焉」「北陸古代土器研究」第2号 北陸古代土器研究会
- 北野博司 1996「古代北陸の煮炊具」「古代の土器研究 律令の土器様式の西・東4 煮炊具」古代の土器研究会
- 田嶋明人 1987「V・2 遺構・遺物の検討」「永町ガマノマガリ」遺跡」石川県立埋蔵文化財センター
- 橋本英道 1995「第8章 考察」「谷内・杉谷遺跡群」石川県立埋蔵文化財センター
- 橋本澄夫・谷内尾音司 1977「鳥屋・高階古墳群分布調査報告」「石川考古学研究会々誌」第20号 石川考古学研究会
- 干場道治^(注6) 1995「木坂ハセタンA・B遺跡」鳥屋町教育委員会
- 山本直人 1986「石川県における古代中世の網漁業の展開」「石川考古学研究会々誌」第29号 石川考古学研究会



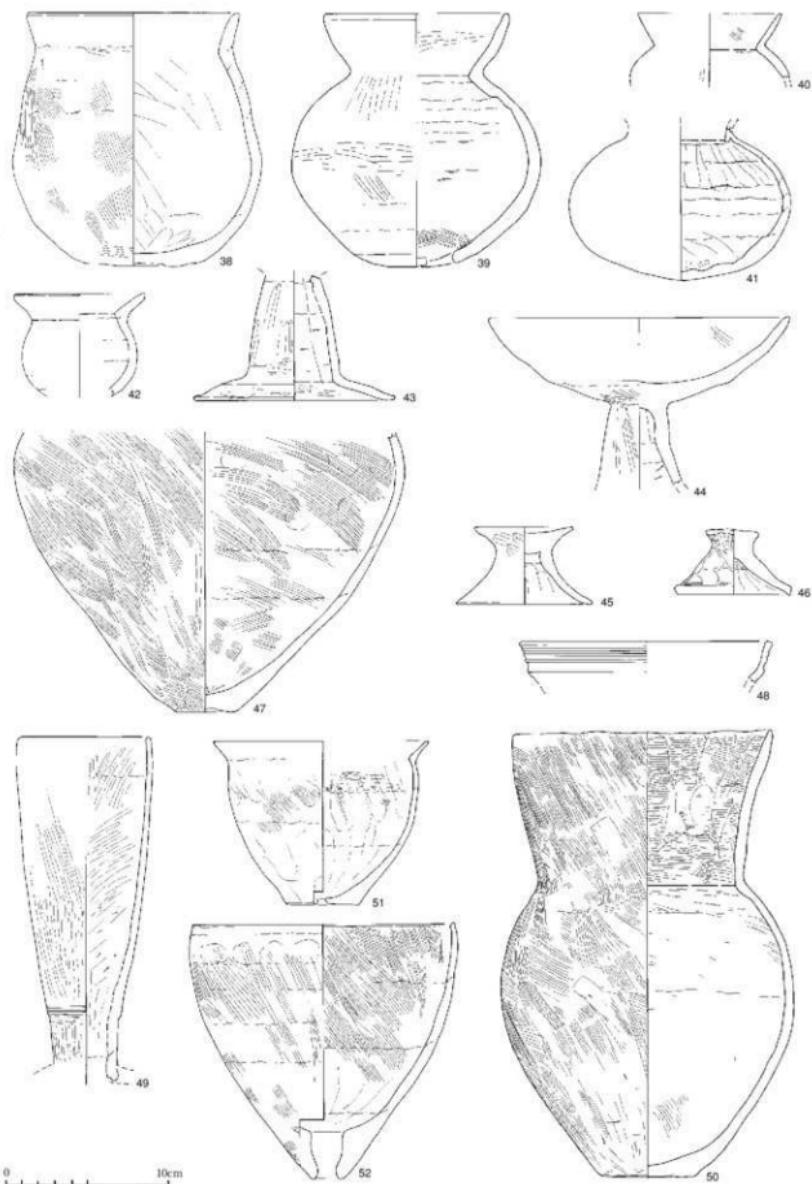
第6図 鞍部1 土器実測図 (S=1/3)



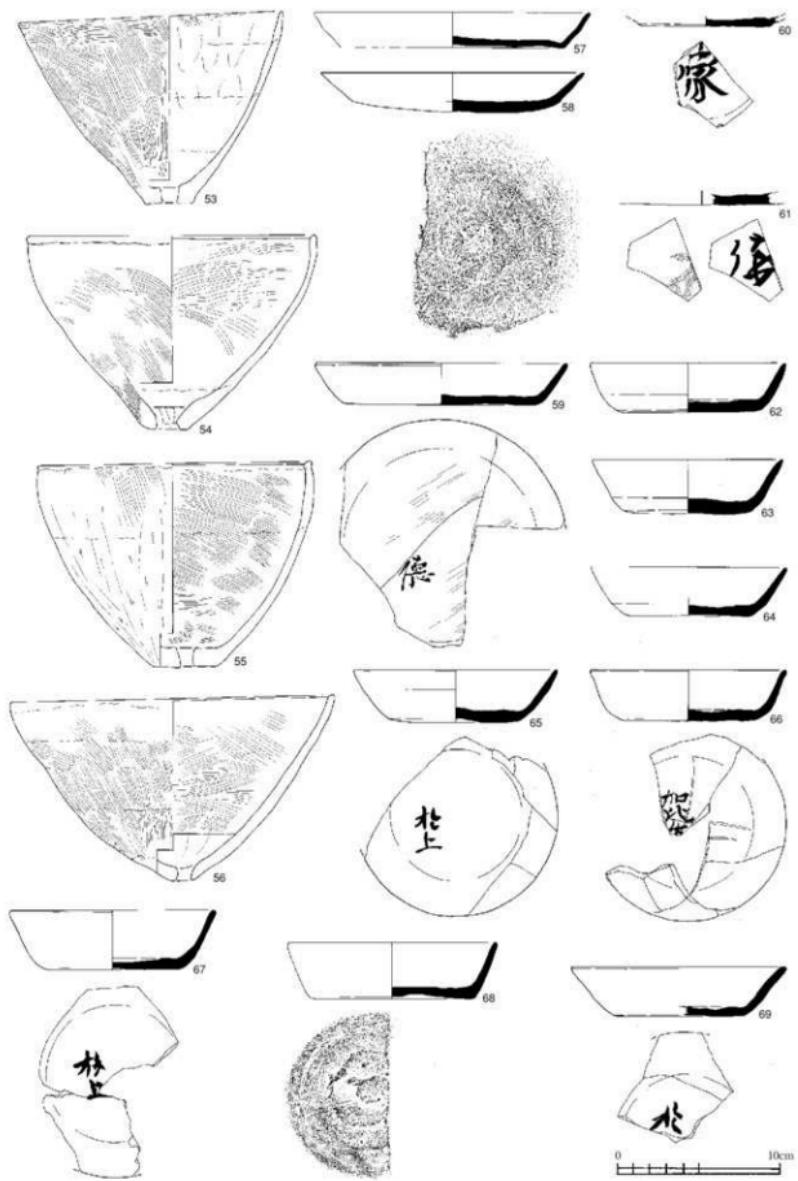
第7図 鞍部2上層 土器実測図 (S=1/3)



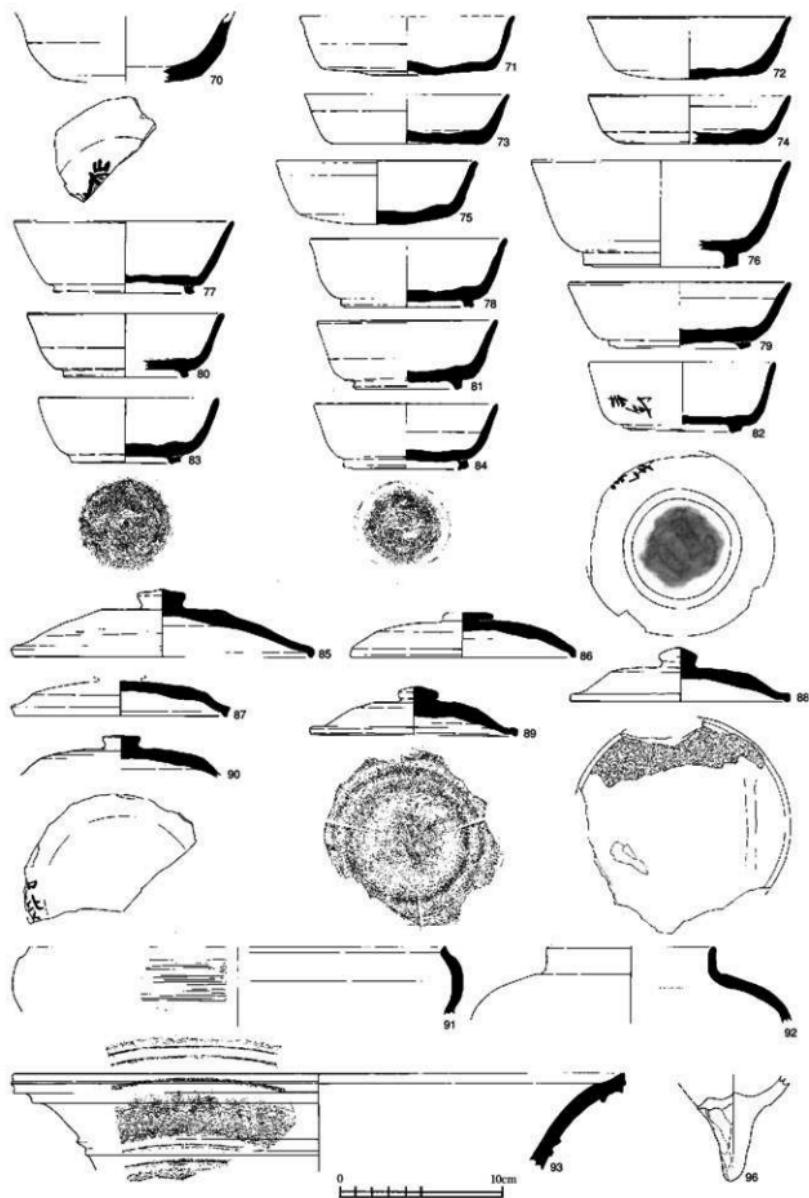
第8図 鞍部2上層・中層 土器実測図 (S=1/3)



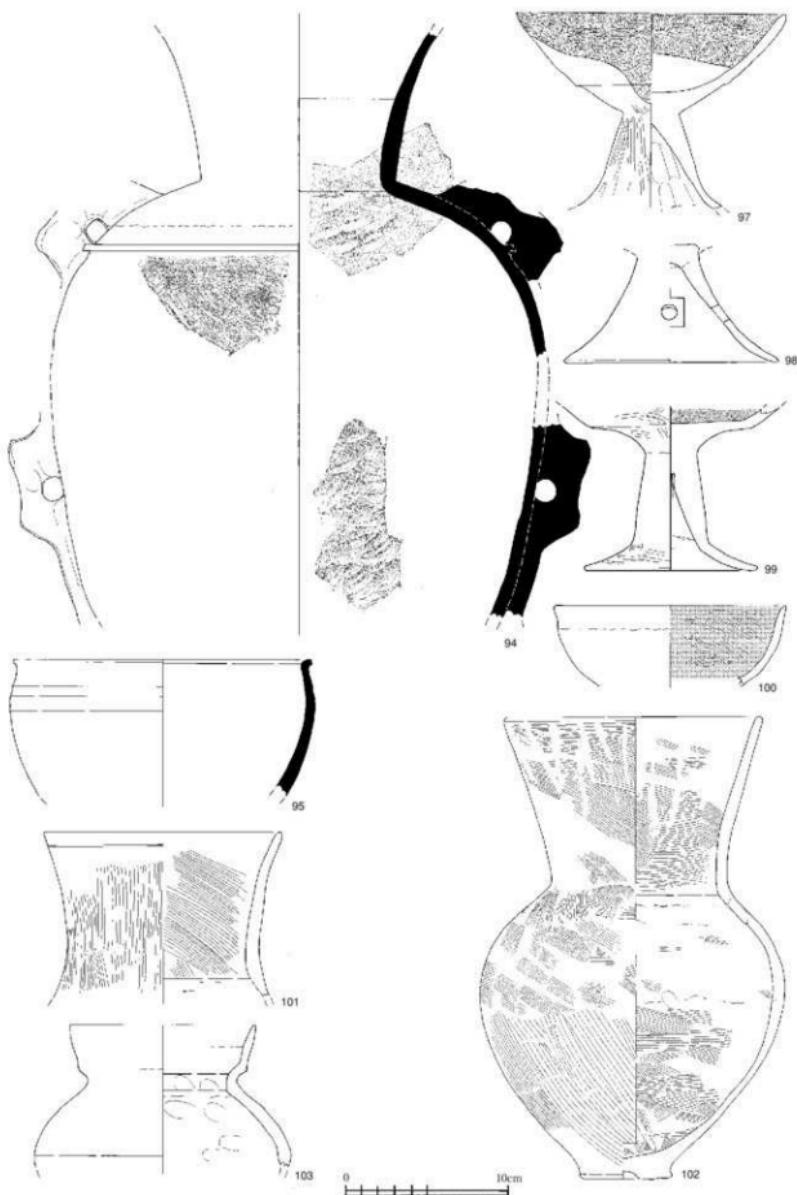
第9図 鞍部2下層 土器実測図 (S=1/3)



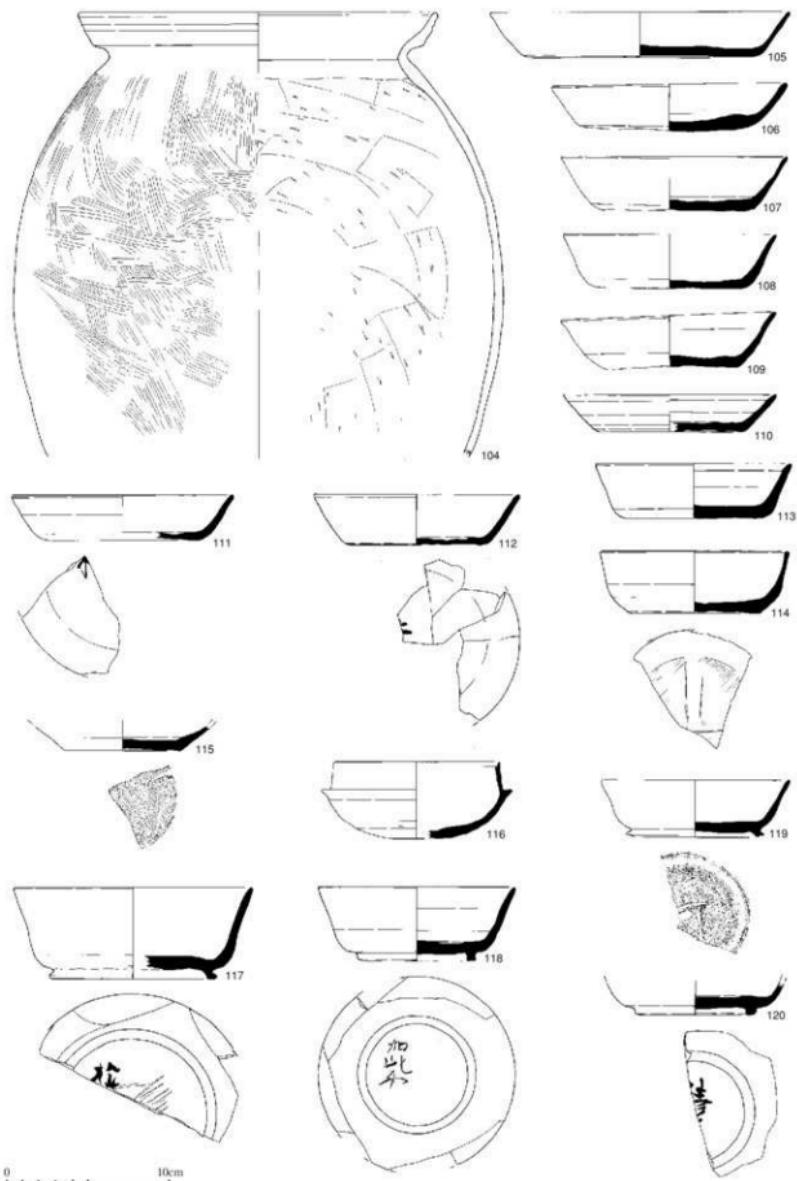
第10図 駒部2下層・駒部3上層 土器実測図 (S=1/3)



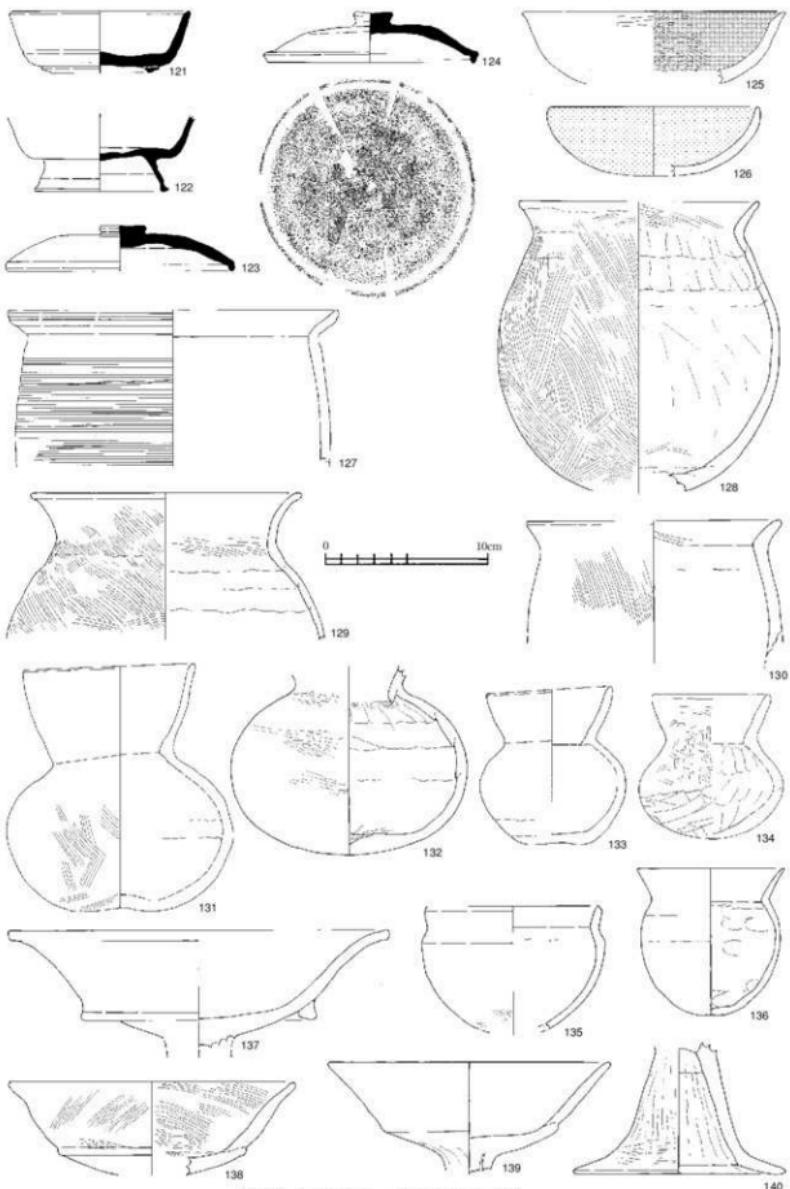
第11図 鞍部3上層 土器実測図① (S=1/3)

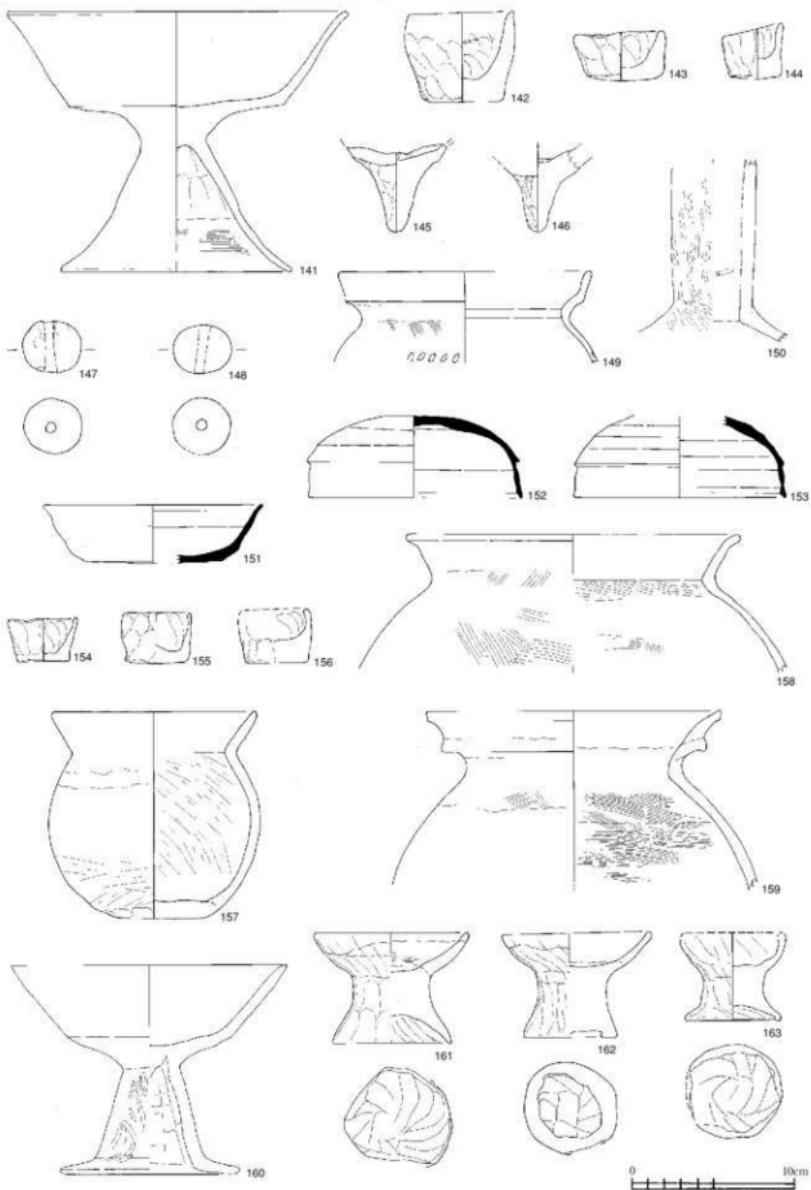


第12図 鞍部3上層 土器実測図② (S=1/3)

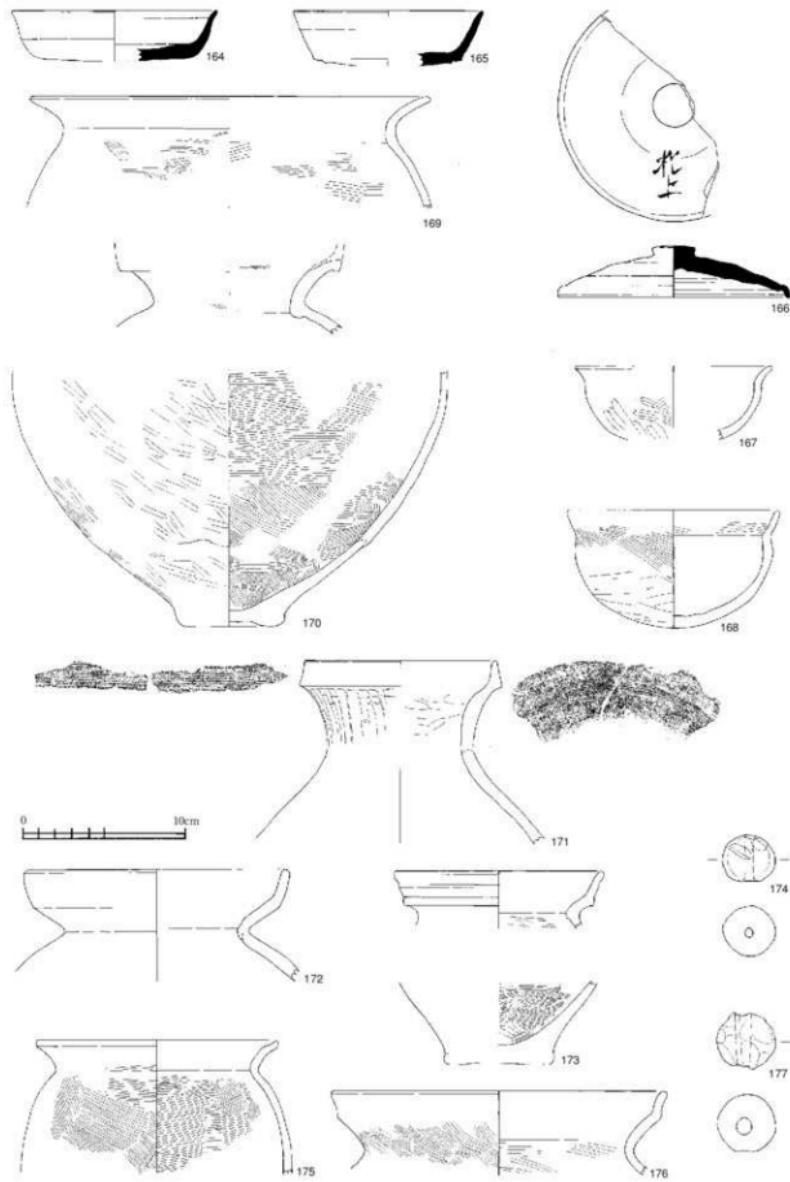


第13図 鞍部3上層・中層 土器実測図 (S=1/3)

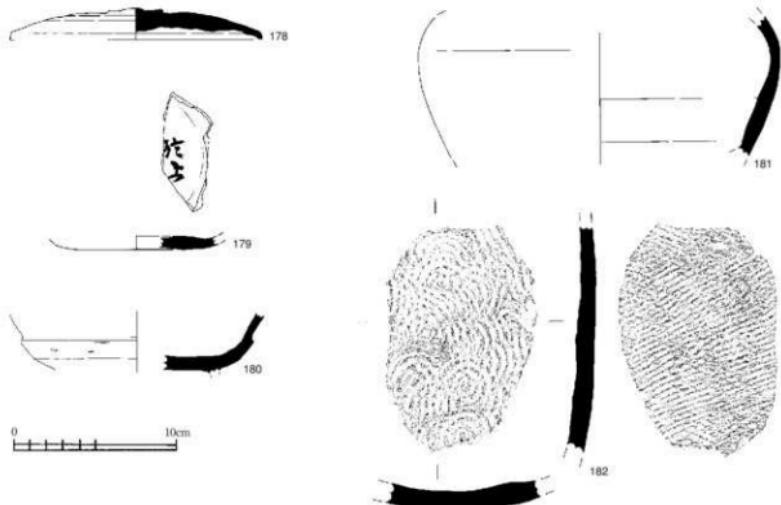
第14図 鞍部3中層 土器実測図 ($S=1/3$)



第15図 鞍部3中層・下層 土器実測図 (S=1/3)



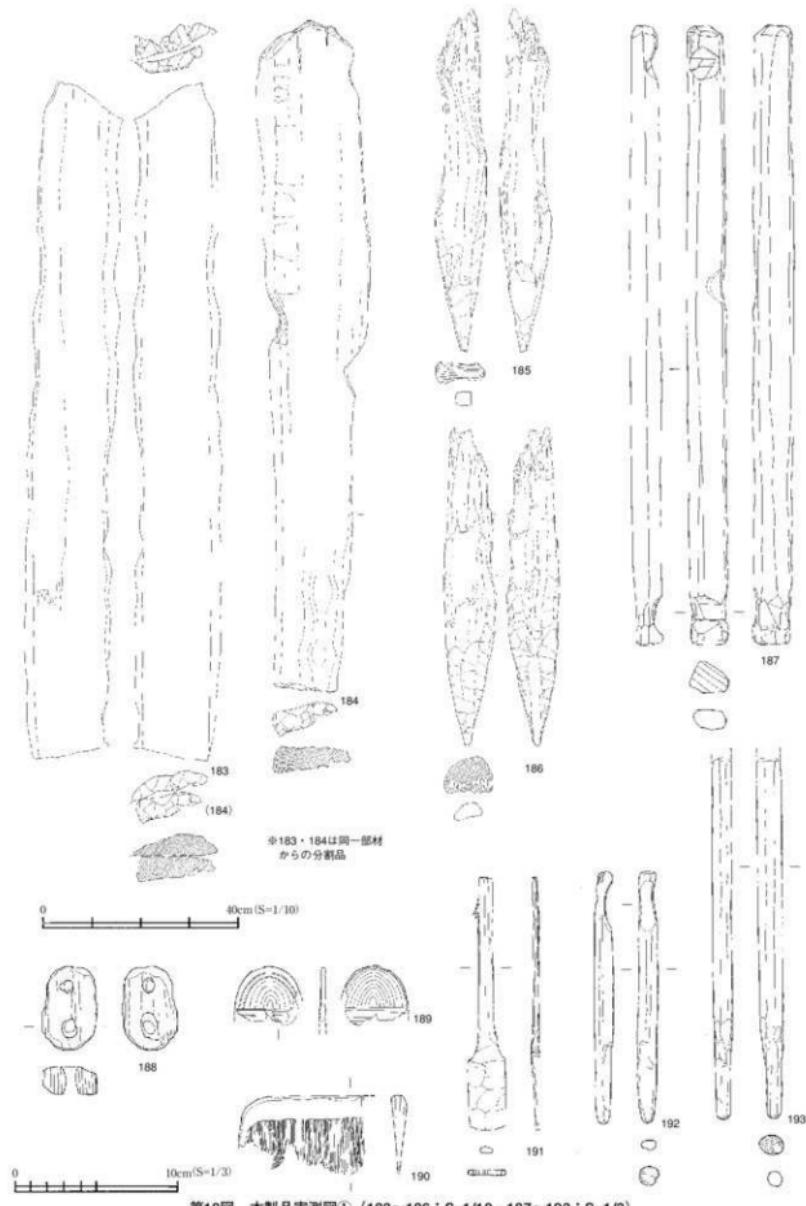
第16図 駿部4 土器実測図 (S=1/3)

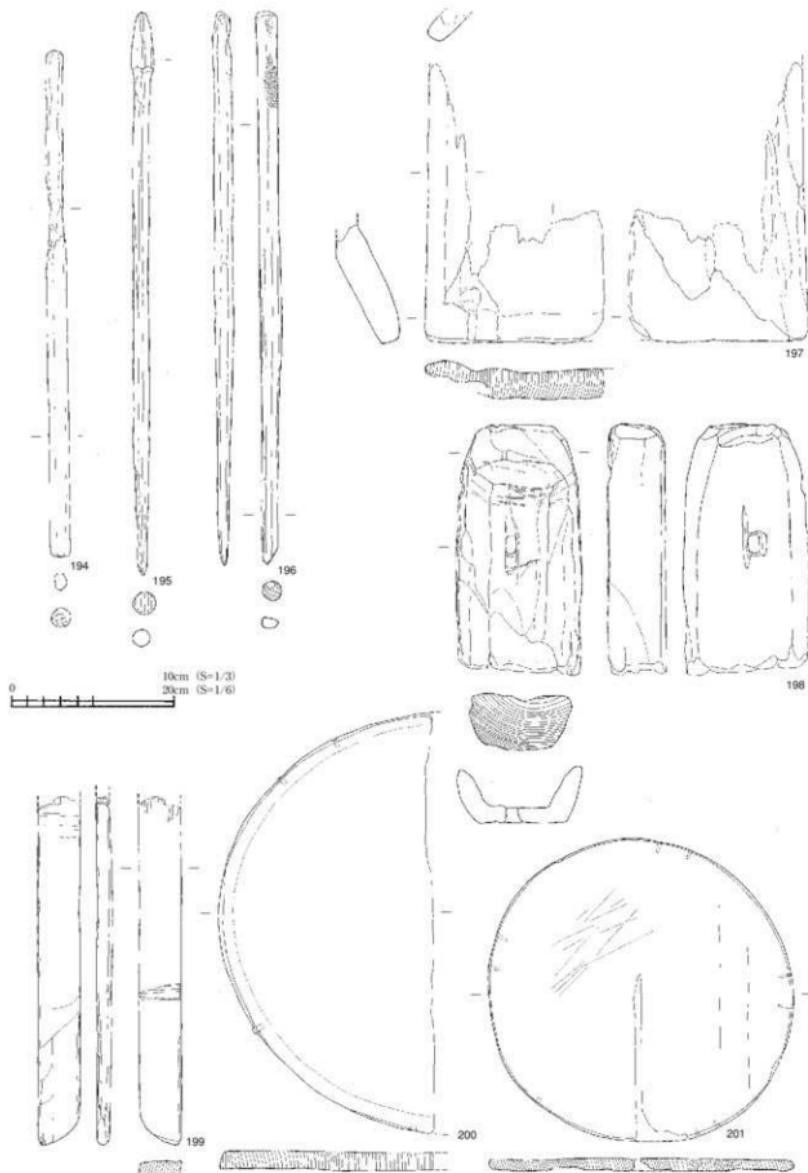


第17図 P12・表土 土器実測図 (S=1/3)

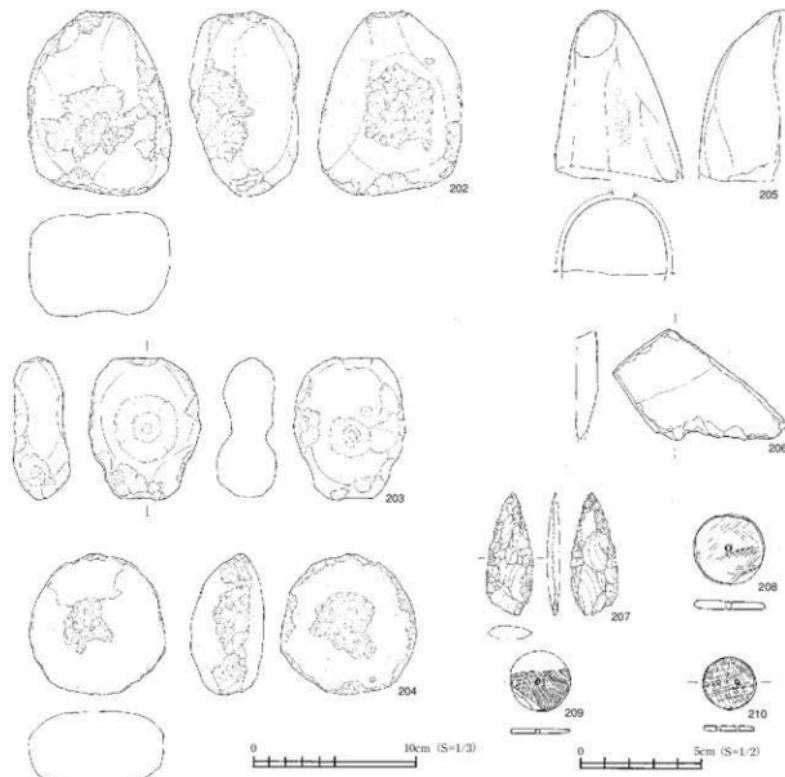
第1表 大槻ヤマゾ遺跡木製品観察表

国版番号	地区	出土土地点	出土層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	柄種	備考	文庫番号
183	4-3区	縦部2	下層	板	138.5	18.4	6.1	タリ		木-58
184	4-3・4区	縦部2	下層	板	137.6	23.2	7.8	タリ	183と組合	木-57
185	4-3区	縦部2	上層	板	70.2	10.6	4.7	タリ		木-41
186	4-3区	縦部2	上層	板	65.3	10.9	7.7	タリ		木-40
187	4-1区	縦部3	上層	棒状	38.1	2.7	1.9	スギ		木-47
188	3-4区	縦部3	上層	留め具?	5.2	3.4	1.9	スギ	丸口	木-44
189	1-3区	縦部4	西側上層	堅板	3.7	3.9	0.4	タケ?	全面黒漆	木-43
190	4-2区	縦部3	上層	横板	7.8	4.8	0.9	イヌノキ	縦面53本残存	木-52
191	4-2区	縦部3	東側上層	杓子状	15.6	2.4	0.5	スギ		木-53
192	4-1区	縦部3	東側中層	棒状	15.5	1.3	1.2	ヒノキ		木-50
193	4-1区	縦部3	西側中層	棒状	22.2	1.5	1.2	スギ		木-46
194	4-5区	表土中	-	棒状	31.3	1.3	1.2	スギ		木-51
195	3-5区	縦部3	東側下層	圓形	33.7	1.5	1.5	スギ		木-45
196	4-2区	縦部3	東側長弧部中層	棒状	34.1	1.4	1.2	スギ	焼けあり	木-56
197	4-1区	縦部3	中層	容器?	34.3	22.1	7.9	スギ		木-55
198	-	-	-	杓子?	30.9	15.5	7.0	タリ	底部孔1	木-48
199	4-2区	縦部3	中層	曲物底板	21.4	2.6	1.0	スギ		木-42
200	4-2区	縦部3	東側長弧部中層	曲物底板	25.9	13.2	1.4	スギ	片面黒漆、側面に刻穴	木-54
201	4-1区	縦部3	上層	曲物底板	18.5	18.8	0.9	スギ	側面に刻穴2箇×5	木-49





第19図 木製品実測図② (194~196、199~201 : S=1/3、197、198 : S=1/6)



第20図 石製品実測図 (202~207 : S=1/3、208~210 : S=1/2)

第2表 大槻ヤマゾ遺跡石製品観察表

図版番号	地区	出土点	出土層位	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量(g)	石村	標号	実測番号
202	ER	表土中	-	礫石	114	90	67	8767	輝石角閃石安山岩		石6
203	3-4区	輪部3	東側中層	礫石	87	69	35	2350	輝石ダイサイト		石5
204	3-3区	輪部3	上層	礫石	79	97	45	4132	角閃石ダイサイト		石10
205	1-3区	輪部4	上層	礫石	106	78	50	4815	無斑品貴安山岩		石7
206	3-4区	輪部3	東側上層	橄欖石斜長岩	68	108	16	1003	無斑品貴安山岩		石11
207	4-2区	輪部3	西側上層	石駁	75	29	0.8	166	無斑品貴安山岩		石4
208	1-3区	輪部4	西側上層	有孔円盤	29	-	0.4	22	流紋岩質凝灰岩	孔径0.2	石1
209	4-5区	輪部2	西側上層	有孔円盤	245	-	0.15	1.5	滑石	孔径0.2	石2
210	4-5区	輪部2	上層	有孔円盤	22	-	0.2	1.6	滑石	孔径0.18	石3

第5章 大槻キッチャマエダ遺跡

第1節 調査の概要

大槻キッチャマエダ遺跡の調査は、排水路敷設箇所（118m²）を対象とし、平成17年7月28日～8月18日に実施した。8月8日からは大槻ヤマゾ遺跡と並行して調査を行った。

調査区の西端と中央附近で微高地状の地形を確認し、西端の微高地を1区、中央附近の微高地で分断された西側の平坦面を2区、東側の平坦面を3区、東への傾斜地を4区、東端の鞍部を5区とした。2～4区の平坦部で井戸・土坑・溝・ピットのはか掘立柱建物1棟を確認した。遺物量は少なく、古代の土師器・須恵器、中世の土師器・珠洲焼、近世の信楽焼などが出土した。

第2節 遺構と遺物（第1～3図、第1～4表）

掘立柱建物（SB） 4区で1棟検出した。P14・P16・P23・P31からなり、P14から直径約10cmの柱根が出土した。1間の幅1.25mで、北東・南西方向に2間、北西・南東方向に1間確認している。P16から土師器壺の肩部片が出土しているが、時期は不明である。

土坑（SK） 10基検出した。そのうちSK2・SK3・SK6・SK7は素掘りの井戸で、標高13.6m前後で湧水がみられた。SK2・SK3からは古代の須恵器・土師器が出土し、SK3では刀子（金1）も出土した。SK6・SK7からは曲物の側板など木製品が出土し、SK7からは全面に黒漆を塗布し、内面に赤漆を重ねた漆器碗（木1）も出土した。SK1から16世紀の灯明皿が、SK5から15世紀後半（VI期）の珠洲焼の擂鉢（4）が出土した。SK8は炭屑で覆われ、13世紀前半頃の土師器皿（3）や珠洲焼片が出土した。SK10からは桶底に礫が堆積した状態で、底板と側板の一部が出土した。蓋は全てはずれて落ちていた。

溝（SD） 4区で1条検出した。北端がSB1の柱穴にかかり、SB1の廃絶後形成されたと考えられる。

ピット（P） 31基検出した。P1の壁面は焼土に覆われ、床面は炭屑が堆積していた。P12からは弥生時代後期後半とみられる蓋（1）が出土し、P21からは外面ハケ調整の土師器壺の胴部片が出土した。P29では直径約10cmの柱根を検出しが、建物等の復元には至らなかった。

鞍部 標高14.173mで検出し、東端の最深部で標高13.401mを測る。8世紀の須恵器（2）、13世紀（II～III期）の珠洲焼の壺（5）のほか、5世紀頃の製塙土器（倒蓋形脚台）、土師器（壺把手）などが出土した。

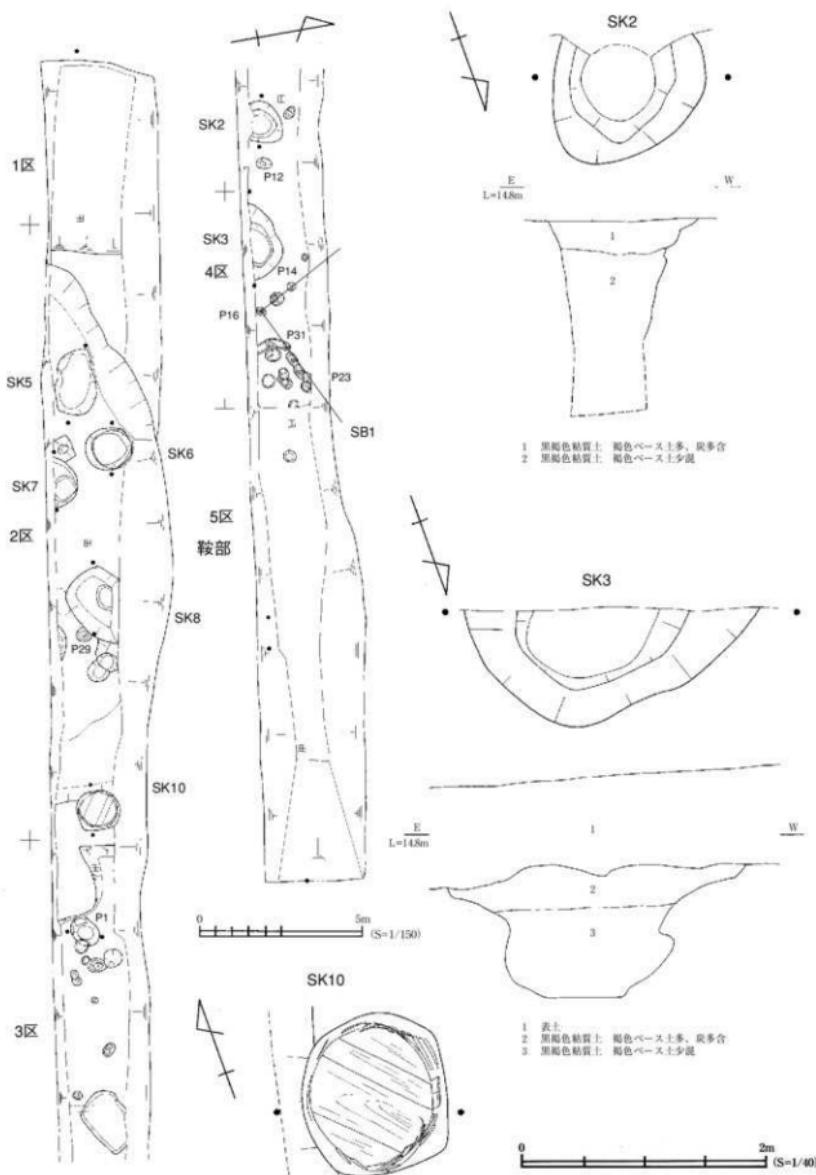
第3節 ま と め

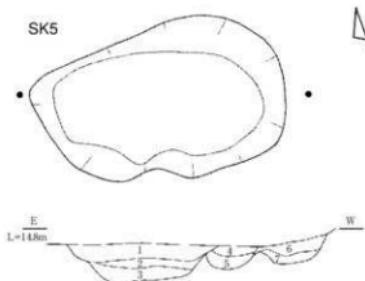
今回の調査で遺跡の東端を確認し、弥生時代後期後半から近世まで断続的に集落が築かれていた状況が確認された。

参考文献

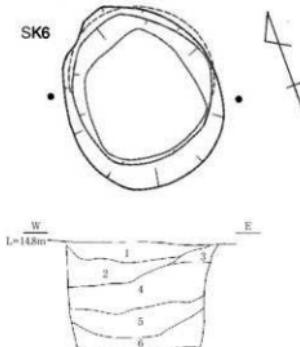
吉岡康暢 1994「中世須恵器の研究」吉川弘文館

藤田邦雄 1989「中世土器素描－加賀地方の土師器を中心にして－」『北陸の考古学II』 石川考古学研究会

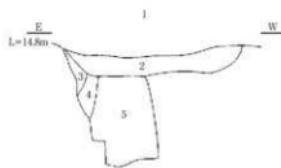
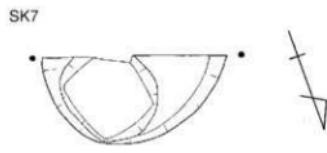
第1図 大槻キッチャマエダ遺跡平面図 ($S=1/150 \cdot 1/40$) • 土層断面図 ($S=1/40$)



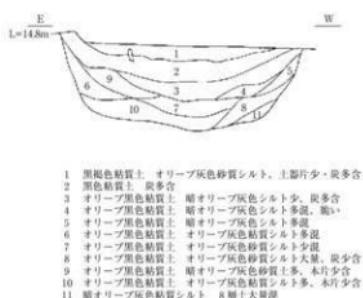
- 1 オリーブ灰色粘質土。2層土。炭多含
- 2 斑青灰色粘質土。3層土多混
- 3 2層土。少混
- 4 オリーブ灰色粘質土。5層土多。炭少含
- 5 青灰色粘質土。4層土多混
- 6 オリーブ灰色粘質土。灰褐色粘質土多混
- 7 青灰色粘質土。褐灰色粘質土多混



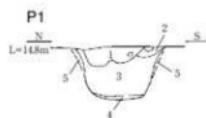
- 1 黒褐色粘質土。灰青褐色粘土多混
- 2 黒褐色粘質土。オリーブ灰色粘土多。雜・木片少含
- 3 灰灰青色粘質土。灰オリーブ色砂土多混
- 4 灰色粘質土。灰オリーブ色砂質土。5層土多。木片少含
- 5 黄灰色粘質土。オリーブ灰色シルト。4層土少混
- 6 灰色シルト。オリーブ灰色シルト少混



- 1 表土
- 2 黒褐色粘質土。褐オリーブ灰色粘土多混
- 3 黒褐色粘質土。3層土多混
- 4 オリーブ灰色粘質土。灰オリーブ色砂質土多混
- 5 黒褐色粘質土。オリーブ黑色粘質土多混



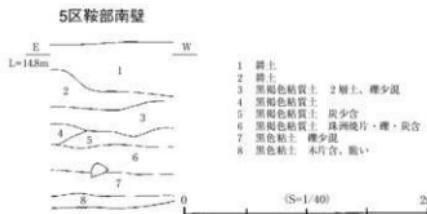
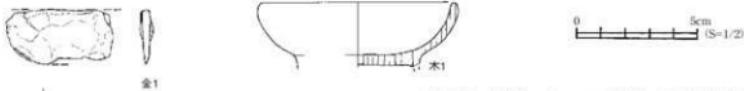
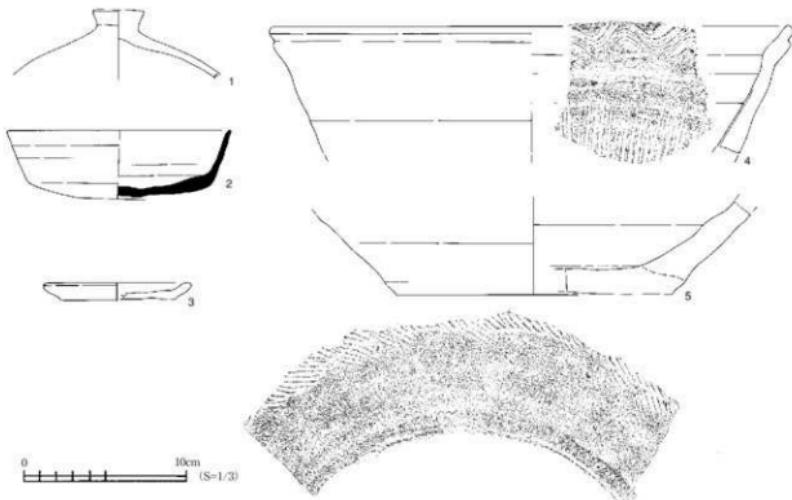
- 1 黑褐色粘質土。オリーブ灰色砂質シルト。上部片少。炭多含
- 2 頭部粘質土。灰多含
- 3 オリーブ灰色粘質土。褐オリーブ灰色シルト少混
- 4 オリーブ灰色粘質土。褐オリーブ灰色シルト多混
- 5 オリーブ灰色粘質土。褐オリーブ灰色シルト少混
- 6 オリーブ黑色粘質土。オリーブ灰色砂質シルト多混
- 7 オリーブ黑色粘質土。オリーブ灰色砂質シルト少混
- 8 オリーブ灰色粘質土。オリーブ灰色砂質シルト大量。炭少含
- 9 オリーブ灰色粘質土。オリーブ灰色砂質シルト多。木片少含
- 10 オリーブ灰色粘質土。オリーブ灰色砂質シルト多。木片少含
- 11 褐オリーブ灰色粘質シルト。8層土大量混



- 1 黑褐色粘質土。3層土少。雜・木少含
- 2 黑褐色粘質土。3層土多。雜混
- 3 黑褐色粘質土。雜多混
- 4 底層。炭多含
- 5 塗土

0 2m (S=1/40)

第2図 大槻キッチャマエダ遺跡平面図・土層断面図 (S=1/40)



第3図 大槻キッチャマエダ遺跡出土遺物 (S=1/10)・土層断面図 (S=1/40)

第2表 大槻キッチャマエダ遺跡土器観察表

回数 番号	地区	出土地点	器種	被覆	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	色調	胎土	破成	測量	遺存率	備考	実測 番号
1	3区	P12	釜	無	-	-	14.0	内面: 淡褐色 外面: 淡黄色	粗砂多、海綿骨料	真	内面: ヒザギ 外面: 不明	つまみ足形	つまみ目50cm	10
2	4区	鞍部	筒形器	無	13.6	11.2	4.4	内外面: 淡灰色	粗砂多、海綿骨料	真	内外面: ロクロナナ	口径8.12	底部外表面凹痕	14
3	2区	SK8	小鉢	土器器	8.8	6.9	1.1	内外面: 淡白色	粗砂多、海綿骨料	真	内面: ヒカリナナ、ナダ 外面: ヒコナナ	口径1.72 底径1.65	底径1.65	12
4	2区	SK5	すり鉢	麻袋	32.0	-	17.0	内外面: 淡灰色	粗砂多、繩、海綿骨料	真	内面: ヒカリナナ、ナダ 外面: ロクロナナ	口径1.12	底径1.12	13
5	3区	鞍部	釜	麻袋	-	17.0	15.0	内外面: 淡灰色	粗砂多、海綿骨料	真	内面: ロクロナナ、タカ	底径5.12	底径5.12	15

第3表 大槻キッチャマエダ遺跡鉄製品観察表

回数 番号	地区	出土地点	器種	材質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最小幅 (cm)	実測 番号
全1	4区	SK3	刀子	鐵	4.50	0.20	0.04	0.1

第4表 大槻キッチャマエダ遺跡木製品観察表

回数 番号	地区	出土地点	器種	被覆	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考	実測 番号
木1	2区	SK7	漆器器	漆ナ属	7.9	5.0	2.7	内面里漆後漆 外面前漆	木-1

第6章 春木マエダ遺跡

第1節 調査の概要

春木マエダ遺跡の調査は、排水路敷設箇所（82m²）及び排水管路敷設箇所（60m²）の合計142m²を対象とし、大槻ブンゾ遺跡の発掘調査と並行しながら平成17年11月21日～12月19日に実施した。

遺跡は西側から派生している丘陵裾の微高地に立地していたと考えられるが、以前の耕地整理により遺構上面は削平されており、遺構の依存状態は良好ではない。調査区は北側の排水路調査区をA区、追加で行われた南側の排水管路調査区をB区と設定した。

A区は町道東側の水田中に位置しており、南北方向に幅1.5m、延長約54.5m、面積82m²を測る。溝やピットが検出されているが、建物の柱穴と考えられるものは見つからなかった。遺物は土師器、須恵器、珠洲焼などの破片が表土や包含層中から出土したが、実測できるものは無かった。

B区はA区から南東側へ約40m離れた農道下に位置しており、幅1.5m、延長40m、面積60m²を測る。北側には溝や浅い土坑が検出され、南半は鞍部となり南へ地形が落ち込んでいる。遺物は土師器、生焼けのものも含む須恵器が表土から出土し、SD04からは須恵器杯1点が出土している。

第2節 遺構と遺物（第1・2図、第1表）

土坑（SK） A区南側のSK01は土坑隅に小ピットを持ち、最大深5cmの略方形と考えられる浅い土坑で、古代の須恵器蓋小片が出土している。B区中央のSK02は、最大深10cmの浅い土坑で、須恵器瓶類の小片が出土している。

溝（SD） A区北側のSD01は、幅約3m、深さ約70cmの東西方向に延びる溝で、黒（灰）色～黒褐色シルトが堆積している。遺物は上面から土師器と須恵器の小片が出土しているが遺構の時期を特定できるものではない。B区北側のSD03は幅75cm、深さ13cmの浅い溝で、古代の須恵器甕片や内黒土師器小片が出土している。SD04は幅2.5m、最大深15cmの東西方向に延びる浅い溝で、底にピットを検出している。ピットからは地元産と考えられるV期の須恵器無台杯が1点出土している。

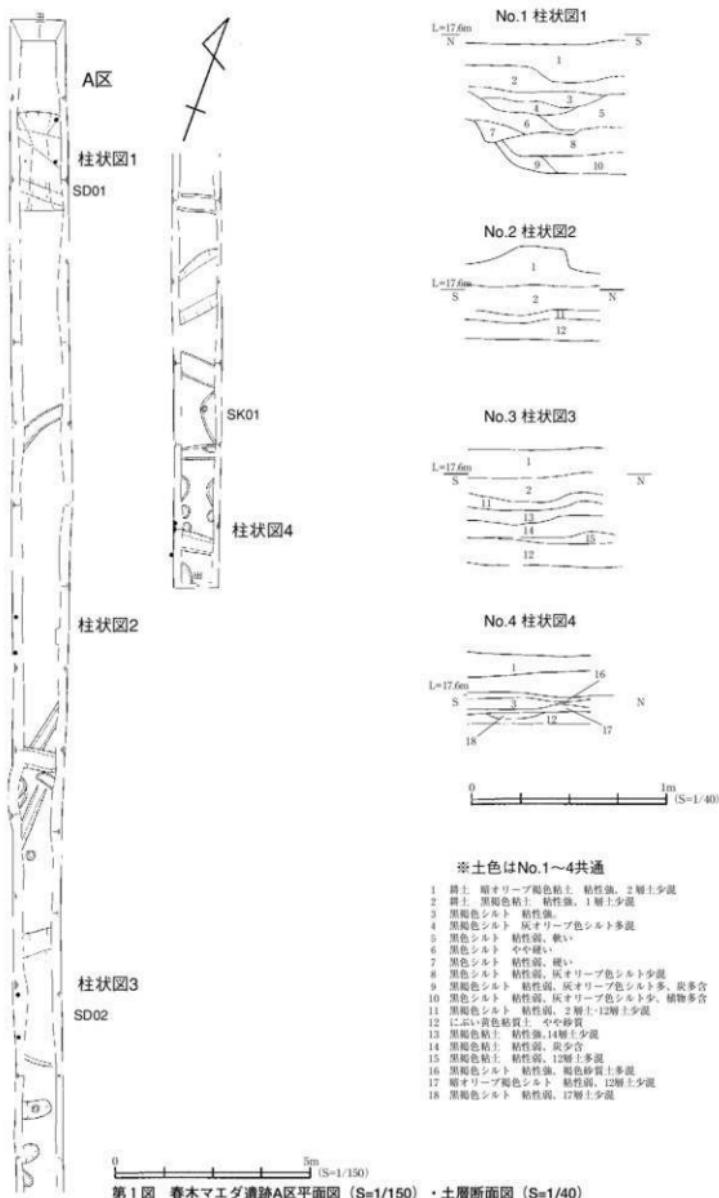
鞍部 B区南側に位置し、中央のSD05を境に南側へ落ち込む鞍部で、湧水が多い。SD05付近では標高16.96mで検出し、南端の最深部で標高16.63mを測る。土師器小片が出土している。

第3節 まとめ

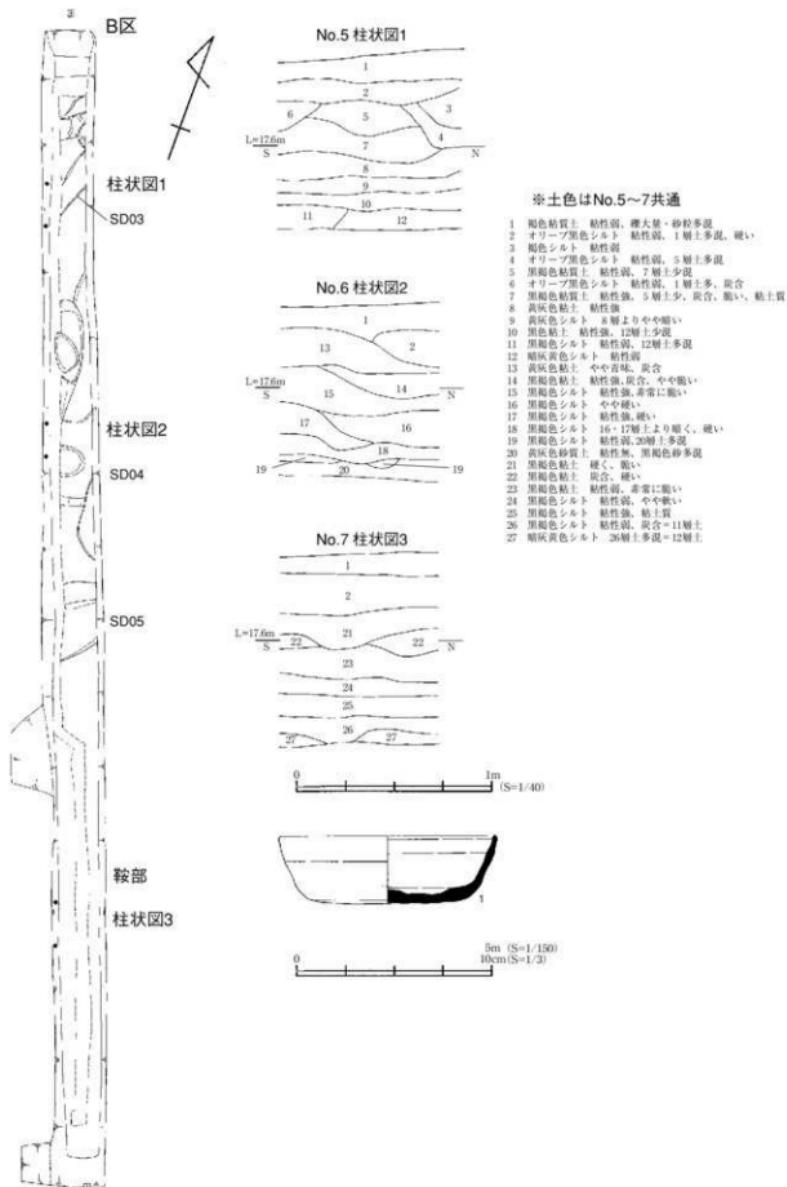
今回の調査では建物は検出できなかったが、溝や包含層から奈良時代～中世の遺物が出土した。遺跡の中心部は、西側に位置する丘陵先端～丘陵裾の微高地に存在していると考えており、今回の調査区は遺跡の縁辺部にあたると思われる。生焼け須恵器が出土していることから、付近の丘陵中に存在すると考えられる、古代の須恵器窯と関連した集落であることが想定される。

第1表 春木マエダ遺跡出土遺物観察表

調査番号	地区	出土遺点	器種	種類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	胎土	焼成	調整	遺存率	実測 番号
1	B区	SD04	無台杯	須恵器	13.0	9.2	4.2	内外面：灰白色 粗粒多、海綿骨剥	良	内面：ロクロナギ 外面：ロクロナギ、ヘラ切り	11件：1/2	D-1	



第1図 春木マエダ遺跡A区平面図 (S=1/150) ・ 土層断面図 (S=1/40)



第2図 春木マエダ遺跡B区平面図 (S=1/150)・土層断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3)

第7章 春木A・B遺跡

第1節 概 要

春木A・B遺跡の調査は、排水路敷設箇所（40m²）を対象とし、大槻ブンゾ遺跡の発掘調査と並行しながら平成18年6月5日～19日に実施した。

遺跡は新庄遺跡北西側の二宮川左岸の低丘陵上に位置しており、昭和60・62年度に行われた県道渓戸・春木線開設に伴う発掘調査では中世墓が検出され、珠洲焼壺と甕が出土している。同丘陵上には県内最古級の前方後方墳として知られる大槻11号墳を含む大槻古墳群や弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴建物や大型土坑などが確認された大槻小山遺跡も所在する。

調査地は南側から派生する丘陵裾の緩斜面に立地していたと考えられるが、周辺の水田表面からは須恵器や珠洲焼などの片断を多量に表探しており、以前の耕地整理により遺跡が大きく削平された可能性が高い。調査区は丘陵裾の水田中に位置し、地形に合わせてへの字に約20°曲がっている。幅1.5m、延長約27m、面積40m²を測る。丘陵側の造構面は削平により水平となっているが、北西側には丘陵からの斜面（落ち込み）を検出した。検出された造構からは遺物の出土は無かったが、調査区東端の造構検出面と西側の落ち込み内から、古代の須恵器杯と甕の小片が出土している。また、調査区外から表探した中世の珠洲焼甕（1）と擂鉢（2）の2点を図化した。

第2節 遺構と遺物（第1図、第1表）

土坑（SK） 調査区中央やや東よりに位置するSK01は径1.8m、最大深50cmの略円形と考えられる土坑で黒褐色～暗褐色の粘質土が堆積している。遺物の出土は無く時代も不明である。

ピット（P） P01はSK01の南側に位置し、長径85cm、短径75cmの方形のピットで、褐灰色の粘質土が堆積している。柱穴の可能性もあるが、遺物の出土も無く時代も不明である。

溝（SD） 調査区西側に位置するSD01は、丘陵側から北へと落ちながら延びる最大幅1.6m、最大深35cmの溝で、しまりのない黒褐色～褐灰色の粘質土が堆積している。

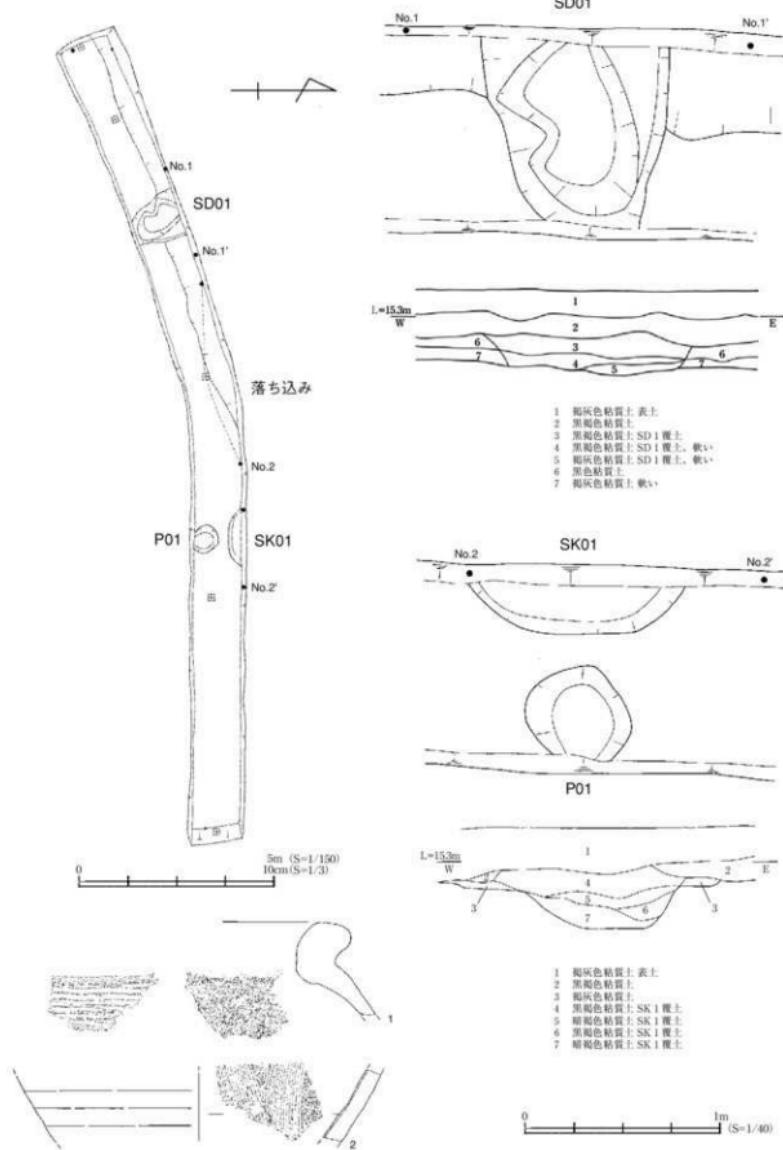
遺構外 調査区東端の遺構検出面からは、古代の須恵器有台杯の小片2点が出土した。また、西端近くの落ち込み内から須恵器の甕胴部片が出土した。どちらも時期を特定できるものではない。

第3節 ま と め

今回の調査では溝や土坑などの遺構からは遺物の出土は無く、時期の判断もできなかったが、調査区周辺からは奈良・平安時代の須恵器を中心に、弥生土器や土師器、珠洲焼などの遺物も出土しており、各時期の集落が広がっていたと考えている。遺跡の中心部は、南側に位置する丘陵上の平坦面を中心と展開していたと考えており、今回の調査区は遺跡の縁辺部にあたると思われる。

第1表 春木A・B遺跡出土遺物観察表

調査 番号	地区	出土地点	器種	種類	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	色調	胎土	地成	調査	遺存率	文庫 番号
1	調査区外	表探	甕	珠洲	-	-	(5.7)	内外面：灰白	粗砂多	良	内外面：ロクロナデ、タタキ	-	1
2	調査区外	表探	擂鉢	珠洲	-	-	(4.4)	内外面：灰白	粗砂多、海綿骨針	良	内外面：ロクロナデ	-	2



第1図 春木A・B遺跡平面図 (S=1/150)・土層断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3)

第8章 春木キッショウ遺跡

第1節 調査の概要

春木キッショウ遺跡の調査は、排水路敷設箇所（60m²）を対象とし、大槻ブンゾ遺跡の発掘調査と並行しながら平成18年6月26日～28日に実施した。

遺跡周辺には奥ノ坊の地名が残り、南東側の低丘陵上には天正4(1576)年上杉謙信の能登侵攻の際に焼かれたと伝えられている安楽寺跡が所在する。遺跡は北西側へと派生する尾根裾部の緩斜面～微高地に立地していたと考えられるが、以前の耕地整理により遺跡が大きく削平された可能性が高く、遺構の依存状況は良好ではない。県道を挟んだ西側の林照寺の境内には春木斎藤館遺跡があり、悲鳴の堀を巡らせた中世の館跡が残る。調査区は町道西側裾の現況排水路に沿った水田中に位置し、地形に合わせて約35°。づつ2箇所で大きく湾曲しており、幅1.5m、延長約40m、面積60m²を測る。調査区内的屈折点を境に南側から北側へ1～3区と設定して調査を行った。遺構面は南側（標高18.6m代）から北側（標高17.6m代）へと約1m傾斜しており、溝や小穴が検出されたものの、遺構からは遺物の出土は無かった。表土内からは古代の土師器と須恵器窯の小片が出土している。

第2節 遺構と遺物（第1図、第1表）

ピット（P） P01は調査区中央の2・3区の境に位置し、長径90cm、短径60cm、最大深15cmの不整形なピットで、黒褐色の粘質土が堆積している。遺物の出土も無く時代も不明である。

溝（SD） P01の北側に位置するSD01は、丘陵側の南東から北西へと延びる最大幅60cm、最大深15cmの浅い溝で、黒褐色～黒色の粘質土が堆積している。遺物の出土は無く時代も不明である。

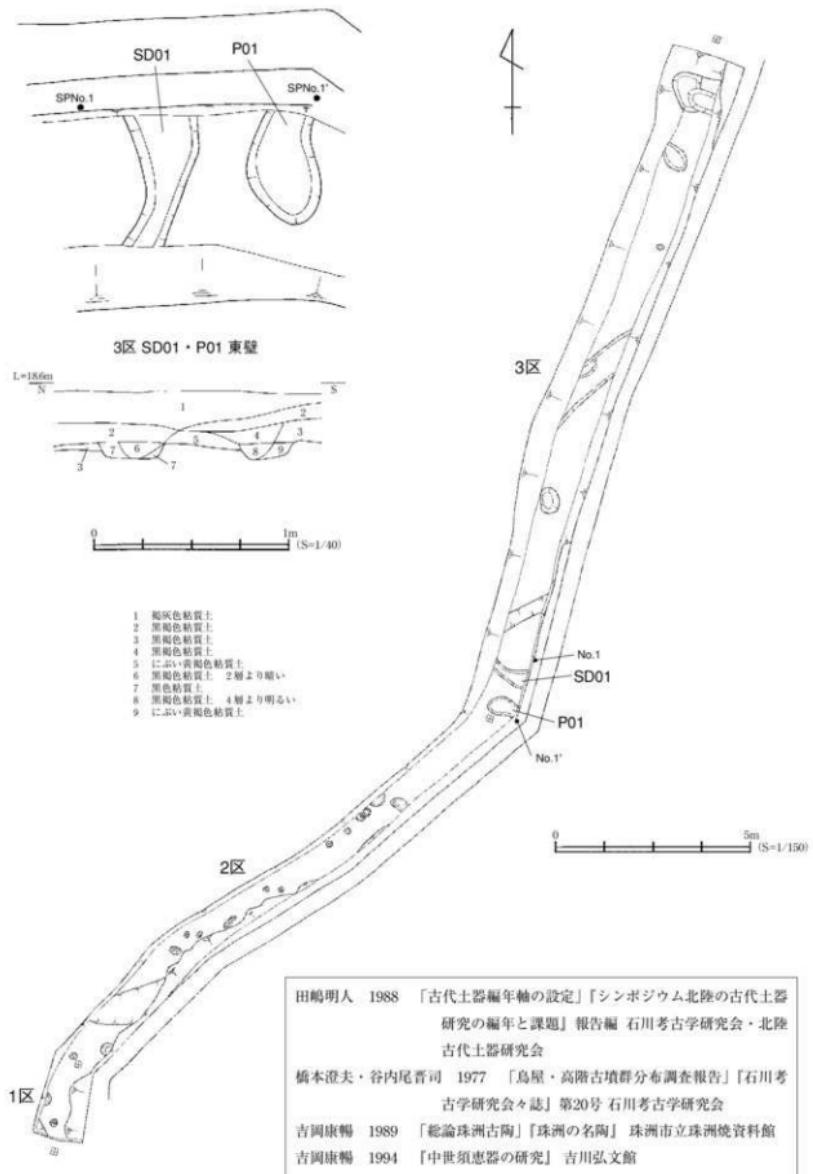
遺構外 表土中からは、須恵器や土師器の小片が出土したが、時期を特定できるものではない。

第3節 まとめ

今回の調査では溝や小穴などの遺構からは遺物の出土は無く、時期の判断もできなかった。遺跡の中心部は、東側に位置する丘陵上の平坦面を中心に展開していたと考えており、今回の調査区は遺跡の縁辺部にあたると思われる。

引用・参考文献（第3章・第6～8章分）

- ※石川考古学研究会 1988 「シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題」報告編の編年に従い、絶対年代は、
北野博司・池野正男 1989「北陸における須恵器生産」「北陸の古代手工業生産」北陸古代手工業生産史研究会を参
照した。
石川考古学研究会 1997 「石川県考古資料調査・集成事業報告書 祭祀具Ⅱ」
川畠 誠 1992 「能登地域の須恵器生産の終焉」「北陸古代土器研究」第2号 北陸古代土器研究会
木立雅朗 1993 「能登における7世紀の須恵器生産」「北陸古代土器研究」第3号 北陸古代土器研究会
北野博司 1996 「古代北陸の煮炊具」「古代の土器研究 法律的土器様式の西・東4 煮炊具」古代の土器研究会
田嶋明人 1986 「IV考察 - 漆町遺跡出土土器の編年的考察 - 」「漆町遺跡I」石川県立埋蔵文化財センター
田嶋明人 1987 「V・2 遺構・遺物の検討」「永町ガマノマガリ遺跡」石川県立埋蔵文化財センター



田嶋明人 1988 「古代土器編年軸の設定」「シンボジウム北陸の古代土器研究の幅と課題」報告編 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
 橋本澄夫・谷内尾晋司 1977 「鳥屋・高階古墳群分布調査報告」「石川考古学研究会誌」第20号 石川考古学研究会
 吉岡康暢 1989 「絶縁珠洲古陶」「珠洲の名陶」 珠洲市立珠洲焼資料館
 吉岡康暢 1994 「中世須恵器の研究」 吉川弘文館

第1図 春木キッショウ遺跡平面図 (S=1/150)・土層断面図 (S=1/40)

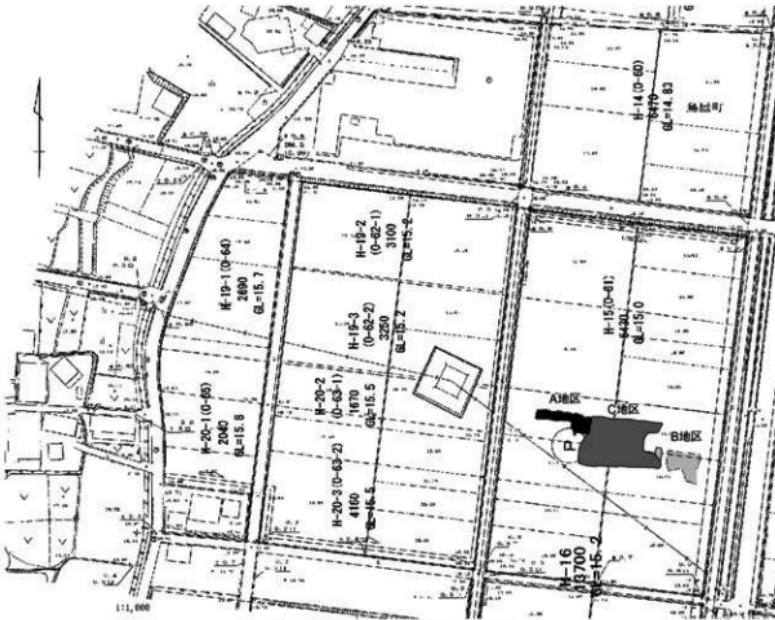
第9章 春木ハチノタ遺跡

第1節 調査の概要

1. 調査区周辺の地形と基本層序

調査区周辺は、石動山系を水源とする二宮川旧流路が、邑知地溝帯を北流し七尾西湾に注ぐ過程で台地を開析することにより形成された沖積低地と判断される。そのため周辺の地形は、北へ向かって緩やかに低下すると共に、遺跡西側に位置する台地裾部には河岸段丘が発達し、そこから東側に向けてやや急な地形の低下がみられる。一方、調査区東側には、試掘調査により蛇行する旧流路の存在が推定でき、遺跡は二宮川旧流路縁に形成された自然堤防状の微高地に立地していたことが推測される。

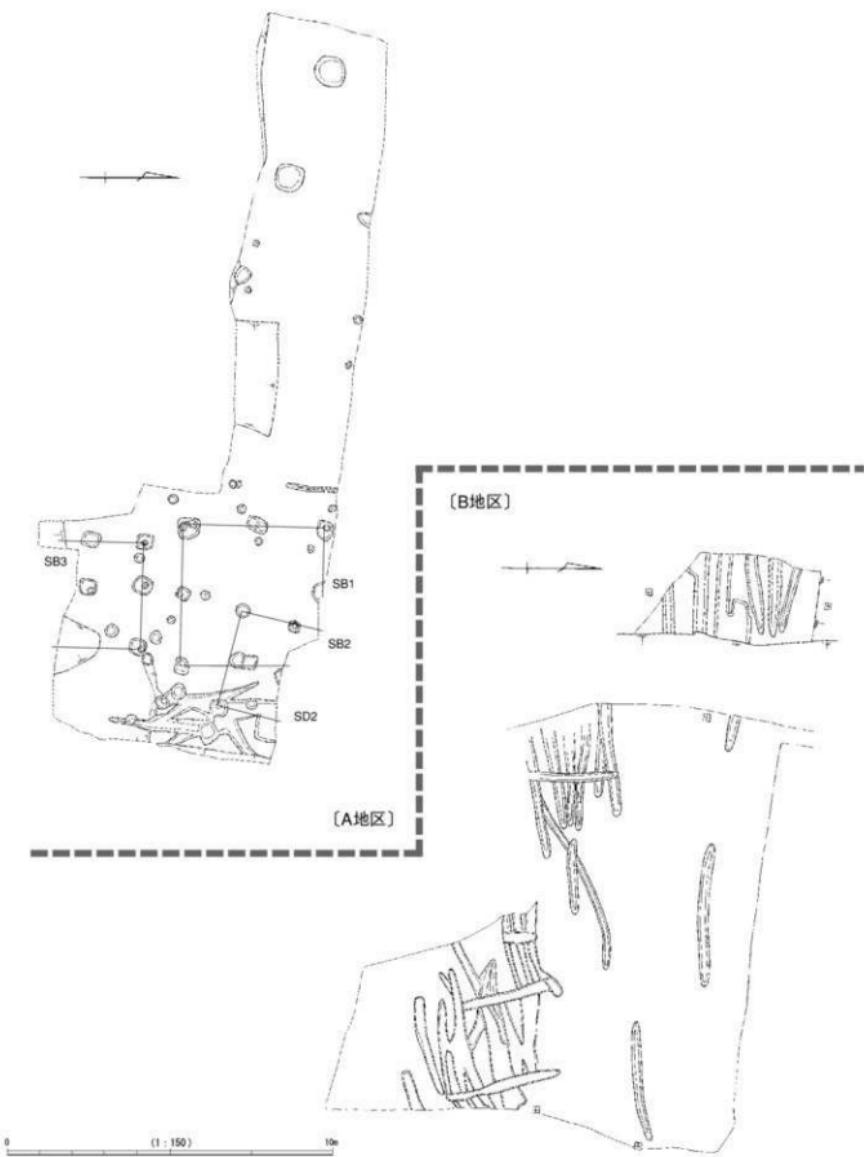
調査区の基本層序は、上部に造成土や耕土、床土が存在し、続いて腐食土の混じる暗褐色粘質土が堆積する。その下層には暗灰色粗砂から成る包含層が存在しており、その直下に存在する平安時代の造構面は粗砂の混じる灰褐色砂で形成される。なお、平安時代の造構面より下位には、河川の氾濫により堆積した灰色粗砂や腐植土の混じる灰褐色粘土が厚く堆積し、その下層には弥生土器を包含する暗褐色粘質土層、さらに、その直下には灰白色シルトから成る造構面を確認できるが、用水機場工事の掘削が暗褐色粘質土層まで及ばない設計であったため、発掘調査等の保護措置は行っていない。



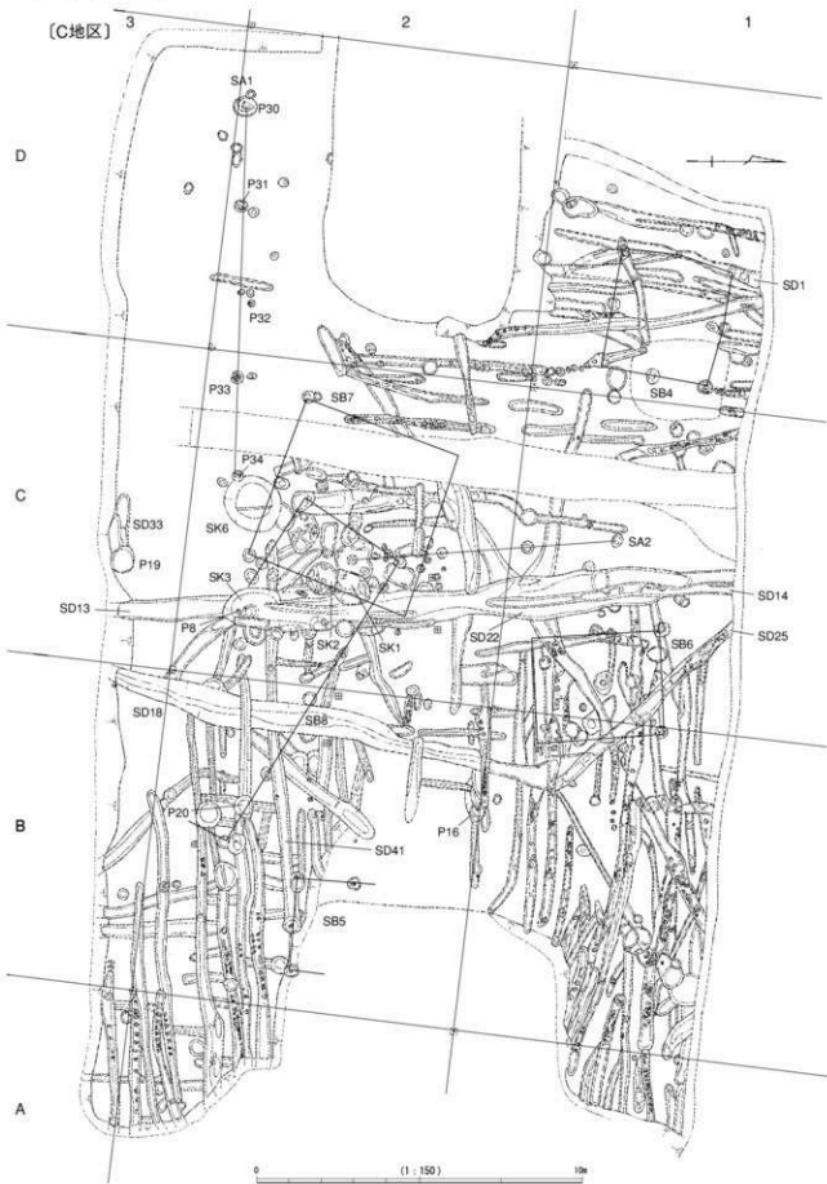
第1図 調査区位置図 (S=1/2,000)



第2図 調査区全体図 (S=1/300)



第3図 A・B地区 遺構配置図 (S=1/150)



第4図 C地区 造構配置図、グリッド配置図 (S=1/150)

2. 調査区の区分とグリッドの設定

春木ハチノタ遺跡の発掘調査等保護措置は、平成17年12月19日実施の工事立会箇所（A地区）、平成18年2月21日実施の工事立会箇所（B地区）、平成18年11月8日～12月21日に実施した発掘調査箇所（C地区：面積550m²）の3地区に分けられる（第1図）。

グリッドは発掘調査を実施したC地区のみに設定した（第4図）。調査区の北東に設定した任意の点を起点にして、調査区形状に合わせた10m方眼をC地区全体に適用し、南北方向に算用数字で北から1～3、東西方向にアルファベット大文字で東からA～Dの番号を付し、その交点は「A 1」のように標記した杭で明示した。また、各グリッドの呼称は、その北東隅に位置する杭名と定めた。遺構図の作成や包含層出土遺物の取り上げは、このグリッドを基準にして行っている。

座標との対応については、中能登農林総合事務所の協力により、県営は場整備事業で設置した測量標を使用して各グリッド杭の座標を求めており。また、A地区とB地区については、C地区と同様の方法により調査区内に設定した任意の点に座標を求めており。

第2節 遺構と遺物

遺構は掘立柱建物8棟、井戸1基、土坑6基、板塀2条、ピット、溝などを検出した。遺構の分布は、A地区東側からC地区北西部及びC地区中央付近に掘立柱建物の集中がみられ、それらの一部はC地区中央を南北に横断する区画溝（SD13・22）や、区画溝西側とC地区南西部で検出した板塀（SA1・2）により区画されている。また、B・C地区にはB地区北部とC地区南西部を除くほぼ全面に耕作溝が確認できる。耕作溝は複数方向のものが重複していることから、居住域の周辺には複数時期の耕作地が広がっていた可能性が高い。遺構はA地区中央から西側、B地区北部、C地区南西部で急激に減少しており、旧河道に沿って形成された南東から北西にのびる細長い集落域を想定できる。

以下、遺構種別ごとに特徴的なものを抽出して説明を行う。なお、A・B地区とC地区は調査等の実施年度や機関が異なっていることから、一部の遺構番号に重複が認められる。そのため、C地区で検出した遺構については、掘立柱建物を除き遺構名の前にグリッド名を付することで区別を行う。

〔掘立柱建物〕（遺構：第5～9図、遺物：第12・14図）

掘立柱建物は8棟を復元したが、現地調査中に確定したものは皆無であるため、土層断面等の記録は残されていない。あくまでも柱根の残存、柱穴の配置や深さなどを根拠にして机上で復元したものであり、調査区内には復元に用いた柱穴以外にも柱根の残るピットが複数存在することから、本来の掘立柱建物数はさらに多くなる可能性が高い。

S B 1〔掘立柱建物1〕（第5図）

A地区東側で検出した梁間2間（4.3m）×桁行2間（4.45m）で、鋼柱構造の掘立柱建物である。床面積は19.14m²を測り、柱間隔は梁行2.1～2.2m、桁行2.1～2.35mと両方共に類似する数値を示す。柱穴は隅丸長方形を呈するものが多く、建物の北西隅に位置するP14で長軸60cm、短軸50cm、深さ26cmを測る。P14掘方などに残された痕跡からは、直径18cm前後の柱が設置されていたことが推測される。建物の主軸はほぼ北方向を示し、建物西側には建物主軸とほぼ一致する方向に掘削された検出長1.59m、幅14cm、深さ5cmの溝が認められ、この建物に付属する雨落ち溝になる可能性が高い。

SB1の柱穴からは第12図1の須恵器無台杯（P4）の他、灯明痕の残る須恵器杯などが出土している。

S B 2 〔掘立柱建物 2〕（第5図）

A地区東端で検出した梁間2間（2.95m）×桁行1間（1.7m）以上で、総柱構造の掘立柱建物である。柱間隔は梁行1.47～1.48m、桁行1.7mを測り、桁行の柱間寸法が長い特徴を示す。柱穴は隅丸長方形と不整円形を呈するものが存在し、建物南東隅に位置するP1で長軸56cm、短軸51cm、深さ45cmを測る。P1・11の掘方底などに残された痕跡からは、直径16～19cmの柱が設置されていたことが推測される。建物主軸は北から東に13度振る方向を示す。P3がSB1のP4に切り込まれており、P1がSD2を切り込んでいることから、SD2よりも新しく、SB1より古い時期に建てられたことが窺える。SB2のP3からは第12図2の須恵器無台杯などが出土した。時期は9世紀前半頃と考えられる。

S B 3 〔掘立柱建物 3〕（第6図）

A地区東側で検出した梁間2間（3.3m）×桁行1間（1.7m）以上で、総柱構造の掘立柱建物である。柱間隔は梁行1.3m、2.0m、桁行1.7mを測り、梁行内と桁行でそれぞれ柱間寸法が異なっている。西側に庇を伴う建物であった可能性も考えられるが、建物北西隅に位置するP8には長軸21.6cmの柱根（第14図31、クリ）が残存しており、他の柱穴掘方底にはそれと同程度か下回る規模の痕跡が認められることから、西側部分を含めて身舎と考えている。柱穴は隅丸方形を呈しており、P8で長軸53cm、短軸45cm、深さ20cmを測る。建物の主軸はほぼ北方向であり、SB1と主軸を揃えていることから、SB1とSB3はほぼ同時期に存在していた可能性が高い。

SB3ではP7から土師器小片が出土するに留まり、詳細時期を判断することは困難である。

S B 4 〔掘立柱建物 4〕（第6図）

C地区北西側で検出した梁間2間（3.65m）×桁行2間（3.5m）で、側柱構造の掘立柱建物である。床面積は12.8m²を測り、柱間隔は梁行・桁行共に1.8mのほぼ同間隔で柱が設置されている。柱穴は不整円・梢円形を呈するものが多く、建物の北東隅に位置するD1区P36で長軸49cm、短軸41cm、深さ32cmを測り、掘方には長軸13cmの柱根が設置されている。建物主軸は北から東に13度振る方向であり、SB2とはほぼ同じ主軸方向を示す。D1区P2が南北方向の耕作溝（D1区SD4）を切り込んでいることから、SB4は耕作溝を南北方向に残す耕作地より新しい時期に建てられたことが窺える。

SB4の柱穴からは出土遺物がほとんど認められないため、詳細時期は不明である。

S B 5 〔掘立柱建物 5〕（第7図）

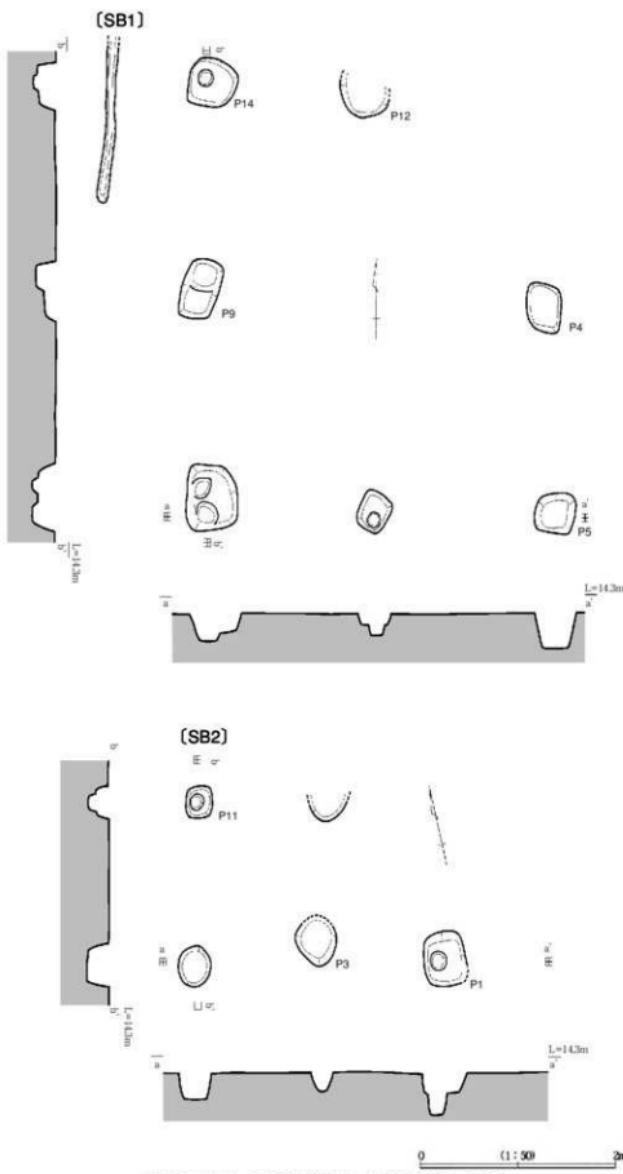
C地区東側で検出した梁間2間（2.9m）×桁行1間（1.75m）以上で、側柱構造の掘立柱建物である。柱の間隔は梁行1.45m、桁行1.75mを測り、桁行の柱間寸法が長い特徴を示す。柱穴は不整円・梢円形を呈しており、建物南東隅に位置するB2区P26で長軸45cm、短軸38cm、深さ64cmを測る。検出した柱穴全てに柱根（クリ）が残存しており、B2区P28には長軸12.8cmの柱根（第14図33）が残存している。建物主軸は北から東に13度振る方向を示す。B2区P27は東西方向の耕作溝（B2区SD41）に切り込まれることから、SB5は耕作溝を南北方向に残す耕作地より古いことが窺える。

SB5では出土遺物がほとんど見られないことから、詳細時期は不明瞭である。

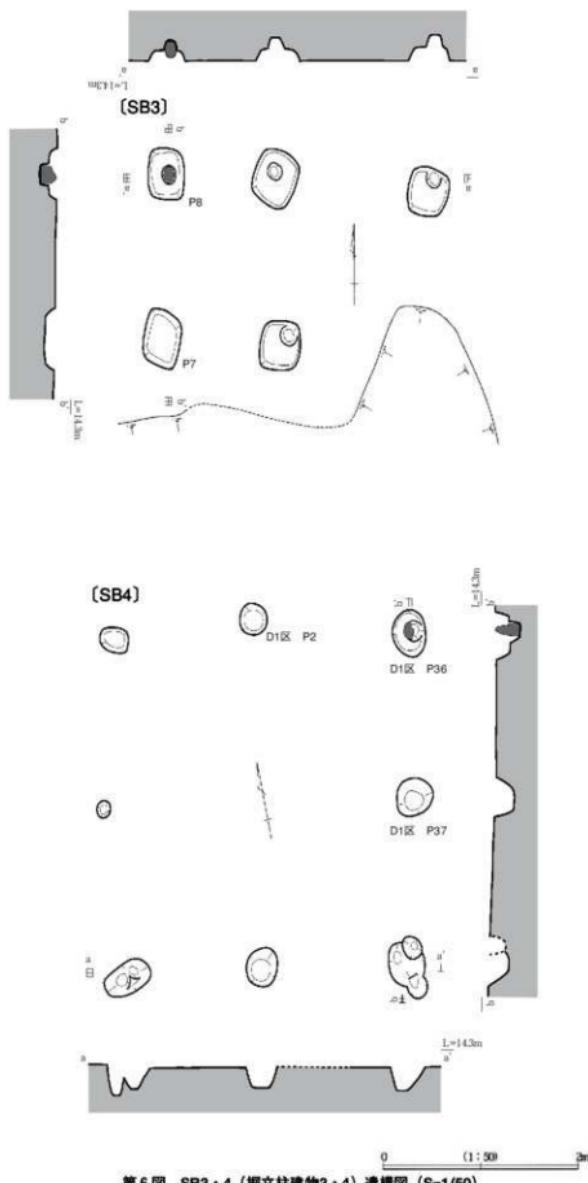
S B 6 〔掘立柱建物 6〕（第7図）

C地区北側中央で検出した梁間2間（3.15m）×桁行2間（3.95m）で、総柱構造の掘立柱建物である。床面積は12.44m²を測り、柱間隔は梁行1.57m前後、桁行1.97m前後で、桁行の柱間寸法が長い特徴を示す。柱穴は不整円形を呈するものが多く、建物の北東隅に位置するB1区P39で長軸40cm、短軸38cm、深さ20cmを測り、C1区P10掘方内には柱根が残存していた。建物主軸はほぼ北方向を示す。B1区P39は東西方向の耕作溝を切り込んで設置している。

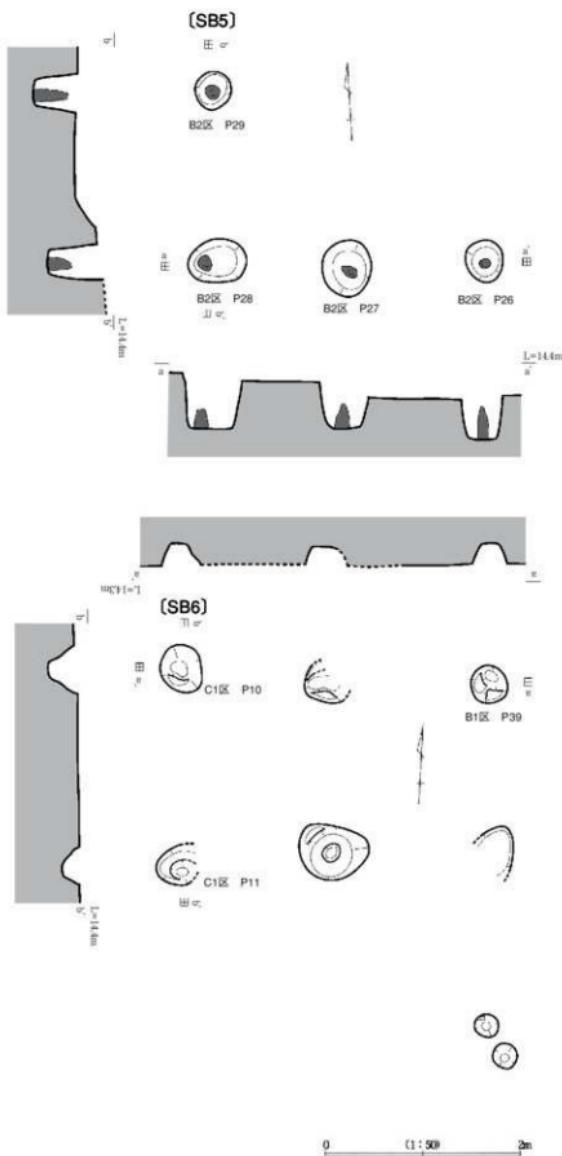
SB6では柱穴から須恵・土師器小片が出土するに留まり、詳細時期を判断することは困難である。



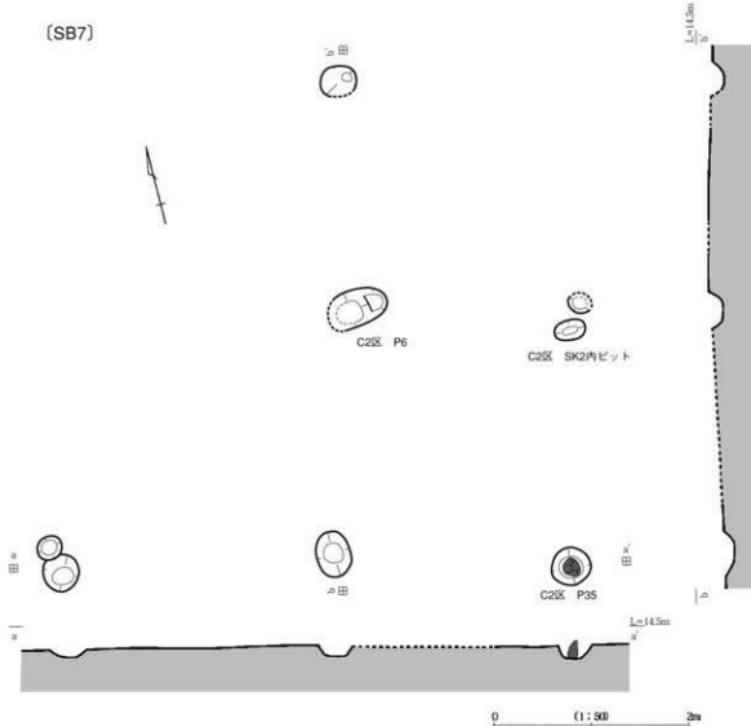
第5図 SB1・2 (据立柱建物1・2) 遺構図 (S=1/50)



第6図 SB3・4（据立柱建物3・4）遺構図（S=1/50）



第7図 SB5・6（据立柱建物5・6）遺構図 (S=1/50)



第8図 SB7（掘立柱建物7）遺構図（S=1/50）

SB7【掘立柱建物7】（第8図）

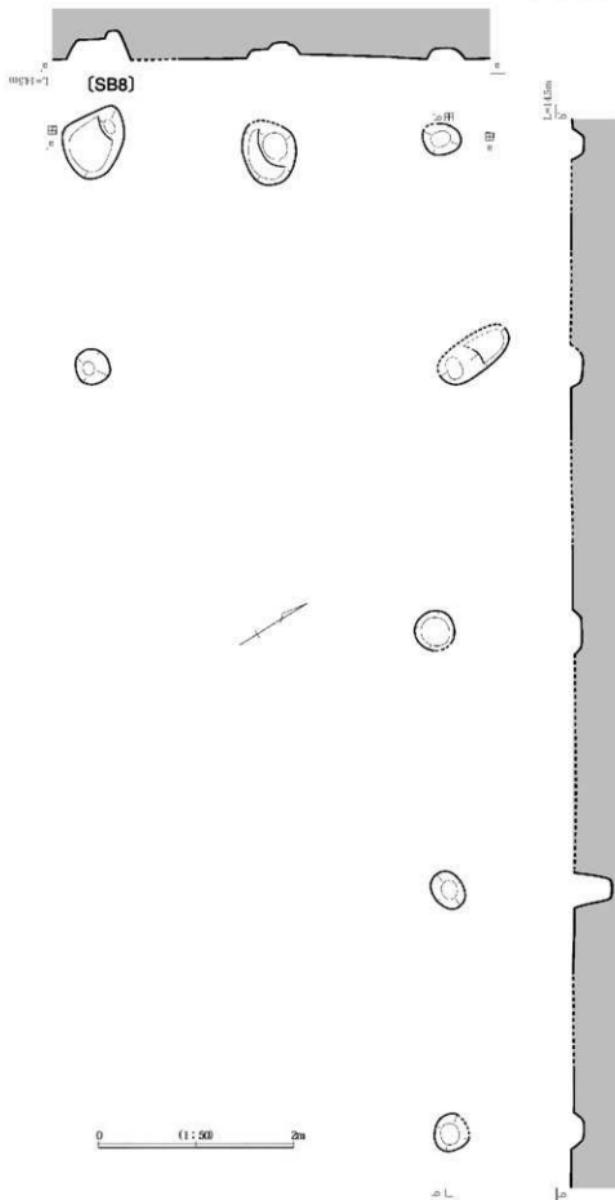
C地区北側中央で検出した梁間2間(5.25m)×桁行2間(5.05m)で、総柱構造の掘立柱建物である。床面積は26.5m²を測り、柱間隔は梁行2.6m前後、桁行2.35、2.7mを測り、桁行の柱間寸法が不揃いな特徴を示す。柱穴は不整円・楕円形を呈し、建物南東隅に位置するC2区P35で長軸41cm、短軸40cm、深さ11cmを測り、掘方内には柱根が残存している。建物の主軸は北から東に21度振る方向を示す。

SB7ではC2区P6から土師器小片のみが出土しており、詳細時期を判断することは困難である。

SB8【掘立柱建物8】（第9図）

C地区南側中央で検出した梁間2間(3.55m)×桁行4間(10.3m)で、側柱構造の掘立柱建物である。床面積は36.6m²を測り、調査区内で最大規模を誇る。柱間隔は梁行1.77m前後、桁行2.47~2.63mで、桁行の柱間寸法が長く不揃いな特徴を示す。柱穴は不整円・楕円形を呈し、建物東端に位置する柱穴で長軸40cm、短軸36cm、深さ9cmを測る。建物主軸は北から西に58度振る方向で、その他建物の主軸と大きく異なっている。SB7のC2区P6やSD18に切り込まれる柱穴が存在することから、SB8はSB7やSD18より古い時期に設置されたことが窺える。

SB8では出土遺物がほとんど見られないことから、詳細時期は不明瞭である。



第9図 SB8(柱立柱建物8)遺構図(S=1/50)....

〔井 戸〕(遺構: 第10図、遺物: 第12・14図)

C2区SK6 (第10図)

C地区南側中央付近で検出した井戸で、平面形態は不整円形を呈し、長軸1.85m、短軸1.6mを測る。深さ90cmに達したところで、湧水が著しく壁面の崩壊が始まったため、底までの掘削は行っていない。覆土下層からは曲物側板片(第14図38)が出土しており、井戸機能時には曲物を井戸側として用い、井戸廃絶に伴い井戸側を抜き取る際に破損したものと考えられる。

土器は第12図5の須恵器無台椀、44の製塙土器が出土し、時期は10世紀前～後半頃と考えられる。

〔土 坑〕(遺構: 第10図、遺物: 第12図)

土坑は6基を検出した。分布状況はC地区中央南側に集中し、B2区SK7だけがC地区南東部に単独で分布している。以下、特徴的なものを抽出して説明を行う。

C2区SK1・2 (第10図)

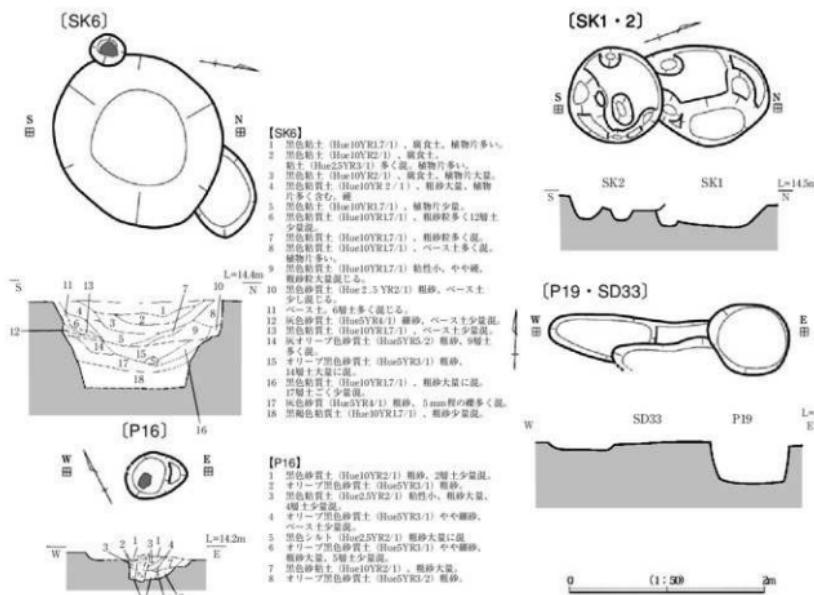
C2区SK1は平面形態が不整梢円形を呈し、短軸1.01m、深さ21cm、C2区SK2は円形を呈し、長軸0.99m、短軸0.96m、深さは最深部で24cmを測る。両土坑共に上面で炭や焼土が多く認められる。

C2区SK2からは第12図3の須恵器短頸壺が出土しているが、切り合ひ関係から判断すれば混入である可能性が高い。C2区SK1からは須恵器片のみが出土しており、詳細時期は不明である。

C2区SK3 (第4図)

C2区SK3は平面形態が不整梢円形を呈し、長軸1.8m、短軸1.3m、深さは23cmを測る。C1・2・3区SD13や東西方向の耕作溝(B・C2区SD41)を切り込み、C2区P8、SD34に切り込まれている。

C2区SK3からは第12図4の土器無台椀が出土しており、時期は10世紀前半頃と考えられる。



第10図 井戸及び主要土坑、ピット遺構図 (S=1/50)

〔板 墓〕(遺構: 第4図、遺物: 第14図)

C・D2区SA1 (第4図)

C地区南西部で検出した板塚で、東西方向に5基のピットが列をなしている。検出長は11.4mで、ピット間寸法は3.0mと2.7mのものが認められる。ピットは不整円形を呈し、西端に位置するD2区P30で長軸70cm、短軸60cm、深さ45cmを測る。ピット内には支柱根が残っているものが多く存在し、支柱根にはクリの半截材が使われている。東端のC2区P34はC2区SK6を切り込んで設置されており、C2区SK6の埋没後にC・D2区SA1が設置されたことを窺える。また、各ピットの北側には小ピットが存在し、C・D2区SA1を支え補強する材が設置されていたか、作り替えが行われたことを示している。

C・D2区SA1のピットからは出土遺物がほとんどみられないことから、詳細時期は不明である。

C1・2区SA2 (第4図)

C地区中央部で検出した板塚で、C1・2・3区SD13・22西側と並行する南北方向に4基のピットが列をなしている。検出長は8.3mで、ピット間寸法は約2.7mを測る。ピットは不整円・楕円形を呈し、北端に位置するピットで、長軸40cm、短軸30cm、深さ12cmを測る。

C1・2区SA2のピットからは出土遺物がほとんど見られることから、詳細時期は不明である。

〔ビット〕(遺構: 第10図、遺物: 第12・14図)

ピットは遺構番号を付したもので55基を検出した。分布状況はA地区東側及び南西部を除くC地区に集中している。以下、特徴的なものを抽出して説明を行う。

C2区P8 (第4図)

C地区中央南側で検出したピットで、平面形態は楕円形を呈する。長軸は残存部分で0.46m、短軸0.3m、深さ18cmを測り、C2区SK3を切り込んで設置されている。

覆土からは第12図8の土師器皿や9の土師器有台椀が出土し、時期は11世紀前半頃と考えられる。

B1・2区P16 (第10図)

C地区東側中央で検出したピットで、平面形態は不整楕円形を呈する。長軸0.62m、短軸0.46m、深さ26cmを測り、掘方内には直径11.3cmの柱根(第14図37、クリ)が残存している。東西方向の耕作溝を切り込んで設置されているが、出土遺物がほとんどみられないため、詳細時期は不明である。

C3区P19・SD33 (第10図)

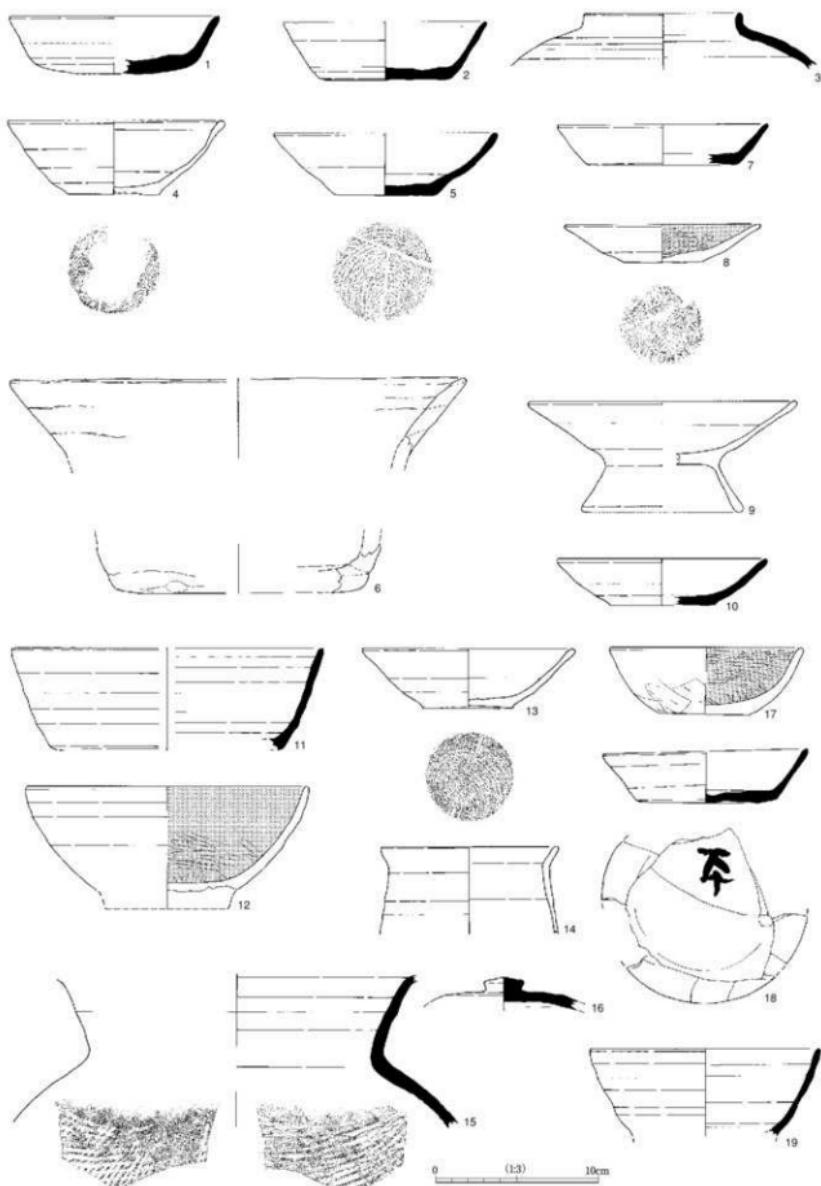
C地区中央南側で検出したピットで、西側にC3区SD33を付属する。平面形態は不整円形を呈し、長軸0.85m、短軸0.73m、深さ41cmを測る。覆土からは細骨片や第14図39・40の板などが出土していることや居住域の縁辺部に位置することから、調査担当者は墓である可能性を指摘している。

C3区P19からは第12図11の須恵器有台杯、12の土師器有台椀、13の土師器無台椀、14の土師器小型甕などが出土しており、時期は11世紀前半頃と考えられる。

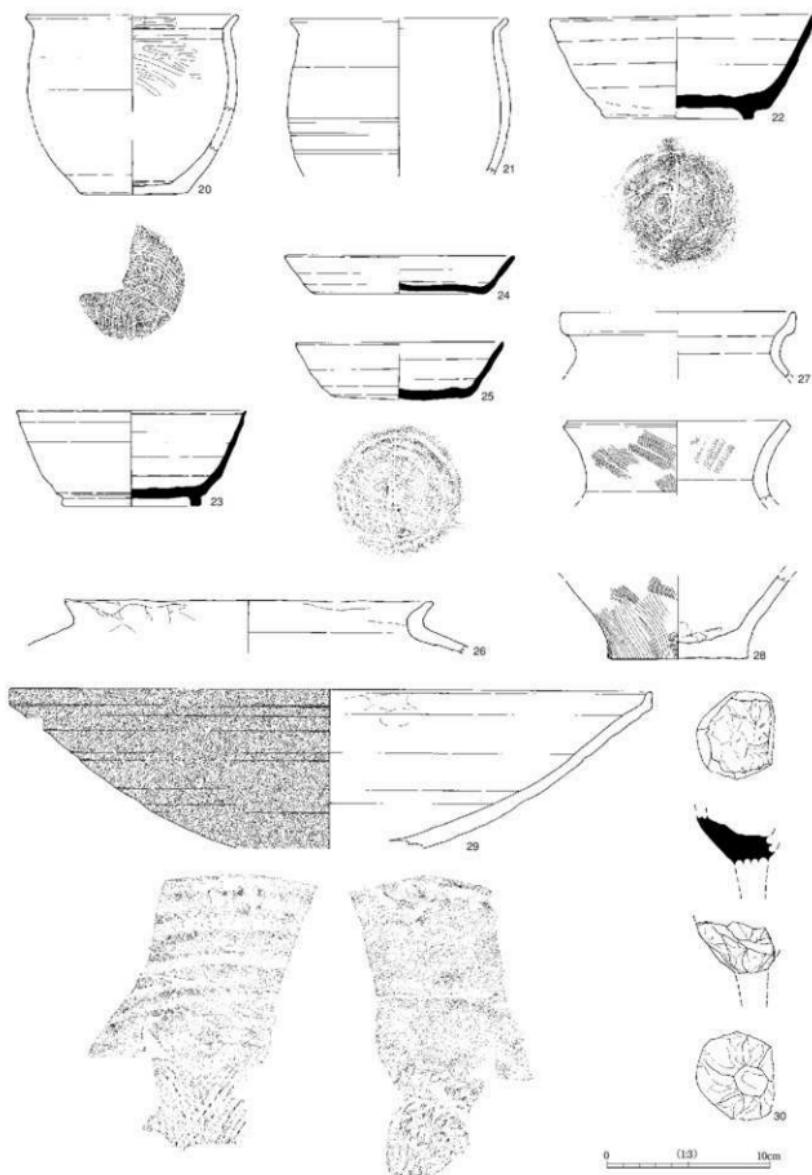


第11図 区画溝 (SD18, SD13・22) 土層断面図 (S=1/40)

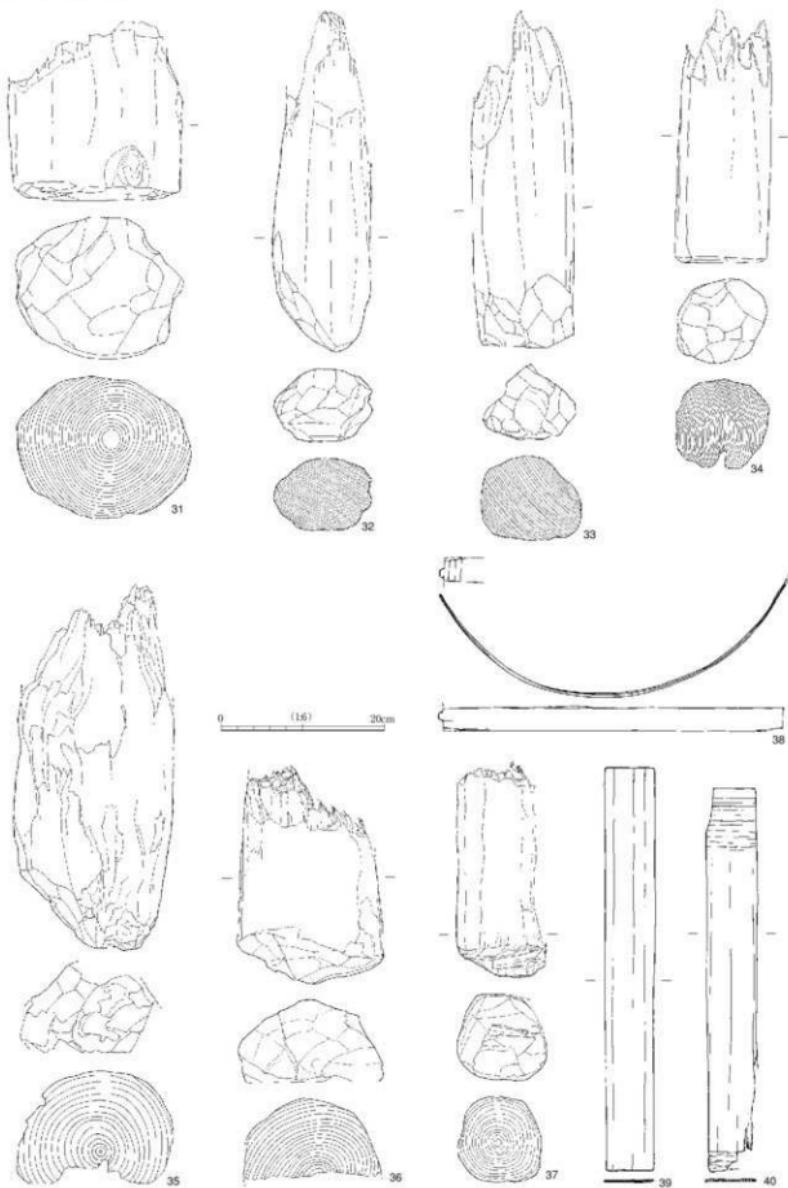
第2節 遺構と遺物



第12図 出土遺物実測図〔土器〕(S=1/3)



第13図 出土遺物実測図2〔土器・土製品〕(S=1/3)



第14図 出土遺物実測図3 [木製品] (S=1/6)

〔溝〕(遺構: 第3・4・11図、遺物: 第12・13図)

区画溝(C1・2・3区SD13・22、B1・2・3区SD18ほか)を含め遺構番号を付したもので47条を検出した。区画溝以外はほとんどが耕作溝と考えられ、大きく東西方向のものと南北方向のものに区分が可能である。先後関係は東西方向の溝が南北方向の溝を切り込んで掘削されているものが多い。

以下、特徴的なものを抽出して説明を行う。

SD2(第4図)

A地区東端で検出した幅0.5m、深さ8cmを測る溝で、SB2のP1に切り込まれる。複数の溝や土坑状の遺構が切りあっている可能性が高く、北端は平面形態が不整方形を呈している。

覆土からは第13図20の土師器小型甕などが出土している。

D1区SD1(第4図)

C地区北西部で検出した溝で、最大幅0.48m、深さ10cmを測る。SB4の柱穴に切り込まれており、溝の底面は南から北に向かって低く傾斜している。

覆土からは第12図15の須恵器甕が出土しているが、詳細な時期は不明である。

C1・2・3区SD13・22(第4・11図)

C地区中央で検出した溝で、調査区を南北に横断する区画溝である。土層断面図を作成した箇所で、幅1.05m、深さ29cmを測り、切り合い関係や土層からは同一方向・箇所で複数の溝が重複していることが明瞭である。そのため、溝の幅や深さは一定していないが、およそ溝の底面は南から北に向かって低く傾斜している。溝の一部はC2区SK1・2・3に切り込まれている。

C1・2・3区SD13・22からは須恵器無台杯・有台杯、土師器無台杯・皿・甕などが出土している。

C1・2区SD14(第4図)

C地区中央北側で検出した溝で、最大幅0.46m、深さ20cmを測り、溝の底面は南から北に向かって低く傾斜している。形態・規模は南北方向の耕作溝と類似するが、切り合い関係から判断すれば、区画溝(C1・2・3区SD13・22)の最終段階である可能性が高い。また、C地区C2区にはほぼ同じ方向・規模の溝が存在しており、連続する溝となる可能性が高い。

覆土からは第13図21の土師器甕の他、須恵器無台杯・蓋、土師器有台杯が出土しているが、切り合い関係ではこの溝が遺跡最終段階の遺構であることが判断されるため、出土土器の多くはC1・2・3区SD13・22からの混入品である可能性が高い。

B1・2・3区SD18(第4・11図)

C地区区中央で検出した区画溝で、北端はB・C1区SD9との合流箇所で途切れている。南半部の幅が広く、最大幅12m、深さ13cmを測り、溝の底面は南から北に向かって低く傾斜している。

B1・2・3区SD18からは第12図17の土師器無台椀や18の須恵器無台杯が出土している。18は底部外面に本の異体字である「本」と判読できる墨書が認められる。

B・C1区SD25(第4図)

C地区中央北側で検出した溝で、最大幅0.5m、深さ10cmを測る。東西方向の耕作溝を切り込んでおり、溝の底面には径0.26～0.5mの小ピットが複数確認できることから、板塀のような施設が設置されていた可能性も指摘できる。覆土からは土師器杯・甕が出土しているが、詳細時期は不明である。

〔遺構外出土器・土製品〕(第13図)

包含層や表土などから採集された土器・土製品は、弥生時代中～後期と平安時代のものにはば限定される。特筆されるものとしては、第13図30の土馬(陶馬)があげられる。尻にあたる部分の破片で、胴部を中空に製作している。三重県歌野遺跡や滋賀県手原遺跡などに類例が認められる。

第3節 まとめ

発掘調査の結果、春木ハチノタ遺跡は標高14m前後を測る自然堤防状の微高地に立地する平安時代の集落跡であることが明らかになった。以下、集落存続時期を4段階に区分し、その変遷を概説する。

〔I段階（8世紀後半頃）〕 C地区北西から南東部に南北方向の耕作溝が確認できる段階である。耕作溝の分布からは、北西部から中央付近及び南東部にまとまりを見出すことが可能で、複数の生産単位の存在を推測させる。なお、この段階の居住域は調査区の北側に存在していた可能性が高い。

〔II段階（9世紀前半～後半）〕 調査区内に掘立柱建物などで構成される明確な居住域が形成される段階である。この段階の主要な遺構としては、SB1～5、C・D2区SA2、C1・2・3区SD13・22、東西方向の耕作溝などがあげられる。掘立柱建物はA地区東側からC地区南西部に集中してみられ、D2区SA2及びC1・2・3区SD13・22を境にして、東側には耕作溝から成る生産域が広がる。掘立柱建物の切り合い関係などから判断すれば、この段階は更に2時期に区分することが可能で、まず、SB2・4やSB5が建てられ、それら建物の廃絶後にSB1・3が設置されると共に、東側が生産域として規定された可能性が高い。第12図18の墨書き土器や口縁に灯明痕跡がみられる須恵器杯などが存在することから、この段階を平安時代における春木ハチノタ集落の最盛期として位置付けることも可能だろう。なお、第13図30の土馬（陶馬）は、製作技法などから判断すれば、この段階以前に帰属する可能性が高く、周辺に存在する須恵器窯跡群との関連を窺わせる。

〔III段階（10世紀前半～後半）〕 前段階の区画を放棄し、別地点に居住域が形成される段階である。この時期の主要な遺構としては、SB6・8、C2区SK6、C2区SK1～3などがあげられる。掘立柱建物はC地区中央に大型建物（SB8）と小型柱建物（SB6）が設置され、前者は居住的機能、後者は倉庫的機能を推測させる。SB8には付随して井戸（C2区SK6）が確認でき、C2区SK1・2はSB8の竈か炉の下部施設であったことが推定できる。また、この建物は中能登町武部ショウウブダ遺跡の第7号掘立柱建物（10世紀前半）と平面形態や規模が類似しており（岩瀬2002）、SB8がこの段階に帰属する根拠にもなろう。なお、この段階の生産域はC地区東端部からB地区に広がっていた可能性が高い。

〔IV段階（11世紀前半）〕 新たに板塀（C・D2区SA1）と区画溝（B1・2・3区SD18）から成る居住域が形成される段階である。この時期の主要遺構としては、SB7、C3区P19・SD33、C・D2区SA1、B1・2・3区SD18、B・C1区SD25などがあげられる。居住域の場所は前段階を踏襲し、板塀や区画溝などで三方を区画する居住域を形成している。居住域の南側には墓の可能性が指摘されるC3区P19・SD33が認められる。この段階の後半になると、調査区内から建物などの居住施設が消滅し、C地区東側に小規模な東西方向の耕作溝が認められることから、居住域の一部が生産域に転換される時期を経て、集落が衰退していったものと推測される。

引用・参考文献

折戸靖幸・木立雅朗1988「能登地域の須恵器生産」『シンボジウム北陸古代土器研究の現状と課題』 石川考古学研究会・北陸古代時研究会

金子裕之1991「律令祭祀遺物集成」「律令制祭祀論考」 塙書房

出越茂和1994「加賀におけるクロコ土師器の出現と展開」『中近世土器の基礎研究X』 日本中世土器研究会

川畑 誠1995「石川県内の古代建物に関する基礎的研究－掘立柱建物の平面プランを中心にして－」『年報6』

社団法人石川県埋蔵文化財保存協会

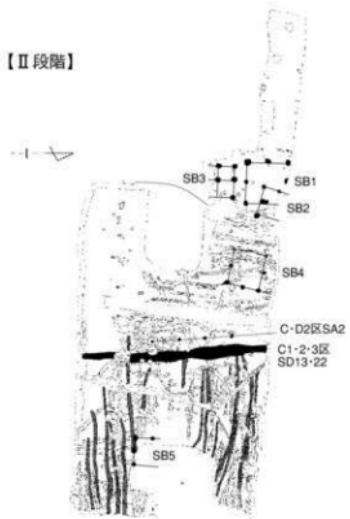
四柳嘉章ほか1995「ヤトン谷内遺跡」 石川県中島町教育委員会

岩瀬由美2002「鹿島町武部ショウウブダ遺跡」 石川県教育委員会・財团法人石川県埋蔵文化財センター

【I段階】



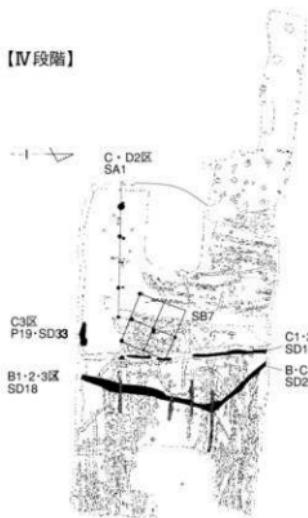
【II段階】



【III段階】



【IV段階】



第15図 A・C地区 主要遺構変遷図 (S=1/500)

第3節 まとめ

第1表 出土土器・土製品観察表

件名	調査年	区	江 戸 世 代	種 類	長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	底面 (cm)	施 工	焼 成	施 工 (PC)	焼 成 度 (%)	残 存 状 況	参考	実 番 号
第125 号	05	A	S811 PM	筒形壺	12.6	3.5	0.5	丸底	不直 な点	直高・長石 (M) 定形	ロコロナガ ナナ	110%~112%	底底付輪ハラ切り直	D16	
2	05	A	S821 P02	筒形壺	12.2	3.5	0.5	W21	直高・長石 (S) 多い	ロコロナガ	110%~112%	底底付輪ハラ切り直	D17		
3	06	C	C24	筒形壺	8.4	5.2	0.5	丸底	直高	直高・長石 (S) 多い	ロコロナガ	110%~112%	底底付輪ハラ切り直	D18	
4	06	C	S82	筒形壺	12.9	4.6	0.6	W210	直高	直高・長石 (S) 多い	ロコロナガ	110%~112%	底底付輪ハラ切り直	D19	
5	06	C	S83 F M	筒形壺	12.4	3.9	0.5	W210	直高	直高・長石 (S) 多い	ロコロナガ	110%~112%	底底付輪ハラ切り直	D20	
6	06	C	C25	筒形壺	27.7	0.50	0.5	丸底	直高	直高・長石 (S) 多い	ロコロナガ	110%~112%	底底付輪ハラ切り直	D21	
7	06	C	C26	筒形壺	12.6	2.5	0.5	直高	直高	直高・長石 (S) 多い	ロコロナガ	110%~112%	底底付輪ハラ切り直	D22	
8	06	C	C27	筒形壺	11.6	3.2	0.5	直高	直高	直高	ロコロナガ	110%~112%	底底付輪ハラ切り直	D23	
9	06	C	C28	筒形壺	10.5	0.7	0.5	直高	直高	直高	ロコロナガ ナナ	110%~112%	底底付輪ハラ切り直	D24	
10	06	C	P20	筒形壺	12.6	2.6	0.4	直高	直高	直高・長石 (S) 多い	ロコロナガ	110%~112%	底底付輪ハラ切り直	D25	
11	06	C	P21	筒形壺	18.7	0.50	0.5	直高	直高	直高・長石 (M) 多い	ロコロナガ	110%~112%	底底付輪ハラ切り直	D26	
12	06	C	P22	筒形壺	17.0	0.50	0.5	直高	直高	直高・長石 (S) 多い	ロコロナガ	110%~112%	底底付輪ハラ切り直	D27	
13	06	C	P23	筒形壺	12.8	3.6	0.5	W210	直高	直高	ロコロナガ ナナ	110%~112%	底底付輪ハラ切り直	D28	
14	06	C	P24	筒形壺	18.7	0.50	0.5	直高	直高	直高・長石 (S) 多い	ロコロナガ	110%~112%	底底付輪ハラ切り直	D29	
15	06	C	P25	筒形壺	18.0	0.50	0.5	直高	直高	直高・長石 (S) 多い	ロコロナガ ナナ	110%~112%	底底付輪ハラ切り直	D30	
16	06	C	S206	筒形壺	12.0	0.50	0.5	直高	直高	直高・長石 (S) 多い	ロコロナガ	110%~112%	底底付輪ハラ切り直	D31	
17	06	C	B25	筒形壺	11.5	4.3	0.5	W210	直高	直高	ロコロナガ ナナ	110%~112%	底底付輪ハラ切り直	D32	
18	06	C	S208	筒形壺	12.3	3.3	0.5	W210	直高	直高・長石 (S) 多い	ロコロナガ ナナ	110%~112%	底底付輪ハラ切り直	D33	
19	06	C	S209	筒形壺	12.8	3.0	0.5	直高	直高	直高・長石 (M) 多い	ロコロナガ	110%~112%	底底付輪ハラ切り直	D34	
20	06	A	S2020 筒形壺	小切妻	12.6	0.50	0.5	直高	直高	直高・長石 (M) 多い	ロコロナガ ナナ	110%~112%	底底付輪ハラ切り直	D35	
21	06	C	C29	小切妻	12.0	0.50	0.5	直高	直高	直高・長石 (M) 多い	ロコロナガ ナナ	110%~112%	底底付輪ハラ切り直	D36	
22	06	C	C30	小切妻	10.1	0.4	0.5	直高	直高	直高・長石 (S) 定形	ロコロナガ ナナ	110%~112%	底底付輪ハラ切り直	D37	
23	06	C	C31	小切妻	12.8	3.8	0.5	直高	直高	直高・長石 (M) 定形	ロコロナガ ナナ	110%~112%	底底付輪ハラ切り直	D38	
24	06	C	C32	小切妻	12.8	3.3	0.6	直高	直高	直高・長石 (M) 定形	ロコロナガ ナナ	110%~112%	底底付輪ハラ切り直	D39	
25	06	C	C33	小切妻	12.5	3.6	0.4	直高	直高	直高・長石 (M) 定形	ロコロナガ ナナ	110%~112%	底底付輪ハラ切り直	D40	
26	06	C	D18	筒形壺	21.3	0.50	0.5	直高	直高	直高	ロコロナガ ナナ	110%~112%	底底付輪ハラ切り直	D41	
27	06	C	直土	直土	14.0	14.0	0.5	直高	直高	直高・長石 (S) 多い	ロコロナガ	110%~112%	底底付輪ハラ切り直	D42	
28	06	C	直土	直土	12.3	0.50	0.5	直高	直高	直高・長石 (M) 定形	ロコロナガ ナナ	110%~112%	底底付輪ハラ切り直	D43	
29	06	C	直土	直土	30.9	0.97	0.5	直高	直高	直高・長石 (M) 多い	ロコロナガ ナナ	110%~112%	底底付輪ハラ切り直	D44	
30	06	C	直土	直土	12.0	0.50	0.5	直高	直高	直高・長石 (S) 多い	ロコロナガ ナナ	110%~112%	底底付輪ハラ切り直	D45	

第2表 出土土器・土製品観察表

調査NO.	調査年	区	出土遺物		目	目付付	器種	最大径 (cm)	底大径 (cm)	最大厚 (cm)	断面	参考	実 番 号
第140 号 31	05	-	S83		P16		柱板	22.0	21.6	17.7	クリ	心持丸材	木-2
32	06	E25	S85		P26	061229	柱板	42.9	12.5	.91	クリ	扇形材	木-3
33	06	E25	S85		P28		柱板	41.8	12.8	1.1	クリ	扇形材	木-4
34	06	E25	S85		P29		柱板	31.3	11.8	10.5	クリ	扇形材	木-5
35	06	E2	S81		P30		柱板	45.0	24.6	13.8	クリ	心持丸材	木-6
36	06	C25	S81		P31		柱板	27.1	18.2	10.2	クリ	手筋材	木-7
37	06	E25	P16			061229	柱板	27.7	11.3	11.1	クリ	心持丸材	木-8
38	06	C25	S86		上崩	061208	島物	42.6	3.1	0.5	スギ	板目、内面にカビキ縫あり	木-9
39	06	C25	P19			061208	板	50.7	6.4	0.3	スギ	板目	木-10
40	06	C25	P19			061208	板	48.9	6.7	0.4	スギ	板目、表面にカビキ縫あり	木-11

第10章 総括

今回、大槻・春木遺跡群の発掘調査により、縄文時代～中世の各時代の遺構・遺物が確認されている。ここでは各時代・時期ごとに、遺跡群の変遷・消長を概略してみたい。

縄文時代

明確な縄文時代の遺構は確認していないが、大槻ブンゾ遺跡で石器が出土している。

弥生時代

大槻ブンゾ遺跡、大槻ヤマゾ遺跡、大槻キッチャマエダ遺跡、春木A・B遺跡から中期～終末期の土器、石器などが出土している。明確な居住施設は確認していないが、大槻ブンゾ遺跡の南側や大槻ヤマゾ遺跡の鞍部からは後期後半の土器がまとまって出土している。大槻ヤマゾ遺跡の鞍部2・3からは複数の有孔鉢と共に、建物の部材と考えられる木製品が並べられた状態で出土しており、廃棄の他に何らかの祭祀行為の可能性も考えている。後期後半以降の遺物量が多くなる状況は、他の邑知地溝帯西側丘陵裾の遺跡の状況とも一致するが、終末期～古墳時代初頭にかけての遺物量は少なく、顕著な活動痕跡は見られない。居住域は周辺の低丘陵上を中心に広がっていたと考えている。

古墳時代

大槻ブンゾ遺跡、大槻ヤマゾ遺跡、大槻キッチャマエダ遺跡から中期～後期にかけての土師器や須恵器、製塙土器、石製品などが出土している。どれも明確な居住施設は確認していないが、大槻ヤマゾ遺跡の鞍部からは5世紀後半の高杯や壺などの土師器と共に、小型のコップ状や類例の少ない台付鉢状の手づくね土器、緑色凝灰岩製有孔円盤などの石製模造品、漆塗り堅櫛などがまとまって出土しており、何らかの儀礼行為が行われていた可能性が高い。大槻ブンゾ遺跡からは5世紀末～6世紀前半の須恵器少量の他に、7世紀にかけての須恵器が多く出土しており、焼成不良や焼け歪みが認められるものも目立つことから、周辺の須恵器窯跡群と密接な関連を持つ集落であった可能性が高いと考えている。

奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺物は調査した全遺跡より出土している。大槻ブンゾ遺跡の下層の検出面からは掘立柱建物や堅穴建物を検出し、ピットや溝からは8世紀中頃～9世紀中頃の土師器、須恵器、製塙土器などが出土している。須恵器は口縁部や底部が意図的に打ち欠かれたもの、焼成前にヘラ記号が施されたものも目立つ。また、輪羽口と椀形鍛冶津の鉄滓が遺跡北側を中心に多く出土しており、一部鎌倉・室町時代に下るものもあるが、周辺に鍛冶場が存在していた可能性が高い。大槻ヤマゾ遺跡では、鞍部から8世紀後半～9世紀後半の土師器の他、須恵器が多量に出土しており、須恵器では「杉上」、「加比女」、「信上」、「徳」、「家？」、「炭」、「寺口」などの墨書き土器や転用硯、墨溜め、焼成前にヘラ記号が施されたものが目立つ。居住施設は確認されていないが、これら文字関係資料が集中して出土する状況は、寺院など一般的な集落とは性格を異にする遺跡の可能性も考えられる。大槻キッチャマエダ遺跡では、井戸や鞍部から8世紀の土師器、須恵器と共に刀子状の鉄製品が出土している。春木ハチノタ遺跡では、8世紀後半～11世紀前半頃にかけて存続した集落跡を確認し、変遷を4段階に区分している。I段階（8世紀後半）：複数の生産単位の存在を推測させる南北方向の耕作溝を確認。居住域は調査区の北側に存在していた可能性が高い。II段階（9世紀前半～後半）：掘立柱建物や柵列、区画溝などで構成される明確な居住域が形成される段階で、東側には東西方向の耕作溝からなる生産域が広がる。掘立柱建物の切り合いから、更に2時期に区分することが可能である。墨書き土

器や灯明痕跡が残る須恵器などから、集落の最盛期として位置付けられる。土馬（陶馬）もこの段階以前の可能性が高い。Ⅲ段階（10世紀前半～後半）：前段階の区画を放棄し、別地点に居住域が形成される段階で、掘立柱建物は居住的機能の大型建物と倉庫の機能の小型総柱建物があり、井戸や竈か爐の下部施設も確認している。生産域は遺跡東端部に広がっていた可能性が高い。Ⅳ段階（11世紀前半）：前段階の居住域を踏襲するが、新たに板塀や区画溝などで三方を区画する居住域が形成される段階で、南側には墓の可能性がある遺構も認められる。この段階の後半には、建物などの居住施設が消滅し、一部が生産域に転換される時期を経て、集落が衰退していくものと推測される。また、棒状尖底形の製塙土器が複数の遺跡から数点ずつ出土している。現在の海岸線からは南へ約7～8km入った場所に位置するが、この時期には製塙土器が製品として広範囲に流通していた可能性が高い。

鎌倉・室町時代

大槻ブンゾ遺跡、大槻キッチャマエダ遺跡、春木マエダ遺跡、春木A・B遺跡で遺構、遺物を確認している。大槻キッチャマエダ遺跡では、井戸や鞍部から13世紀前半の土師器や珠洲焼、15世紀後半～16世紀の土師器、珠洲焼と共に漆器碗が出土している。また、上部が炭層で覆われた井戸や壁面の焼けたピットが検出されており、火災後のかたづけ跡の可能性も想定している。大槻ブンゾ遺跡では、13世紀中葉～15世紀前半頃にかけて存続した集落跡を確認している。北側では上下2層の遺構検出面を確認し、遺構の変遷を大きく2段階に区分している。Ⅰ段階（13世紀中葉～14世紀中葉）：掘立柱建物や井戸などの明確な居住施設が確認できる段階で、土器組成は珠洲焼片口鉢、壺、甕、土師皿、白磁皿、青磁碗などで構成される。土師皿は法量で比較的の明瞭に大・小を区分でき、14世紀前葉以降には口縁部に灯芯油痕跡が付く資料も認められる。Ⅱ段階（14世紀後葉～15世紀前半）：前段階の居住域を踏襲し、掘立柱建物や井戸などの明確な居住施設が確認できる段階で、土器組成は、珠洲焼片口鉢、壺、甕、土師皿、瀬戸天目茶碗、瀬戸卸皿、瀬戸袴腰形香炉、瀬戸水滴、青磁皿などで構成され、柱穴出土の珠洲焼卸皿は初見例である。珠洲焼はV期、瀬戸は古瀬戸後期のものが主体を占める。土師皿の法量は、大皿、小皿の法量差がやや不明瞭になる。また、前段階と比べて灯芯油痕の付着するものが増加する。また、砥石や石臼、硯などの石製品や銅製柄の小柄、室町時代～戦国期頃の笄、刀子、鑿、鍋、鎌、釘、鉄砲玉、錢貨などの金属製品が出土している。銅錢は排水溝掘削時にピットから繙き状態で出土した。木製品では柱根、礎板、井戸枠部材、杭、漆器碗・皿、曲物、箸、下駄、呪符木簡が出土した。掘立柱建物柱根の材は全てクリの芯持材を用いているが、井戸枠部材は横桟の1点がクリである以外はスギを用いている。また、井戸の横桟と縦板には、井戸枠の構築には不要な木釘や釘の痕跡が認められるものも存在することから、建築部材を転用していた可能性が高い。遺跡の所在する旧鳥屋町の地質は脆弱地盤であるため、建物の柱など長大・多量の木材を要するものはクリを使用し、板材を要するものを主体に割裂性の大きなスギを用いることで、森林（針葉樹材）資源の不足に対応していた可能性が高い。なお、縦板を転用した縦板や表裏面に切り傷をもち、まな板などの作業台として転用された可能性が高い曲物底板など部材の転用が多く見られる。また、井戸の縦板外側に接して出土した呪符木簡は、表面には「（符録）パン（梵字）水從竹迫流出資」、裏面には「☆」が墨書きされており、井戸を設置する際に水が絶えず湧き出でることを願ったまじないを行ったものと考えられる。

以上、各遺跡の消長を時代・時期ごとに概略した。簡単にまとめると、春木ハチノタ遺跡では奈良時代～平安時代にかけての屋敷跡と耕作地の変遷が4段階で確認でき、大槻ヤマゾ遺跡では鞍部から弥生時代～平安時代にかけての祭祀や儀礼に関する遺物や文字関連資料が多く出土しており、大槻キ

ッチャマエダ遺跡では鎌倉・室町時代の井戸や掘立柱建物が、大槻ブンゾ遺跡では奈良・平安時代や鎌倉・室町時代の鍛冶関連遺物と金属製品が出土し、鎌倉・室町時代では屋敷の変遷が2段階で確認でき、掘立柱建物柱穴や井戸から土師皿や珠洲焼をはじめとする陶器類が多く出土しており、縄銭も出土している。

おわりに

大概・春木遺跡群は、羽咋より邑知潟、西往来を経て七尾西湾へと抜ける交通路の要衝であり、元来人の往来が激しい地であったと推測され、縄文時代より生活の痕跡が確認できる。弥生時代後期後半になり集落跡や土器の出土量が増加し、過去の調査でも古墳時代初頭にかけて丘陵上を中心に集落域が広がっていったことが確認されていることから、弥生時代以降旧二宮川の水利を生かした水田耕作が実施されていたと想定できる。また、周辺の丘陵上では古墳時代初頭に古墳が築かれ、前期を中心にして多数の古墳群が形成される。古墳時代中期以降、奈良・平安時代にかけて須恵器や瓦を生産した窯跡群が築かれたり、国分尼寺と考えられている七尾市千野庵寺の瓦も焼かれている。この地は平安時代末頃には一青荘の範囲に含まれることが文献で言われており、鎌倉・室町時代になり荘園拡大に伴う開拓や新たな集落の形成が行われ、集落は自然条件の影響による小規模な移動を繰り返しながらも継続していたと想定している。また、文献資料では戦国期から江戸時代にかけてこの地で何度も一向一揆や大槻合戦などの争いが行われていたと伝えられているが、今回一揆や合戦の直接の証拠となる成果は得られなかった。推測の域を出ないが、大槻ブンゾ遺跡や大槻キッチャマエダ遺跡で確認された火災を受けた可能性のある痕跡は、これら争いの影響による建物焼失に伴う可能性もある。今回の調査で確認した遺構や遺物はこれら活動の一一部であると考えているが、これらを地域の中で位置づけていくためには書ききれなかった部分も多く、今後の課題としていきたい。

第1表 各遺跡の消長一覧表

遺跡名	縄文時代	弥生時代	古墳時代	奈良時代	平安時代	鎌倉時代	室町時代	江戸時代
大槻ブンゾ遺跡								
大槻ヤマゾ遺跡								
大槻キッチャマエダ遺跡								
春木マエダ遺跡								
春木A・B遺跡								
春木キッショウ遺跡								
春木ハチノタ遺跡								

活動：低  活動：高

写 真 図 版



1・2区 完堀状況（北東から）



2区 完堀状況（南西から）



3区 完堀状況（北から）



3区下層 完堀状況（南から）



4・3区上層 完堀状況（南から）



4区下層・5区 完堀状況（北から）



6区 完堀状況（北から）



7-A区 完堀状況（北から）

大槻ワニンジ遺跡



3区・B区上層 全景（東側上から）



C区上層北側 全景（東側上から）



C区上層南側 全景（東側上から）



遺跡遠景（北上空から）



A区上層 完塙状況（北東から）



B区上層 完塙状況（北から）



B区上層 完塙状況（南から）



B7区 SK29遺物出土状況（南から）



B5区 SK35土層断面（東から）



B3区 SK42土層断面（西から）



B1区 SK79土層断面（西から）

大槻ワニゾ遺跡



C区上層 完堀状況（北西から）



C区上層 完堀状況（南東から）



C 6 区 SE 1 井戸枠検出状況（南から）



C 6 区 SE 2 石組検出状況（南東から）



C-3・4 区 SE 4 土層断面（南西から）



C3区 SE5・12周辺完堀状況（北東から）



C6区 SE1 土層断面（北南西から）



C3区 SX45①遺物出土状況（南西から）



C7区 SK8 遺物出土状況（北東から）



B区下層 完堀状況（南から）

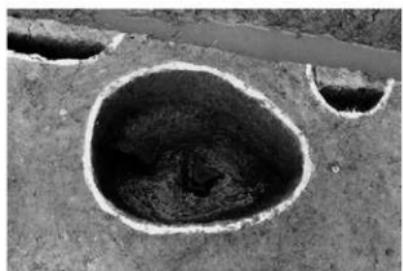
大根ワニンジ遺跡



B区下層 完堀状況（北から）



B 3 区 P404柱根検出状況（東から）



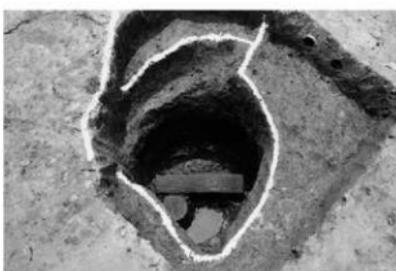
B 5 区 P422遺物出土状況（西から）



B 6 区 P448土層断面（西から）



B 4 区 SK101土層断面（東から）



B 4 区 SK101遺物出土状況（北西から）



B 3 区 SX101遺物出土状況（南東から）



B 4 区 SE101土層断面（東から）



C区下層 完堀状況（北西から）



C区下層 完堀状況（南東から）



C1区 SK105土層断面（北東から）



C1区 SK105遺物出土状況（南東から）



C3区 SK112・113遺物出土状況（南西から）



C1・2区 SE6呪符木簡出土状況（西から）



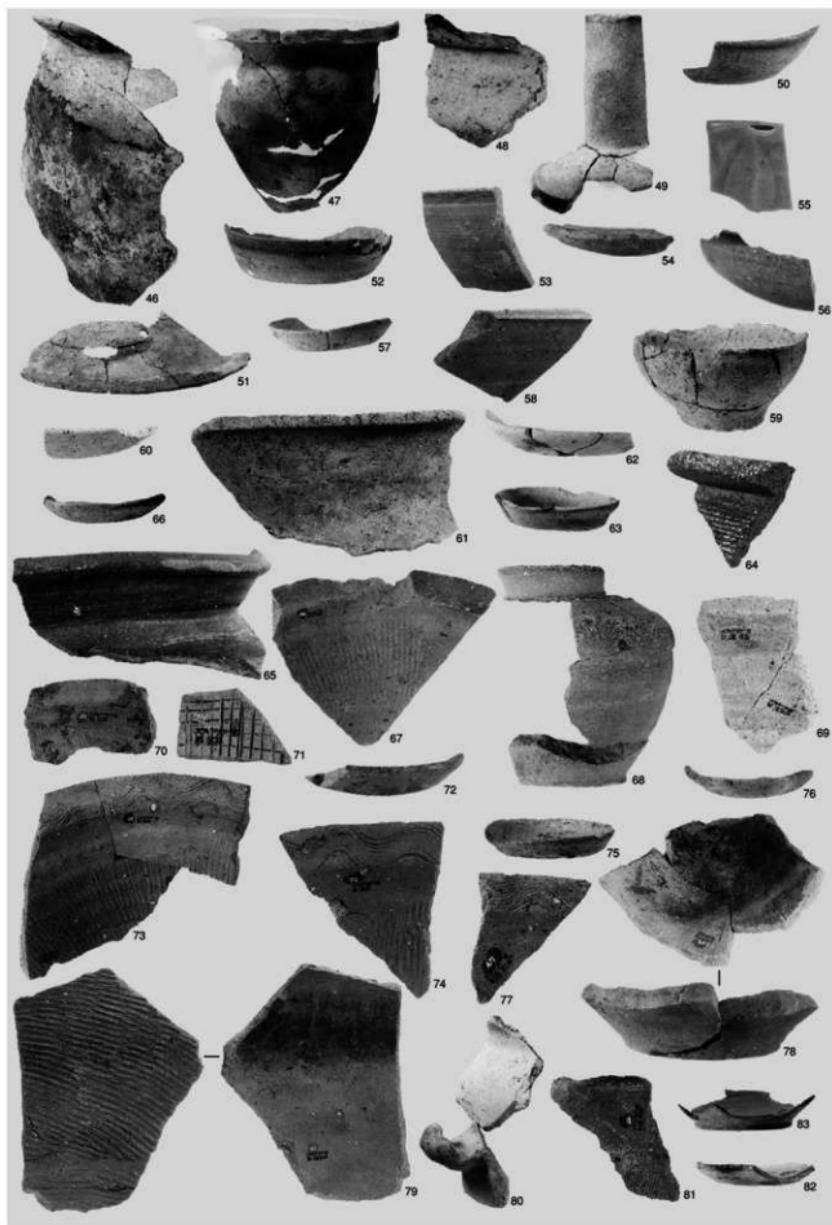
C1・2区 SE6井戸枠検出状況（南から）



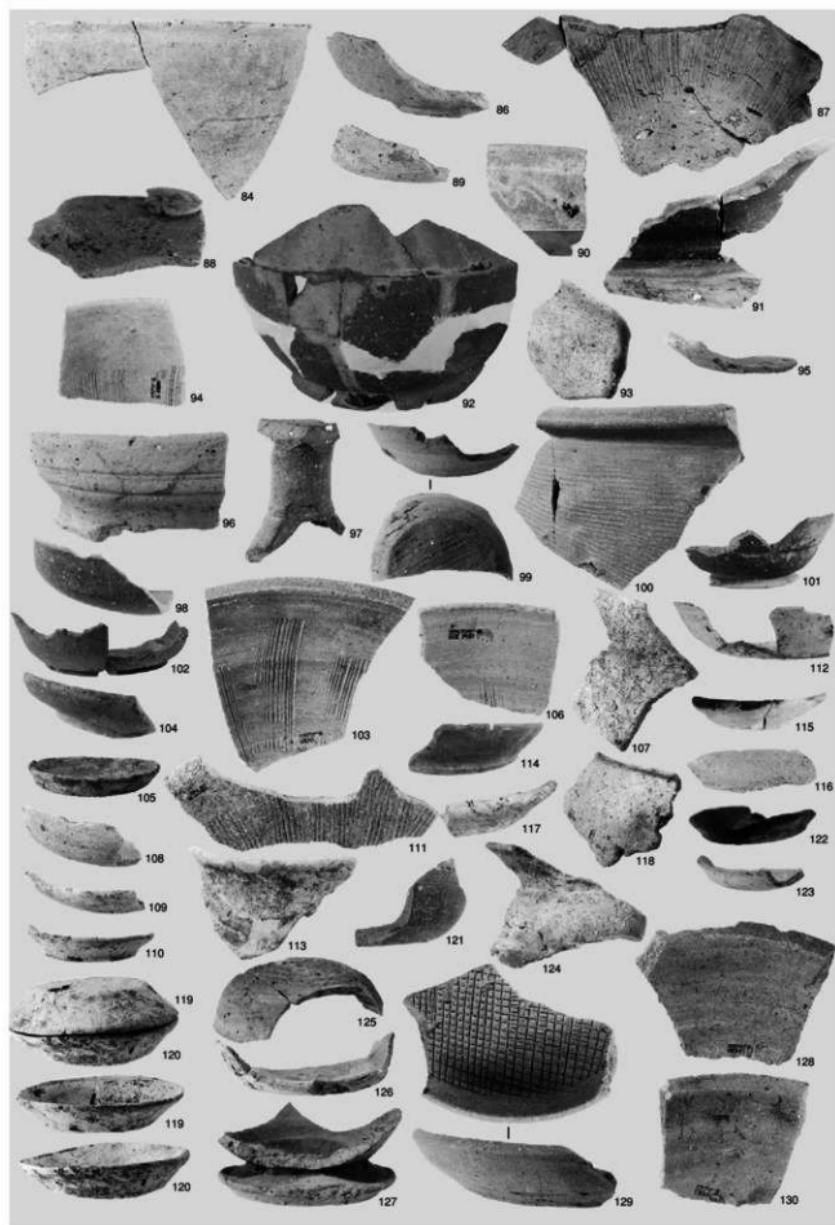
C1・2区 SE6完堀状況（東から）



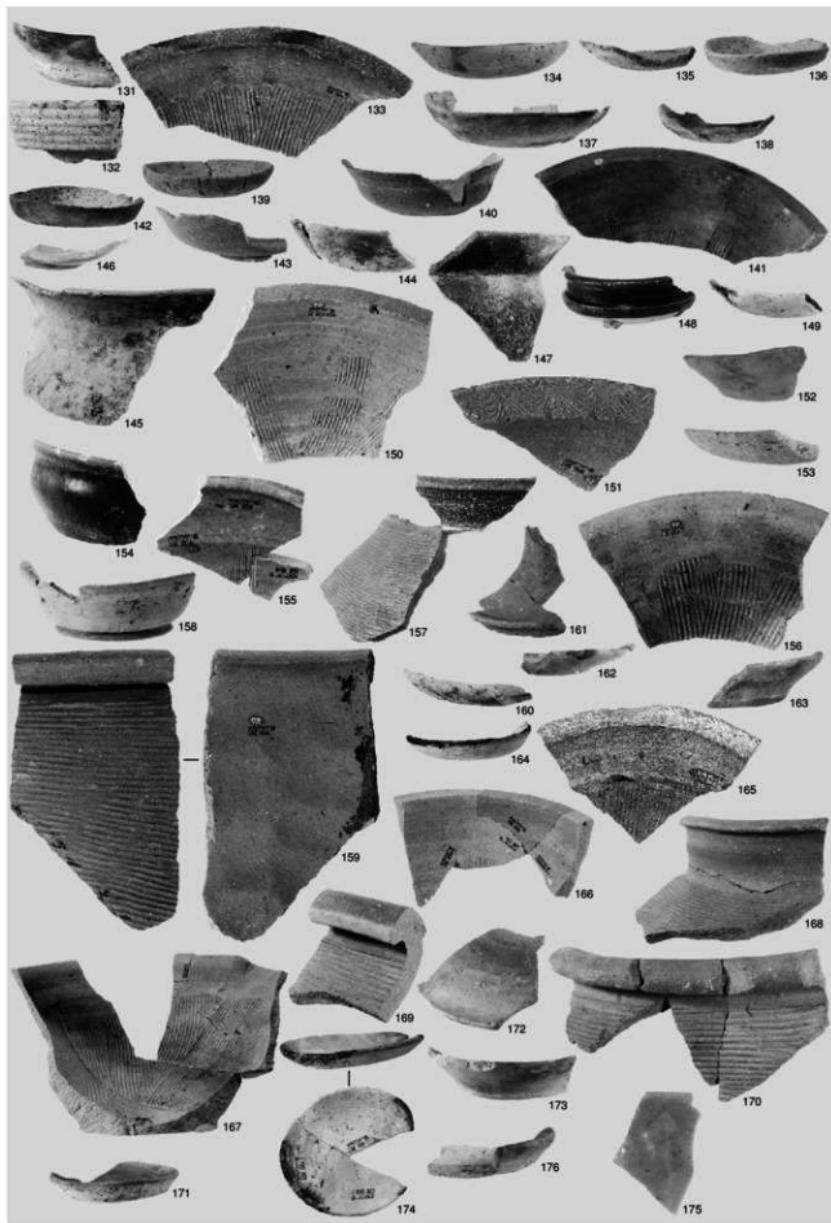
出土土器・陶磁器 1



出土土器・陶磁器 2



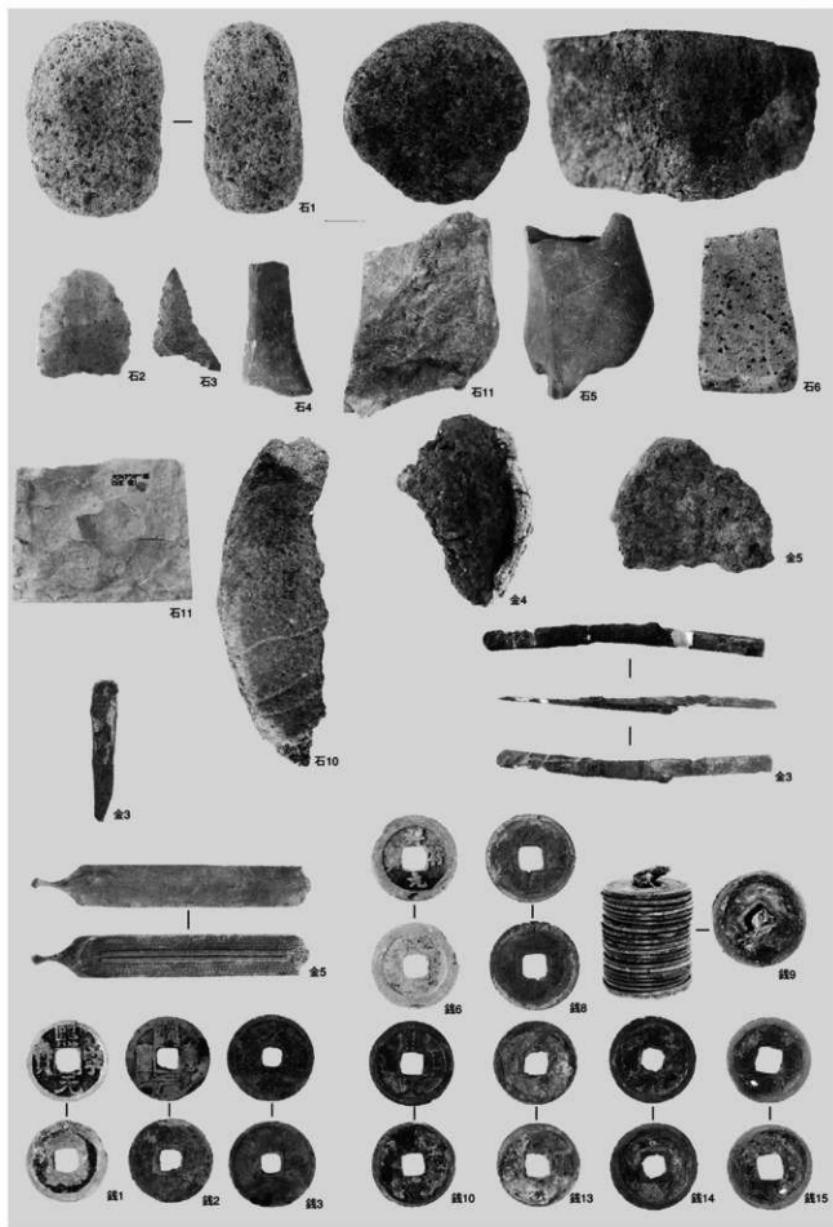
出土土器・陶磁器 3



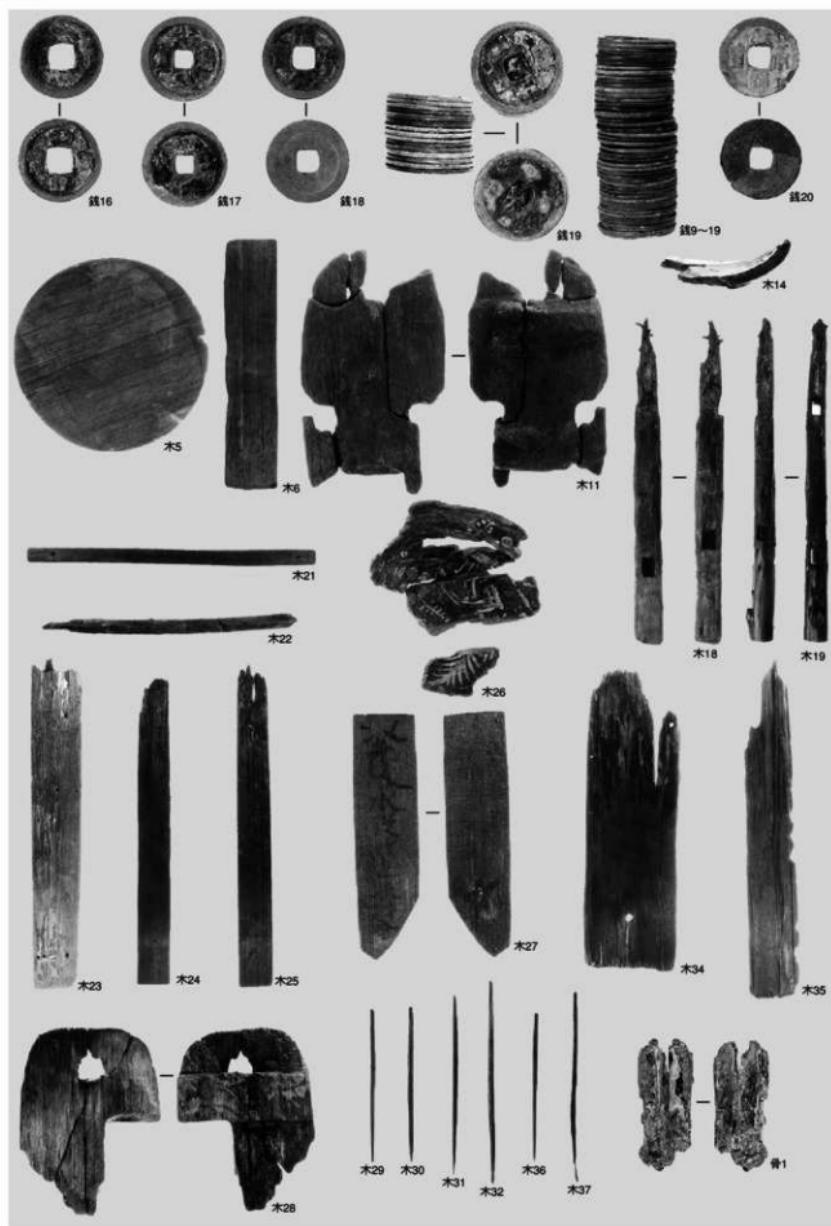
出土土器・陶磁器 4



出土土器・陶磁器 5



出土石製品・金属製品1



出土金属製品1・木製品



1区下層 完掘状況（北から）



2区 遺構検出状況（南から）



3区下層 完掘状況（南から）



3区下層 完掘状況（北から）



4区上層 完掘状況（南から）



4区下層 完掘状況（南から）



SD1 (4-4区) 完掘状況（南から）



鞍部2上層 (4-3・4区) 遺物出土状況（南から）



鞍部2上層（4-4区） 遺物出土状況（東から）



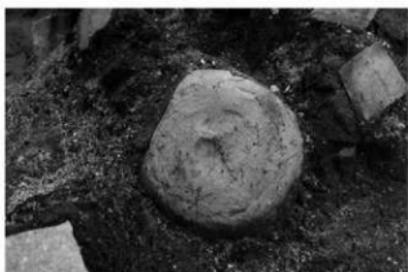
鞍部2下層（4-3・4区） 遺物出土状況（東から）



鞍部3上層（4-1・3区） 遺物出土状況（北から）



鞍部3上層（3-3区） 遺物出土状況（西から）



鞍部3上層（4-2区） 墨書き土器（65）出土状況



鞍部3中層（4-2区） 墨書き土器（118）出土状況



鞍部3上層（4-2区） 橫櫛（190）・曲物（201）出土状況



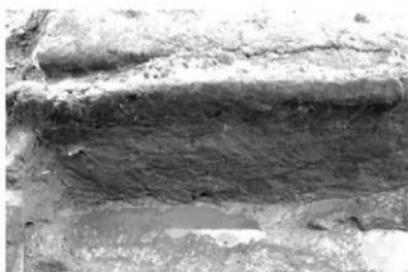
鞍部2・3上層（4-2区竜張部） 土器（26・27）出土状況（西から）



鞍部4上層(1区) 遺物出土状況(南から)



鞍部4上層(1-3区) 石製品(208)出土状況



鞍部1東壁 土層断面(西から)



鞍部2東壁 土層断面(西から)



鞍部2西壁 土層断面(東から)



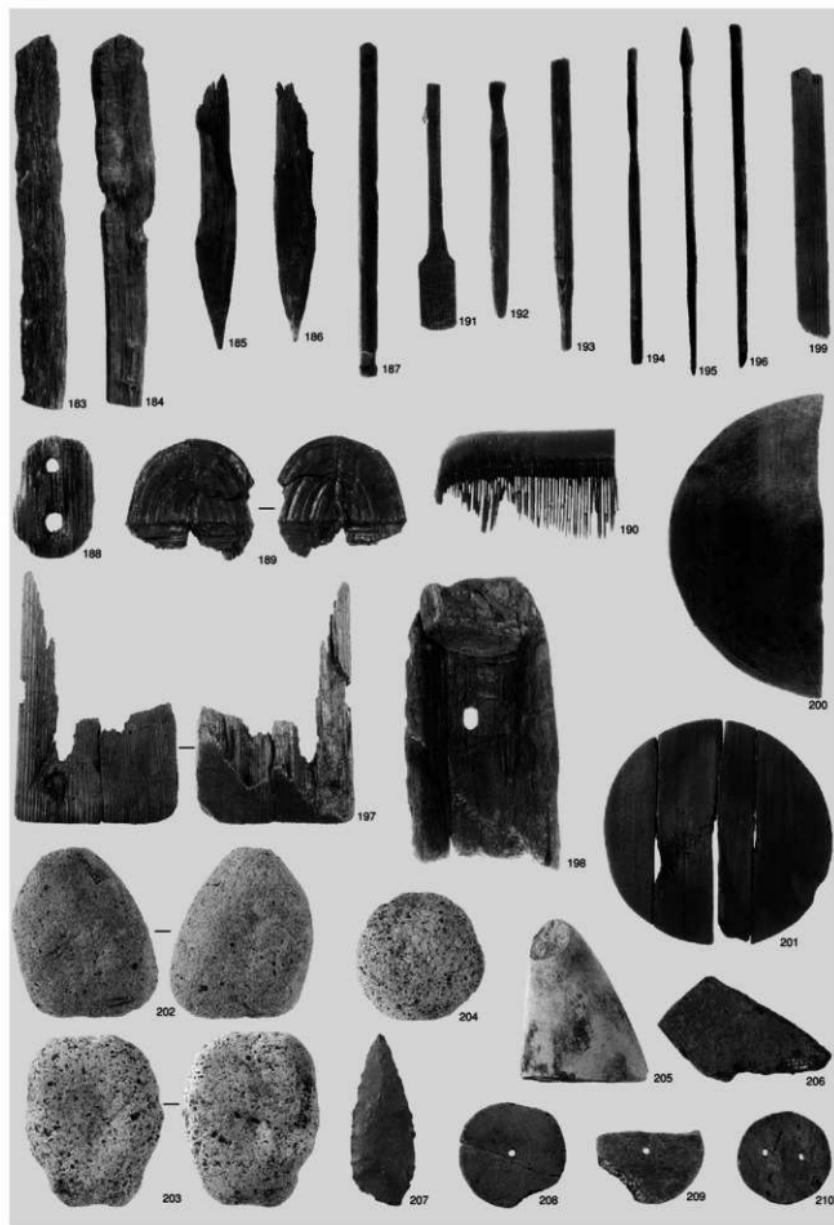
鞍部3東壁 土層断面(西から)



鞍部4東壁 土層断面(西から)



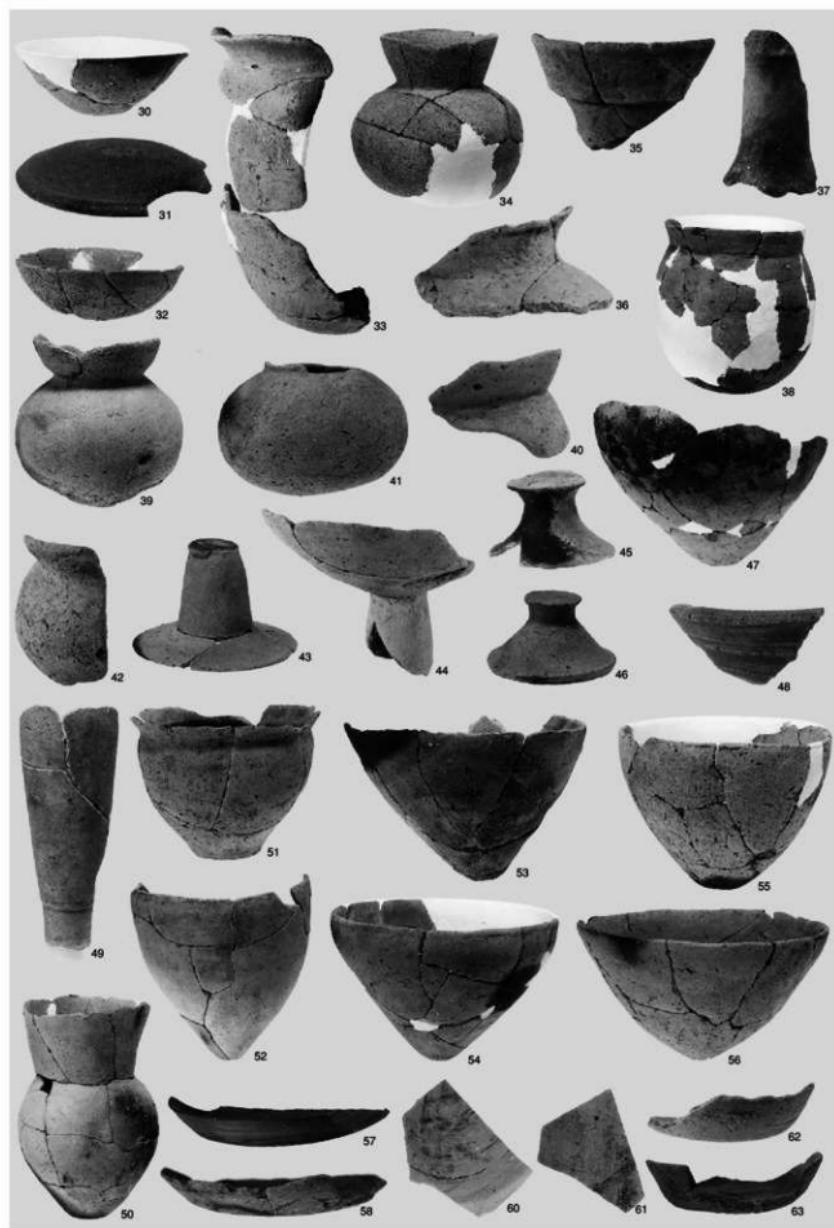
SX5 土層断面(北から)



出土遺物 1



出土遺物 2



出土遺物 3



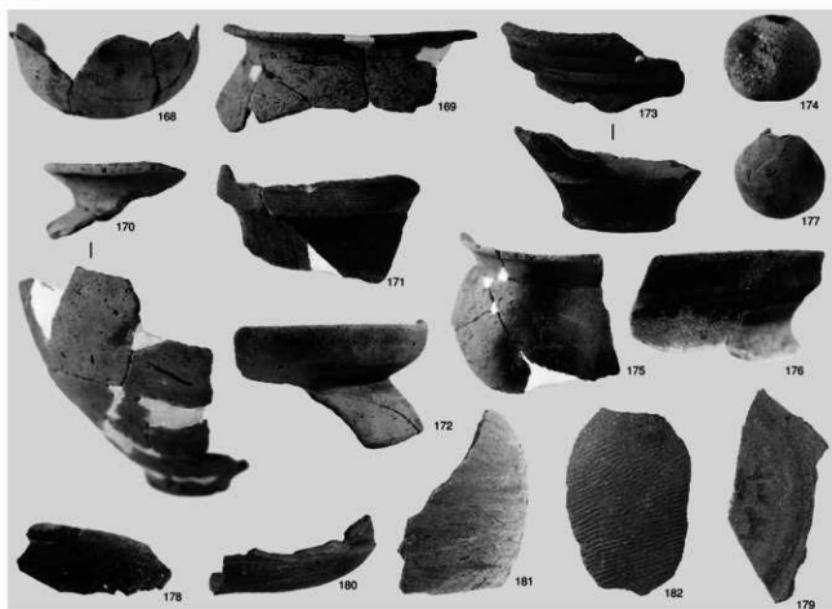
出土遺物 4



出土遺物 5



出土遺物 6



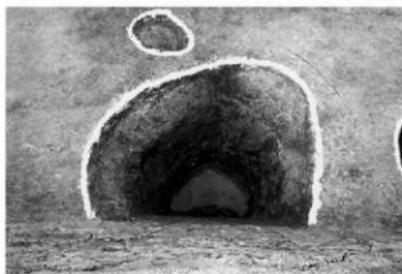
出土遺物 7



遺跡発堀状況（西から）



遺跡発堀状況（東から）



SK02土層断面（南から）



SK03土層断面（北から）



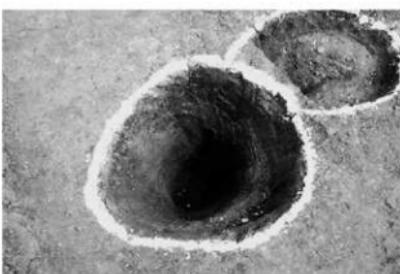
SK06土層断面（南から）



SK07土層断面（北から）



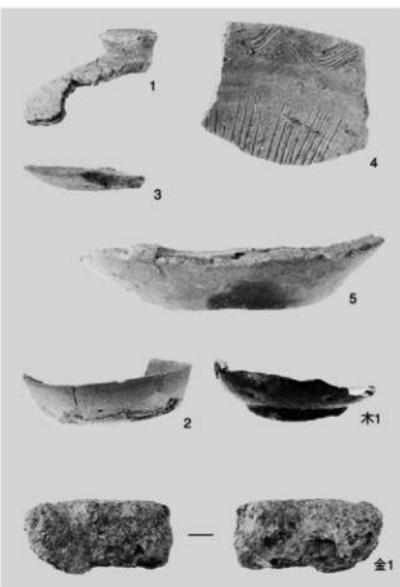
SK08土層断面（北から）



P03完壙状況（西から）



P14柱根検出状況（南から）



出土遺物



SK10桶検出状況（西から）

春木マエダ遺跡



A区 完堀状況（南から）

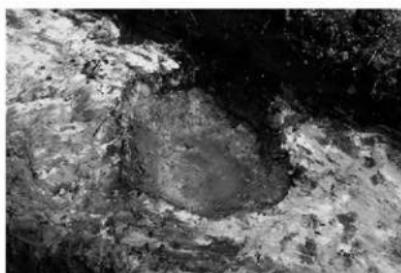


B区 完堀状況（北から）

春木A・B遺跡



遺跡完堀状況（西から）



P01完堀状況（北西から）

春木キツシヨウ遺跡



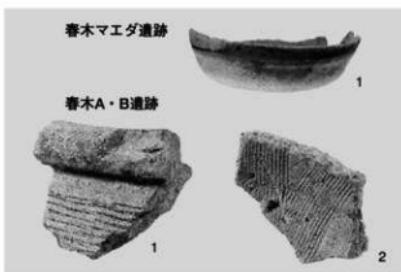
遺跡完堀状況（北から）



1・2区 完堀状況（南西から）



3区 完堀状況（北東から）



春木マエダ遺跡

春木A・B遺跡



a



遺跡全景（北東から）



試掘調査状況（2005.11.24）



試掘調査状況（2005.12.03）



A地区 工事立会範囲全景（東から、2005.12.19）



A地区 挖立柱建物柱穴集中箇所（東から、2005.12.19）



B地区 工事立会状況（北東から、2006.2.21）



B地区 工事立会 遺構実掘状況（北から、2006.2.21）



C地区 遺構検出状況（東から）



C地区 SB4 完掘状況（北から）



C地区 SB5 完掘状況（東から）



C地区 SB5-P26 柱根検出状況



C地区 SB5-P27 柱根検出状況



C地区 SB6 完掘状況（西から）



C地区 SK6 挖削作業状況（南から）



C地区 SK6 土層断面（東から）



C地区 P16 柱根検出状況（南から）



C地区 P19 木製品出土状況（北から）



C地区 SA1 完掘状況（西から）



C地区 耕作溝 挖削作業状況（東から）



C地区 SD13・22 土層断面（北から）



C地区 SD18 土層断面



出土遺物1（土師器・須恵器）



出土遺物2（土師器・須恵器・土製品）



出土遺物3（木製品）

報告書抄録

ふりがな	なかのとまちおおづき・はるきいせきぐん（おおづきぶんぞいせき、おおづきやまぞいせき、おおづききつちやまえだいせき、はるきまえだいせき、はるきA・Bいせき、はるききつしういせき、はるきはちのたいせき）							
書名	中能登町大槻・春木遺跡群（大槻ブンゾ遺跡、大槻ヤマゾ遺跡、大槻キッチャマエダ遺跡、春木マエダ遺跡、春木A・B遺跡、春木キッショウ遺跡、春木ハチノタ遺跡）							
副書名	県営ほ場整備事業（鳥屋西部地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	安中哲徳、林 大智、森 由佳							
編集機関	財団法人石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18-1 TEL076-229-4477							
発行機関	石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	2009年3月31日							
所 収 遺 跡 名	所 在 地	コ ー ド	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
	市町村	遺跡番号						
大槻ブンゾ遺跡、 大槻ヤマゾ遺跡、 大槻キッチャマエ ダ遺跡、春木マエ ダ遺跡、春木A・ B遺跡、春木キッ ショウ遺跡、春木 ハチノタ遺跡	石川県鹿島郡 中能登町大槻、 春木地内	17207	春木A・ B遺跡 (32058)	37度 0分 48秒	136度 54分 14秒 ～ 36度 59分 57秒	20050728 ～20051221 20060515 ～20060705 20061108 ～20061221	1,500m ² 1,290m ²	県営ほ場整 備事業（鳥 屋西部地区）
所 収 遺 跡 名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
大槻ブンゾ遺跡	集落	弥生時代～中世	掘立柱建物、竪穴建物、 井戸、土坑、溝、小穴	弥生土器、土師器、須恵器、珠 洲焼、陶磁器、製塙土器、石製 品、木製品、金属製品、銅鏡				
大槻ヤマゾ遺跡	集落	弥生時代～平安 時代	溝、小穴	弥生土器、土師器、須恵器、石 製品、木製品				
大槻キッチャマエダ遺跡	集落	弥生時代～中世	掘立柱建物、井戸、土坑、 溝、小穴	弥生土器、土師器、須恵器、珠 洲焼、木製品、金属製品				
春木マエダ遺跡	集落	奈良時代～中世	土坑、溝、小穴	土師器、須恵器、珠洲焼、陶磁 器、木製品				
春木A・B遺跡	集落	弥生時代～中世	土坑、溝、小穴	弥生土器、土師器、須恵器、珠 洲焼				
春木キッショウ遺跡	集落	古墳時代～中世	土坑、溝、小穴	土師器、須恵器、陶磁器				
春木ハチノタ遺跡	集落	弥生時代～平安 時代	掘立柱建物、井戸、土坑、 溝、小穴	弥生土器、土師器、須恵器、製 塙土器、木製品				
要約	<p>大槻ブンゾ遺跡では、二宮川左岸の段丘上に弥生時代～中世の遺構を多く確認した。掘立柱建物柱穴や井戸、土坑等からは、土師器や珠洲焼、石製品、木製品、金属製品等の遺物が多く出土しており、中世の井戸からは水がよく出るためのまじないと考えられる祝符木簡も出土している。</p> <p>大槻ヤマゾ遺跡では、丘陵際に弥生時代の鞍部を確認した。弥生土器や土師器、須恵器、木製品等が多量に出土しており、石製模造品や墨書き等も出土している。遺跡の中心は調査区西側の丘陵上に存在すると考えられる。</p> <p>大槻キッチャマエダ遺跡では、弥生時代～中世の掘立柱建物や井戸から弥生土器や土師器、珠洲焼等の遺物が出土した。東側の鞍部からは須恵器も出土している。</p> <p>春木マエダ遺跡、春木A・B遺跡、春木キッショウ遺跡とも、遺構・遺物の出土は散発的であった。遺跡の中心は隣接した丘陵上に存在しているものと考えられる。</p> <p>春木ハチノタ遺跡では、奈良・平安時代の板塀や溝で囲まれた屋敷地内に掘立柱建物や井戸、畠溝群等を確認し、土師器や須恵器等が出土した。包含層や遺跡周辺の落ち込みからは弥生土器も出土している。</p>							

PDFあり。

中能登町 大槻・春木遺跡群

発行日 平成21(2009)年3月31日

発行者 石川県教育委員会

〒920-8575 石川県金沢市鞍月1丁目1番地

電話 076-225-1842 (文化財課)

財團法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1

電話 076-229-4477

E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印 刷 株式会社 ハクイ印刷